

津軽地域高校生の就業と地元意識に関する
意識調査報告書

弘前大学人文社会科学部

2024年6月

はじめに

本調査報告書は、弘前大学若年地元定着研究プロジェクトグループが弘前市のご協力を得て、2023年12月に実施した「津軽地域高校生の就業と地元意識に関する意識調査」の結果をまとめたものであります。

近年、少子化に伴う人口減少が急激に進んでいます。この人口減少の加速を止めないと地域の経済だけでなく、地域の存続が危うい状態に陥ることが予想されています。そのような急激な人口減少には、地方から東京圏へ流れる若年者の人口移動が大きな要因となっています。その結果で現れる東京一極集中を止めることが急務であります。そこで、本調査はこの地域の若年者の県外流出を抑制し、地元定着を促進するための対策を講ずるべく、その基礎資料を作成することをねらいとしています。

若年者の県外流出は、高校卒業時点と大学などの卒業時点、この二つのライフイベントに集約されています。本調査では、高校卒業時点に焦点を当て、高校生の地元就職や進学の実態やその理由、地元意識などを把握することで、県外流出の要因を明らかにし、地元定着を促進するための施策につなげることを目指しています。

本調査報告書が、若年者の地元定着支援策を模索し、マクロ的には人口減少を食い止める有効な対策を立案する上で、基礎資料として一助になれば幸いです。この調査にあたり、ご協力いただきました津軽地域の各高校の関係者及び高校生の皆さまに、心から感謝申し上げます。

2024年6月

調査代表者

弘前大学人文社会科学部・教授・李永俊

目次

| | | |
|------------|---------------------------------|-----------|
| 第1章 | 調査の概要 | 1 |
| 1.1 | 調査の目的 | 1 |
| 1.2 | 調査方法 | 2 |
| 1.3 | 調査結果の概要 | 3 |
| 1.4 | 本報告書の概要 | 6 |
| 第2章 | 進学者の進路選択行動 | 7 |
| 2.1 | はじめに | 7 |
| 2.2 | 個人属性別進路 | 7 |
| 2.3 | 進学のエconomicモデル | 8 |
| 2.4 | 記述統計 | 9 |
| 2.5 | 小括 | 15 |
| 第3章 | 就職希望者の進路選択行動 | 17 |
| 3.1 | はじめに | 17 |
| 3.2 | 記述統計 | 19 |
| 3.3 | 希望就職地選択行動の推計 | 24 |
| 3.4 | 小括 | 25 |
| 第4章 | 高校生の地元に対する意識と個人・世帯属性の関連性 | 27 |
| 4.1 | はじめに | 27 |
| 4.2 | 個人の属性と地元に対する意識の関係 | 27 |
| 4.3 | 世帯の属性と地元に対する意識の関係 | 28 |
| 4.4 | まとめ | 31 |
| 第5章 | 地元に対する意識と家庭外の活動の関係 | 34 |
| 5.1 | はじめに | 34 |
| 5.2 | 高校の選択と地元に対する意識の関係 | 34 |
| 5.3 | 家庭外の活動と地元に対する意識の関係 | 37 |
| 5.4 | まとめ | 50 |
| 第6章 | 地元に対する意識と進路選択の関係 | 53 |
| 6.1 | はじめに | 53 |
| 6.2 | 地元に対する意識と進路選択の関係 | 54 |
| 6.3 | 進路選択に他者が与える影響 | 59 |

| | | |
|-----|---------|----|
| 6.4 | まとめ | 67 |
| | 回答者の集計表 | 69 |

第1章 調査の概要

李 永 俊

1.1 調査の目的

人口減少の勢いが止まらない。地方においては、人口減少による人手不足問題が日常生活で顕在化している。人手不足により、小規模商店の閉鎖が続き、高齢者が多く利用しているまちのスーパーにも無人レジが増えてきている。数少ない有人レジには長蛇の列が出来ている。また、まちの小規模商店の閉鎖に伴い買物難民となった高齢者が日常の買い物に困っているという声が各地で聞こえている。

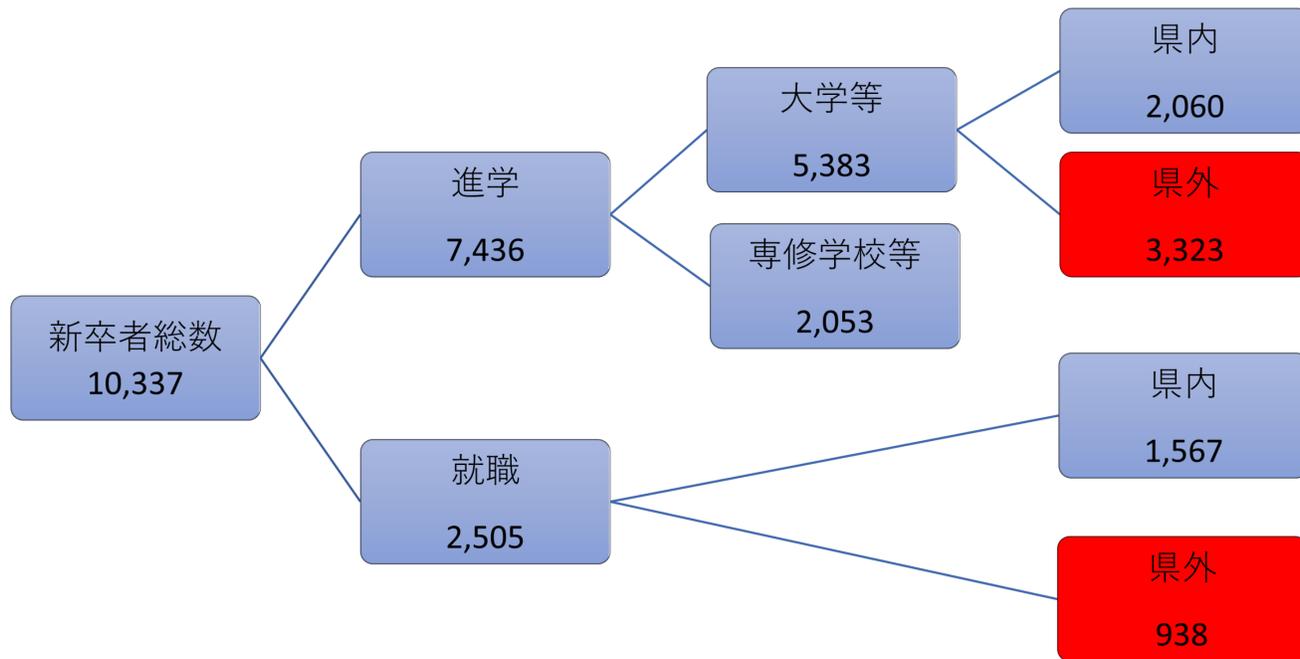
日本創生会議（座長：増田）は2014年に「2040年までに全国の約半数の896自治体で20～39歳の女性が50%以上減り、将来は消滅する可能性がある」と衝撃的な報告書を発表した。報告書では、地方から都市への人口移動が地方の過疎化を招き、地方の晩婚化・未婚化を引き起こしているという。そして、婚姻を前提とする出産が一般的な日本においては、晩婚化・未婚化は出生率の低下に直結することや、都市部では過密による生活コストや子育て費用の増加を招き、都市部の出生率を急減させているということを指摘した。つまり、地方から都市への若年層の移動は、地方と都市両方の出生率の低下を招き、マクロ全体の人口減少を加速していると警告した。

それを契機に当時の第2次安倍政権は、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を閣議決定し、地方創生と地方から都市への若者の流れを止めようと総合的な対策を講じている。しかし、2024年1月20日、日経新聞の対談で、増田氏は地方創生10年を振り返り、東京一極集中はそのまま、画期的な対策を講じなければ地方から都市への若者の流れを食い止めることは困難だという見解を明らかにしている。

地方の若者の流出は主に、高校や大学を卒業する時点での進学や就職を契機にした移動である。そのため、それぞれの移動がどのような背景と理由で起きているのかをデータに基づいて、正確に把握する必要がある。そこで、本調査では、津軽地域の高校に在学中の高校生を対象を絞り、地元就職や進学の希望の実態やその理由、地元愛着などの地元意識との関係などを把握することを目的に実施したものである。

図1.1は文部科学省の学校基本調査を用いて、2022年3月に青森県内の高校を卒業した若者の進路を経路別に整理したものである。高校を卒業した10,337名の内、進学した者は7,436名（71.9%）で、就職した者は2,505名（24.2%）であった。進路先や就職先の県内・県外別では、就職者は37.4%（938/2505）が県外を選択している。他方、把握が可能な大学等への進学者については61.7%（3323/5383）が県外の進学先を選択していることが分かる。就職と進学のそれぞれの経路において、どのような背景や理由で県外を選択しているかを正確に把握することが、効率的な政策を立案するためには必要不可欠である。本報告書では、各経路別にその背景と理由に焦点を当てて分析を行っている。ここでは、本調査の概要を紹介したい。

図 1.1: 青森県内高卒者の進路経路



出所：文部科学省「学校基本調査」。

注：進学も就職もしていない者が 396 名である。大学等の県内・県外別の人数は入学者のデータに基づいている。

1.2 調査方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

- ・調査対象者

調査対象は、津軽地域の 12 校の 2 年次在学学生 2007 名を調査対象とした。

- ・抽出方法

サンプルの抽出は行わず、全数調査を実施した。

- ・調査法

インターネット調査

- ・調査期間

2023 年 12 月

1.3 調査結果の概要

○ 回収状況

対象者からの回答は 1098 票で、有効回答率は 1098/2007 で 54.7 % だった。

○ 回答者のプロフィール

表 1.1: 性別構成比

| | 度数 (人数) | 構成比 (%) |
|-------|---------|---------|
| 男性 | 468 | 42.6 |
| 女性 | 591 | 53.8 |
| 回答しない | 39 | 3.6 |
| 合計 | 1098 | 100.0 |

表 1.2: 学科別構成比

| | 度数 (人数) | 構成比 (%) |
|-------|---------|---------|
| 普通科 | 626 | 57.0 |
| 専門学科 | 316 | 28.8 |
| 特進クラス | 83 | 7.6 |
| 総合学科 | 31 | 2.8 |
| 定時制 | 42 | 3.8 |
| 合計 | 1098 | 100.0 |

表 1.3: 進路別構成比

| | 度数 (人数) | 構成比 (%) |
|---------|---------|---------|
| 進学 | 840 | 76.5 |
| 就職 | 155 | 14.1 |
| 決めかねている | 103 | 9.4 |
| 合計 | 1098 | 100.0 |

表 1.4: 進学希望者の第一希望の進学先の所在地（回答者：進学希望者 840 名）

| | 度数（人数） | 構成比（%） |
|-------|--------|--------|
| 北海道 | 53 | 6.3 |
| 青森県 | 403 | 48.0 |
| 岩手県 | 29 | 3.5 |
| 秋田県 | 11 | 1.3 |
| 宮城県 | 134 | 16.0 |
| 山形県 | 5 | 0.6 |
| 福島県 | 6 | 0.7 |
| 関東甲信 | 155 | 18.5 |
| 東海・北陸 | 17 | 2.0 |
| 近畿 | 23 | 2.7 |
| 中国・四国 | 3 | 0.4 |
| 九州・沖縄 | 1 | 0.1 |
| 外国 | 0 | 0.0 |
| 合計 | 840 | 100.0 |

表 1.5: 就職希望者の希望している就職先の所在地（回答者：就職希望者 155 名）

| | 度数（人数） | 構成比（%） |
|---------|--------|--------|
| 北海道 | 0 | 0.0 |
| 青森県 | 84 | 54.2 |
| 岩手県 | 1 | 0.7 |
| 秋田県 | 0 | 0.0 |
| 宮城県 | 7 | 4.5 |
| 山形県 | 0 | 0.6 |
| 福島県 | 0 | 0.7 |
| 関東甲信 | 22 | 14.2 |
| 東海・北陸 | 3 | 1.9 |
| 近畿 | 4 | 2.6 |
| 中国・四国 | 1 | 0.7 |
| 九州・沖縄 | 0 | 0.0 |
| 外国 | 2 | 1.3 |
| 特に決めてない | 31 | 20.0 |
| 合計 | 155 | 100.0 |

表 1.6: 就職希望者の希望している会社の業種（回答者：就職希望者 155 名，複数回答可）

| | 度数（事業所数） | 構成比（%） |
|-----------|----------|--------|
| 公務 | 46 | 29.7 |
| 農林漁業 | 7 | 4.5 |
| 建設業 | 13 | 8.4 |
| 製造業 | 30 | 19.4 |
| 電気・ガス・水道業 | 33 | 21.3 |
| 運輸・通信業 | 6 | 3.9 |
| 卸売・小売業 | 14 | 9.0 |
| サービス業 | 35 | 22.6 |
| 金融・保険業 | 6 | 3.9 |
| 不動産業 | 2 | 1.3 |
| 教育・学習支援業 | 4 | 2.6 |
| 医療・福祉 | 18 | 11.6 |
| 飲食業・宿泊業 | 29 | 18.7 |
| その他 | 19 | 12.3 |

1.4 本報告書の概要

調査結果は、いくつかの視点から分析を行った。おおよそ、それぞれの視点で各章が構成されている。

第2章では、教育を投資行動として捉え、個人属性、家族環境、そして社会関係資本など個人を取り巻く諸環境に注目して、進学先の選択がどのように決定されているのかを分析した。分析の結果、進学先選択行動の決定要因としては、偏差値と家計の経済状況や家族環境からの強い拘束性や主観的な必要性が重要な要因であることがわかった。この地域の高校生は、自分の成績と家計の経済状況など環境要因を総合的に考慮し、希望進学先を選択していることが明らかになった。

第3章では、個人属性、家庭環境、社会関係資本など個人を取り巻く諸環境に注目して、高卒就職者の希望就職地選択行動の決定要因を分析した。小括すると、友人・知人数と強い拘束性が希望就職地を分けていることがわかった。言い換えると、個人属性や市場環境などは就職地選択に影響を及ぼしていないと言える。つまり、この結果は、賃金や労働条件の違いや雇用機会の格差などは高卒新卒市場においては、流出の主要因ではないことを含意している。

第4章から第6章では、地元に対する意識が他の回答項目とどのような関連を持つかを分析した。第4章では、個人及び世帯の属性と地元に対する意識の関係について分析した。分析結果からは、同居家族なども含めた家庭の状況と地元意識の間には一定の相関が見られることがわかった。特に、家庭の経済状況が悪い場合、地域に対する愛着は低いと離れるのが困難であると感じている生徒が一定以上存在することが示された。このことは、家庭の事情により消極的に地域に残らざるを得ない生徒の存在を示唆している。

第5章では、学校を中心とした社会活動と地元に対する意識の関係を分析した。分析の結果、どのような活動を行うか、よりも、そもそも何らかの活動を行うかどうか、によって地域への愛着が変わることが示された。何も活動していない生徒は、地域への愛着が低いことが示唆された。また、友人の数についても、極端に少ない場合に地域に対する愛着が低いことが示唆された。

第6章では、進路選択と地元に対する意識の関係を分析した。分析の結果、地域への愛着が低い生徒は県外への進学や、進学ではなく就職を選択する傾向が示された。また、将来の就職において重視する条件の分析からは、トレード・オフの関係が示唆された。特に、勤務地を重視した場合は給料を重視しない傾向を示していた。青森県で働くことと、高い給料を得られることは両立しないと生徒・保護者ともに感じている可能性が示唆された。

第2章 進学者の進路選択行動

李 永 俊

2.1 はじめに

この章では、高校を卒業して大学などへの進学を希望している若者が、進学先として県内か県外を選択する希望進学先選択行動について分析を行う。県内への進学は、実家から通うことも可能なので進学に伴う経済的な費用は少なく抑えることができる。ただし、大学などの高等教育機関の地域間偏在の問題があり、県内での進学だと選択肢が限られるデメリットがある。また、マクロ的に考えると、労働力は限られている資源なので、適材適所で、持っている力を最大限発揮できるような最適配分が重要である。経済的な理由で、希望している大学などへ進学できず、潜在的な能力を十分に発揮できないとすれば、個人にとって、社会にとって最適な配分とはならない。そのために、資源の効率的な活用のためにも、そして個人の幸せのためにも最適な進学先を選択できるようなサポートが必要不可欠となる。

他方、増田（2014）がいうように、若者の東京一極集中は地方圏と都市圏、両方の人口減少速度を加速し、マクロ的な人口急減につながることも懸念される。また、若者の都市部への移動は大学等の地域偏在をより顕著にし、地方での選択肢を狭める恐れもある。そこで、地域の若者がどのような基準で進学先を選択しているのかを正確に把握し、若者の最適な選択を後押しするような方策を模索することが重要である。そして、若者が求めている進学先の要件を科学的に把握し、若者が喜んで県内の大学を選択できるような環境整備が必要である。その基礎的な資料を提供することが本章の大きな目的である。

そこで、ここから進学者に注目して分析を進めるため、進路未定者 103 名と性別不明者 39 名を除いて、956 名を分析対象とする。また、4 年制大学への進学と短大・専門学校などへの進学にグループ分けして分析を行う。

2.2 個人属性別進路

表 2.1 は性別に進路希望をまとめたものである。表から 4 年制大学への進学は男女共に 6 割を超えており、進学者割合が最も高いことがわかる。短大などへの進学は、男性が 12.7 %であるのに対し、女性は 24.5 %となっており、女性の割合が 10 ポイント以上高くなっている。他方、就職希望者は男性が 20.8 %であるのに対し、女性 11.3 %となっており男性の割合が高くなっている。男女の差は、就職か短大などへの進学かで違いがあることがわかる。他方、男女問わず 4 年制大学等への進学者割合が最も高くなっていることに注目されたい。少子化が進み、子どもの数が限られると、子ども一人への教育投資が増え、ますます 4 年制大学等への進学希望者が増えることが予想される。

表 2.1: 性別進路

| | (単位：%) | |
|-----------|-------------|-------------|
| | 男性 | 女性 |
| 進学（4年制大学） | 66.6 | 64.2 |
| 進学（短大など） | 12.7 | 24.5 |
| 就職 | 20.8 | 11.3 |
| 合計 | 100.0 (547) | 100.0 (419) |

注) カイ二乗検定で 1%水準で有意であった。

表 2.2: 性別進路

| | (単位：%) | | |
|-----------|--------|------|-------------|
| | 県内 | 県外 | 合計 |
| 進学（4年制大学） | 48.7 | 51.3 | 100.0 (630) |
| 進学（短大など） | 46.5 | 53.5 | 100.0 (187) |
| 就職 | 53.7 | 46.3 | 100.0 (149) |

注) カイ二乗検定で有意ではなかった。

表 2.2 は、進路別に進路先の所在地を訪ねたものである。県内希望が最も高かったのは就職希望者で、53.7% が県内を、46.3% が県外を希望しており、県内希望者が 7.4 ポイント高くなっている。逆に県外希望者が最も多かったのは短大などへの進学希望者で、53.5% が県外を、46.5% が県内を希望している。また、4年制大学等への進学希望者も県外が 51.3%、県内が 48.7% で県外の希望者が若干高くなっている。進学希望者において、県外希望者が県内希望者を上回っていることがわかる。

2.3 進学の経済モデル

経済学では、進学行動を投資的な行動と消費的な行動として捉えている。投資的な行動として捉えるのは Berker(1993) の人的資本理論に基づいている。大学卒業後に得られる効用の現在価値の和が、大学進学に伴う費用の現在価値の和よりも高ければ大学進学が選択され、その逆の場合は進学しないことを選択するという。簡単に式で表すと次の式のようになる。

$$\begin{aligned} \text{If 進学の期待収益} &> \text{進学費用 then 進学} \\ \text{If 進学の期待収益} &\leq \text{進学費用 then 進学しない} \end{aligned}$$

等式を進学しない方で入れているのは、多くの個人は危険回避的である仮定に基づいている。

他方、消費行動として捉える場合は、大学生活から得られる効用が大学進学費用を上回る場合に進学すると考えているものである。大学生活で得られる効用には、幅広い学問に出会うことや、仲間や先輩、教員との出会い、留学、ボランティア活動、サークル活動等の経験などから得られる満足度が挙げられる。消費行動として捉えた場合は、大学生活からの効用が高い場合や、費用負担能力が高い場合に、より進学を選択する可能性が高いことがわかる。

ここからは投資的な行動として進学を捉え、進学先の選択行動について分析を進める。 V_i^j を j 地域に進学する個人 i の期待効用と定義すると、

$$V_i^j = \sum_{t=23}^{65} \frac{U_{it}^j}{(1+r)^{t-23}} - \sum_{t=19}^{22} \frac{C_{it}^j}{(1+r)^{t-19}} \quad (2.1)$$

ここで、 U_{it}^j は個人 i の t 期における j 地域での効用を示し、 C_{it}^j は個人 i が j 地域に進学した際の t 期における教育費用を表す。教育費用には、直接的な費用だけでなく、機会費用も含むものと仮定する。 r は利子率を示す。ここで、 $j = T, A$ とする。 T は東京を指し、都市圏を意味する。 A は青森県を指し、地方圏を表す。また、重要な仮定として、進学先で就職し、生涯を送ると仮定する。中には U ターンするものや地方の大学を卒業し、都市部で就職する場合もあるが、ここでは単純化のために進学先で就職するものと仮定する。以上から都市圏の大学に進学するか地方の大学に進学するかは、次の式で表すことができる。

$$\begin{aligned} \text{If } V_i^T > V_i^A & \text{ then 都市圏へ移動} \\ \text{If } V_i^T \leq V_i^A & \text{ then 地方圏で定住} \end{aligned} \quad (2.2)$$

(2.2) 式に (2.1) 式を代入すると

$$V_i^T - V_i^A = \sum_{t=23}^{65} \frac{1}{(1+r)^{t-23}} (U_{it}^T - U_{it}^A) - \sum_{t=19}^{22} \frac{1}{(1+r)^{t-19}} (C_{it}^T - C_{it}^A) \quad (2.3)$$

ここで家計の予算制約を考える。個人 i の家計の総所得を Y_i とし、 FC_i は家族構成員全員の総生活費用と考え、家計の予算制約は次のように表すことができる。

$$Y_i \geq FC_i + C_i^j \quad (2.4)$$

(2.3) 式と (2.4) 式から、移動有無は次の関数で決まることがわかる。

$$V_i^T - V_i^A = F(\text{賃金と雇用機会の差, 家計の総所得, 家族構成員総生活費用, 利子率})$$

上式から次のような仮説が成り立つ。

- 仮説 1： 賃金格差や雇用機会の差が大きいと移動が多くなる。
- 仮説 2： 世帯所得が高いと移動しやすくなる。
- 仮説 3： 兄弟が多いと移動しにくくなる

仮説 1 は、都市圏と地方圏の賃金格差が大きくなると期待効用の格差を広げ、都市圏へ移動しやすくなることを意味する。仮説 2 は、世帯総所得が高いと費用負担を軽くするので、移動しやすくなる。他方、仮説 3 は家族構成員が多いと家族の総生活費用が高くなるので、教育へ十分な費用をかけられないので、費用が少ない地方圏を選択しやすくなることを意味する。上記の仮説に沿った経済合理的な選択が行われているのかをデータを用いて検証する。

2.4 記述統計

ここでは、4年制大学等への進学者 630 名に分析対象を絞り、進学先の選択が経済合理的に行われているかを検証する。まず、記述データを用いて選択行動を概観する。

2.4.1 個人属性と希望進学先

表 2.3 は性別に希望進学先を概観したものである。男女で比較すると、男性は県外希望者が県内希望者を上回っているのに対し、女性では県外希望者が県内希望者を下回っている。ただし、カイ二乗検定では統計的な

有意な差は認められなかった。つまり、希望進学先では男女問わず県内・県外がほぼ半々になっていることがわかる。

表 2.3: 性別希望進学

(単位：%)

| | 希望進学先 | | 合計 (人数) |
|----|-------|------|-----------|
| | 県内 | 県外 | |
| 男性 | 45.2 | 54.8 | 100 (279) |
| 女性 | 51.6 | 48.4 | 100 (351) |

注) カイ二乗検定で有意ではなかった。

2.4.2 家庭環境と希望進学先

次に家族環境についてみてみよう。世帯構成員が多いと家族構成員の総生活費用が高くなるため、教育費用を抑える方向に働くことが予想される。まず、三世代ダミーをみると、三世代家族の場合、県内希望者が58.0%で、県外希望者42.0%より16.0ポイント高くなっている。三世代の場合は、祖父母の収入が世帯全体の所得を高める効果と、祖父母の存在が生活費用を高くする効果、両方が考えられる。ここでは後者の効果が強く出ていると解釈できる。

次に一人っ子ダミーをみると、県外希望者が55.1%で、県内希望者44.9%より10.2ポイント高くなっている。つまり、一人っ子の場合はより多くの教育投資が行われ、移動傾向が強まることが予想される。この結果から少子化が進むと、より一層都市圏へ移動する若者が増えることが予想される。ただし、カイ二乗検定では統計的な有意性は認められなかった。最後に、長子か否かについてみると、長子の場合は県外希望者が53.2%、県内希望者が46.8%で、県外希望者が多くなっている。ただし、統計的に有意な差は見られなかった。

表 2.4: 家族環境別希望進学先

(単位：%)

| | | 希望進学先 | | 合計 (人数) |
|---------|---|-------|------|-----------|
| | | 県内 | 県外 | |
| 三世代ダミー | 1 | 58.0 | 42.0 | 100 (418) |
| | 0 | 44.0 | 56.0 | 100 (212) |
| 一人っ子ダミー | 1 | 44.9 | 55.1 | 100 (176) |
| | 0 | 50.2 | 49.8 | 100 (454) |
| 長子ダミー | 1 | 46.8 | 53.2 | 100 (436) |
| | 0 | 53.1 | 46.9 | 100 (194) |

注) カイ二乗検定で三世代ダミーは1%水準で、一人っ子ダミーと長子ダミーは統計的に有意でなかった。

表 2.5: 両親の出身地別希望進学先

| | | (単位：%) | | |
|-------|----|--------|------|-----------|
| | | 希望進学先 | | 合計 (人数) |
| | | 県内 | 県外 | |
| 父親出身地 | 県内 | 51.7 | 48.3 | 100 (451) |
| | 県外 | 41.3 | 58.7 | 100 (179) |
| 母親出身地 | 県内 | 50.1 | 49.9 | 100 (519) |
| | 県外 | 42.3 | 57.7 | 100 (111) |
| 両親共に | 県内 | 52.3 | 47.7 | 100 (390) |
| | 県外 | 42.9 | 57.1 | 100 (240) |

注) カイ二乗検定で父親出身地と両親共には 5%水準で、母親出身地は有意でなかった。

表 2.5 は両親の出身地別に希望進学先を整理したものである。両親が県内出身であれば、県内に居住場所や社会関係資本が豊かにあることから、県内の期待効用が高く、県内に定着しやすくなると考えられる。父親出身地が県内の場合は、県内と県外が半々であるが、県外の場合は県外が 58.7%，県内が 41.3%で、県外が 17.4 ポイント高くなっている。このことは、母親の場合も同様な結果となっている。また、両親共に県外出身の場合は、県外希望者が 57.1%で県内希望者の 42.9%を大きく上回っている。この結果は、親が県外出身の場合は県外に親戚や知人などの社会関係資本があり、移動をサポートする可能性が高く、移動しやすくなる。また、県外出身の場合は、県外での居住経験や訪問経験があり、移住への心理的負担が少ないことも移動をしやすくしていると考えられる。

この点は、移住政策の観点から見れば大変重要な意味を含んでいる。つまり、移住者を受け入れても、移住した世代の次の世代は移住性向が高く、地域内に定着しにくくなるということである。そのため、移住による人口対策は短期的な効果は期待できるが、長期的に見ればその効果は限定的である可能性が高い。あるいは長期的な定着のためには、移住世帯へのよりきめ細かく継続的な支援が必要不可欠であると思われる。

表 2.6: 両親の学歴別希望進学先

| | | (単位：%) | | |
|-------|----|---------|------|-----------|
| | | 親の希望進学先 | | 合計 (人数) |
| | | 県内 | 県外 | |
| 父親出身地 | 県内 | 76.5 | 23.6 | 100 (603) |
| | 県外 | 10.6 | 89.5 | 100 (237) |
| 母親出身地 | 県内 | 75.4 | 24.6 | 100 (696) |
| | 県外 | 36.1 | 63.9 | 100 (144) |

注) カカイ二乗検定で父親、母親共に 1%水準で有意であった。

表 2.6 は、親の学歴別に希望進学先をまとめたものである。学歴によって所得が異なることは国内外の多くの研究で実証されている。学歴が高ければ所得水準が高くなる。家計所得水準が高ければ、教育に多くの費用をかけることができる。つまり、親の教育水準が高ければ、県外へ進学しやすくなることを意味する。表 2.6 から父親と母親の学歴が短大・大学卒以上の場合は、県内希望者が 4 割強で、県外希望者が約 6 割であることがわかる。県外希望者が約 20.0 ポイント高くなっている。高卒以下の場合は、逆に県内希望者が約 20.0 ポイ

ント高くなっている。この結果はカイ二乗検定でも1%水準で有意で、親の学歴と希望進学先には統計的に有意な違いがあることがわかる。次に家計の主観的経済状況と希望進学先の関係をみたのが表7である。仮説2と3でみたように、家族の総所得水準が高く、家族構成員の総生活費用が低ければ、教育により多くの投資が行われることが予想される。今回の調査は高校生を対象に調査を実施しているため、親の収入を正確に把握しているとは考えにくい。また、家計の総支出についても正確に把握していることは期待できない。そこで、家計の経済状況については主観的な評価を用いる。質問紙では、「現在のご家族の暮らしの状況を経済的にみてどう感じていますか」と尋ね、「大変苦しい」から「大変ゆとりがある」の5段階で回答を得た。表7が各段階別に希望進学先をまとめたものである。表から暮らしの状況が苦しいほど県内希望者が多く、ゆとりがあるほど県外希望者が多くなっていることがわかる。仮説2と3に合致した結果となっている。カイ二乗検定でも1%水準で有意で、グループ間に統計的に有意な差が存在していることがわかる。

表 2.7: 家計の経済状況と希望進学先

| | | (単位：%) | | |
|--------|----------|--------|------|-----------|
| | | 希望進学先 | | 合計 (人数) |
| | | 県内 | 県外 | |
| 暮らしの状況 | 大変苦しい | 66.7 | 33.3 | 100 (12) |
| | やや苦しい | 53.9 | 46.2 | 100 (117) |
| | ふつう | 50.4 | 49.6 | 100 (345) |
| | ややゆとりがある | 37.9 | 62.1 | 100 (103) |
| | 大変ゆとりがある | 43.4 | 56.6 | 100 (53) |

注) カイ二乗検定で1%水準で有意であった。

2.4.3 社会関係資本、偏差値と希望進学先

ここでは社会関係資本と希望進学先についてみてみたい。今回の調査では、社会関係資本として、「現在の友人や知人の数」を尋ねている。現在の生活の中で、友人や知人の数が多いと、生活の満足度や幸福感が高まり、県内での期待効用が高まることが容易に考えられる。また、現在の友人や知人が多いほど、移動に伴う心理的なコストが高くなることも考えられる。そのため、友人・知人数が多いほど県内を、少ないほど県外を選択しやすいと思われる。表8をみると、友人数が多いほど県外を、友人数が少ないほど県内を選択しているように見える。しかし、カイ二乗検定では統計的な有意な差は見られなかった。

次に偏差値別希望進学先をみてみたい。今回の調査が高校2年次の時点で行われていたこともあり、調査対象者が正確に全国偏差値を把握していないことを考慮し、校内偏差値で尋ねた。そのため、高校入学時の偏差値を考慮し、偏差値を再編成した。地域内で最も入学偏差値が高い高校を1~5段階へ、次の高校を5~9、その次を9~13、そして最後は13~17段階に再構築した。その後、1~5段階を上位、6~10段階を中位、11以下を下位の三つのグループに分けた。偏差値別進学先をまとめたものが表9である。表から偏差値上位グループでは、県外進学希望者が70.9%で県内希望者を大きく上回っていることがわかる。他方、中位と下位においては県内希望者が56.2%と56.0%、県外希望者をそれぞれ上回っていることがわかる。

マクロ労働市場の観点からでみると、人的資本の最適配分を考慮しなければならない。また、受け入れ先となる大学も偏差値で厳密に区切られている。また、偏差値の高い大学が都市圏つまり県外に多く分布している。そのため、高い偏差値の学生は偏差値に見合った学びの場を求め、県外へ移動することが合理的な選択となる。表9の結果から調査対象者の高校生が合理的な選択を行っていることがわかる。

表 2.8: 社会関係資本と希望進学先

| | | (単位：%) | | |
|-----|---------|--------|------|-----------|
| | | 希望進学先 | | 合計 (人数) |
| | | 県内 | 県外 | |
| 友人数 | ほとんどいない | 57.1 | 42.9 | 100 (7) |
| | 1~4人 | 51.9 | 48.2 | 100 (27) |
| | 5~9人 | 48.7 | 51.4 | 100 (74) |
| | 10~29人 | 50.0 | 50.0 | 100 (210) |
| | 30人以上 | 47.4 | 52.6 | 100 (312) |

注) カイ二乗検定で統計的に有意でなかった。

表 2.9: 偏差値別希望進学先

| | | (単位：%) | | |
|-----|----|--------|------|-----------|
| | | 希望進学先 | | 合計 (人数) |
| | | 県内 | 県外 | |
| 偏差値 | 下位 | 56.0 | 44.0 | 100 (159) |
| | 中位 | 56.2 | 43.8 | 100 (299) |
| | 上位 | 29.1 | 70.9 | 100 (172) |

注) カイ二乗検定で 1%水準で有意であった。

表 2.10: 地元意識と希望進学先

| | 希望進学先 | |
|------------------------------------|-------|------|
| | 県内 | 県外 |
| 地域の一員であると感じる | 3.68 | 3.51 |
| この地域の将来のことが、とても気になる | 3.45 | 3.19 |
| この地域に愛着を感じる | 3.89 | 3.67 |
| この地域を離れることは、たとえ離れたくても、大変困難である | 2.99 | 2.22 |
| 現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである | 3.55 | 3.12 |

注) カイ二乗検定で 1%水準で有意であった。

2.4.4 地元意識と希望進学先

ここでは、地元への意識と希望進学先選択についてみてみたい。地元への愛着や主体性などの地元意識が高いと、同じ条件であれば地元を選択する可能性が高くなると考えられる。新型コロナのような外部からの制約条件ではなく、地域での様々な体験や学習、あるいは地域内の人間関係などから形成される地元意識が地元進学を選択する要因になりうると思われる。今回の調査では、表 10 の 5 つの質問で地元への意識を計っている。各質問は、「あてはまらない」を 1 点、「あてはまる」を 5 点に評価した。県内・県外別の平均値をまとめたのが表 10 である。

まず、「地域の一員であると感じる」をみると県内進学希望者が 3.68 で、県外希望者の 3.51 を少し上回っている。続いて、「この地域の将来のことが、とても気になる」と「この地域に愛着を感じる」も県内進学希望者

が、県外進学希望者の平均値を少し上回っている。次に強い拘束性を表す「この地域を離れることは、たとえ離れたくても大変困難である」と主観的な必要性を問う「現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである」も、県内進学希望者の平均値が県外進学希望者のそれを上回っている。県内進学者の平均値で最も高かったのは「地域愛着」で、最も低かったのは「強い拘束性」である。このことは、県内進学希望者は地域への愛着が高く、やむを得ない事情ではなく、自ら県内進学を選んでいることが伺える。

2.4.5 希望進学先選択行動の決定要因

ここでは、高校生の希望進学先選択行動が、どのような属性や要因に影響を受けているのか、そして希望進学先選択の決定要因がなにかを統計的に明らかにする。そのため、推計方法として希望進学先を被説明変数としたプロビット回帰分析を行う。プロビット回帰の被説明変数は、希望進学先ダミー変数で県内を1、県外を0とした。説明変数には、上述した進学先決定モデルに従って次のような変数を用いた。個人属性として男性ダミーを用いた。家族環境変数としては、経済状況と一人っ子ダミー、父親出身地ダミー、母親出身地ダミーを用いた。そして、進学先選択のもう一つの制約条件として偏差値を用いた。その他、社会関係資本として友人や知人数を、心理的な要因として地元意識の5つの項目を用いた。

表 2.11: 推定結果

| | モデル 1 | | モデル 2 | | |
|----------------------|--------|-------|--------|-------|-------|
| | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | |
| 男性ダミー | -0.174 | 0.121 | -0.154 | 0.125 | |
| 一人っ子ダミー | -0.162 | 0.134 | -0.145 | 0.139 | |
| 父親県内出身ダミー | 0.203 | 0.234 | -0.010 | 0.243 | |
| 母親県内出身ダミー | 0.177 | 0.189 | 0.201 | 0.197 | |
| 父親大卒ダミー | -0.206 | 0.132 | -0.231 | * | 0.136 |
| 母親大卒ダミー | -0.231 | * | 0.133 | * | 0.137 |
| 経済状況 | -0.140 | ** | 0.070 | | 0.073 |
| 偏差値 (上位 = 1, 下位 = 3) | -0.376 | *** | 0.084 | *** | 0.086 |
| 社会関係資本 | -0.048 | | 0.068 | | 0.071 |
| 地元の一員 | | | -0.017 | | 0.071 |
| 地元の将来が気になる | | | 0.056 | | 0.065 |
| 地元愛着 | | | -0.071 | | 0.070 |
| 強い拘束性 | | | 0.248 | *** | 0.052 |
| 主観的な必要性 | | | 0.131 | ** | 0.058 |
| 定数項 | 1.430 | *** | 0.485 | | 0.549 |
| サンプル数 | 474 | | 474 | | |
| Pseude R2 | 0.076 | | 0.132 | | |

注) ***, **, *印は 1%, 5%, 10%水準で有意であることを示す。

表 2.11 は推定結果である。モデル 1 は個人属性、家族環境、偏差値、社会関係資本を説明変数として用いた結果で、モデル 2 はモデル 1 に心理的な要因を追加した結果である。

モデル 1 から経済状況は係数が負で、5%水準で有意になっている。つまり、経済状況にゆとりがあればあるほど、県外進学を選択する確率が高いことがわかる。続いて母親の大卒ダミーが正で、10%水準で有意に

なっている。最後に偏差値が負の係数で、1%水準で有意となっている。係数の大きさを単純比較すると、偏差値が希望進学先選択に最も重要な決定要因であることがわかる。偏差値が上位であればあるほど、県外への進学を希望していることがわかる。

次にモデル2では、父親大卒ダミーと母親大卒ダミーが10%水準で有意となっている。他方、モデル1で有意だった経済状況は有意でなくなった。この結果は、両親の学歴ダミーが経済状況の一部を反映しているからだと思われる。続いて偏差値はモデル1と同様1%水準で有意で、重要な決定要因であることがわかる。

表 2.12: 第一志望の大学を選ぶ基準（複数回答）

| | (単位：%) | |
|----------------|--------|------|
| | 希望進学先 | |
| | 県内 | 県外 |
| 教育内容が良かった | 17.1 | 25.2 |
| 行きたい学部、学科があるから | 44.0 | 47.1 |
| 教師や友人の勧めがあるから | 3.7 | 4.6 |
| 家族や親戚の勧めがあるから | 9.9 | 4.3 |
| 経済的な理由で | 10.9 | 4.8 |
| 学校の成績や偏差値などから | 11.9 | 9.4 |
| その他 | 2.4 | 4.5 |

注) ***, **, *印は1%, 5%, 10%水準で有意であることを示す。

心理的な要因としては、強い拘束性と主観的な必要性が、係数が正で、1%水準と5%水準で有意である。モデル1で有意だった経済状況が有意でなくなったのには、経済状況により強い拘束性や主観的な必要性を感じるから、それぞれの係数にその影響が含まれていると思われる。つまり、経済状況が、強い拘束性や主観的な必要性の要因になっていることが伺える。

推定結果から次のようなことが言える。まず、進学先の決定要因で最も重要なのは偏差値であった。そして、家計の経済状況や環境要因が選択の制約条件となっていることがわかる。つまり、この地域の若者たちは自分の偏差値と家計の経済状況、家族環境などを考慮して、進学先を合理的に選択していることがわかる。逆に、地元愛着や一員であるという所属意識は進学先を誘導するほどの強い影響を持っていないことがわかる。石黒(2007)は青森県内の若者を対象に行ったデータを用いた分析の結果、地元志向と地元への愛着は、進学先の選択とは無関係であると言っている。

この結果は、大学を選ぶ基準にも表れている。表 2.12 は第一志望の大学を選ぶ基準を複数回答で尋ねた結果を、希望進学先別に集計したものである。県内・県外を問わず、最も重視しているのは「行きたい学部、学科があるから」で、続いて「教育内容が良かった」となっている。その次は、県内でも県外でも偏差値と経済的な状況である。特に経済的な理由については、県内希望者が10.9%であったのに対し、県外希望者では4.8%で大きな差があることがわかる。また、「家族や親戚の勧めがあるから」においても県内と県外に大きな差が表れている。

2.5 小括

本章では、教育を投資行動として捉え、個人属性、家族環境、そして社会関係資本など個人を取り巻く諸環境に注目して、進学先の選択がどのように決定されているのかを分析した。分析の結果、進学先選択行動の決

定要因としては、偏差値と家計の経済状況や家族環境からの強い拘束性や主観的な必要性が重要な要因であることがわかった。この地域の高校生は、自分の成績と家計の経済状況など環境要因を総合的に考慮し、希望進学先を選択していることが明らかになった。

この結果の政策的な含意を考えてみたい。分析の結果から、県内進学者の中には、偏差値が高いにも関わらず経済的状況や環境要因で、県内に留まる選択をする若者が一定数いることがわかる。その結果、大学卒業時に県外へ流出する県内出身者が一定数いることになる。人材の最適な配分を考えると、経済的な困難で希望している大学への進学をあきらめる若者が存在することは、個人にとっても社会にとっても好ましくない。奨学金などの支援で、希望する大学で学び、潜在的な能力を最大限発揮できるような環境を整備することが求められる。また、若者の地元定着のためには、進学の段階ではなく、県外に進学した若者が大学を卒業する段階で、地元の企業に戻って就職できるような環境整備が必要であると思われる。そのためには、県外進学者への情報提供や大学在学中に県内企業でのインターンシップなどのプログラムに参加できるように支援を行うことも有効であると思われる。また、県外から県内の大学に進学した若者が、そのまま県内の企業を選択できるような働きかけを強化することも有効であると思われる。

大学の地域間偏在と大学の入学には偏差値という厳格な指標が存在する。また、大学入学には経済的な負担を伴っている。このような多くの制約の中で若者たちが大学を選択していることを考慮すれば、進学先選択時に地域の制限を新たに設けるのは好ましくないと思われる。希望する大学に進学し、存分に学び、その成果を自由に発揮できる社会構築が望まれる。

参考文献

- 石黒格（2007）「青森県出身者の県外進学に関わる要因：県内外進学者の比較から」『人文社会論叢・社会科学編』第18号, 69-79.
- 増田ほか（2014）『地方消滅—東京一極集中が招く人口急減—』中公新書.
- Gary Becker (1993) [1964]. Human capital: a theoretical and empirical analysis, with special reference to education (3rd ed.). Chicago: The University of Chicago Press.

第3章 就職希望者の進路選択行動

李 永 俊

3.1 はじめに

この章では、高卒就業者の初職地選択行動の決定要因についてみてみたい。労働政策研究・研修機構（2018）は、地域別にみた新規高卒市場についての分析で、青森県は流出県であること、そしてそのような流出県においても2007年から2017年にかけて継続して県外就職者割合が低下していることを指摘している。

図3.1は、文部科学省の「学校基本調査」を用いて2015年から2023年にかけての青森県の県外就職者数と県外就職者割合の推移を図示したものである。図から県外就職者割合は継続して減少していることが読み取れる。また、2020年の新型コロナ禍による県外就職者の急減の後、以前の水準までの回復はほとんど見られないことがわかる。また、県外就職者割合は2009年には5割を超えていたが、2015年からは4割強の水準で、その後も継続して減少し、2023年には38.3%にまで低下している。

その背景には、労働政策研究・研修機構（2008）が指摘しているように、高卒新卒労働市場の大きな変化がある。まず一つ目は、労働需要の変化である。高卒就職を支える最も大きな柱であった製造業のウェイトが、大きく低下していることと、その代わりに地域密着型の建設業や医療・福祉などの産業のウェイトが高まっていることが大きな要因となっている。二つ目は、人口流出地域で高齢化・少子化による若年人口の減少が著しく、県外移動者の絶対数が低下したことも一因である。三つ目には、進学率が高くなったことで高卒就職者が減少したことも影響している。そして、各地域での若者の地元定着促進のための様々な政策、具体的には求人表を早期に出すなどの対策が効果的だったことが要因となっている。

しかし、図3.2で示しているように、青森県の県外就職者割合は全国で最も高くなっている。図2は2023年3月に卒業した高卒就職者の県外就職者割合を都道府県別にみたものである。流出者割合が高い県は、青森県（38.3%）、鹿児島県（36.8%）、熊本県（36.8%）、宮崎県（36.2%）、佐賀県（34.2%）となっている。青森県と九州の4県が軒並み高い水準となっている。他方、流出者割合が低い県は、愛知県（5.1%）、富山県（5.3%）、北海道（5.9%）、滋賀県（8.8%）、石川県（8.9%）となっている。労働政策研究・研修機構（2008）では、県外移動については、東京都は流入、長野県はバランス、青森県、高知県、島根県、秋田県は流出と分類している。流入と分類された東京都の2023年卒の水準をみると13.4%で、長野県は10.2%となっており、青森県とは25ポイント以上の差があることがわかる。

高卒者の県外就職者は継続して減少しているが、本県の県外就職者割合は高い水準にあるため、改善の余地があることがわかる。そこで、ここでは県外就職の決定要因を明らかにし、政策の方向性を検討したい。

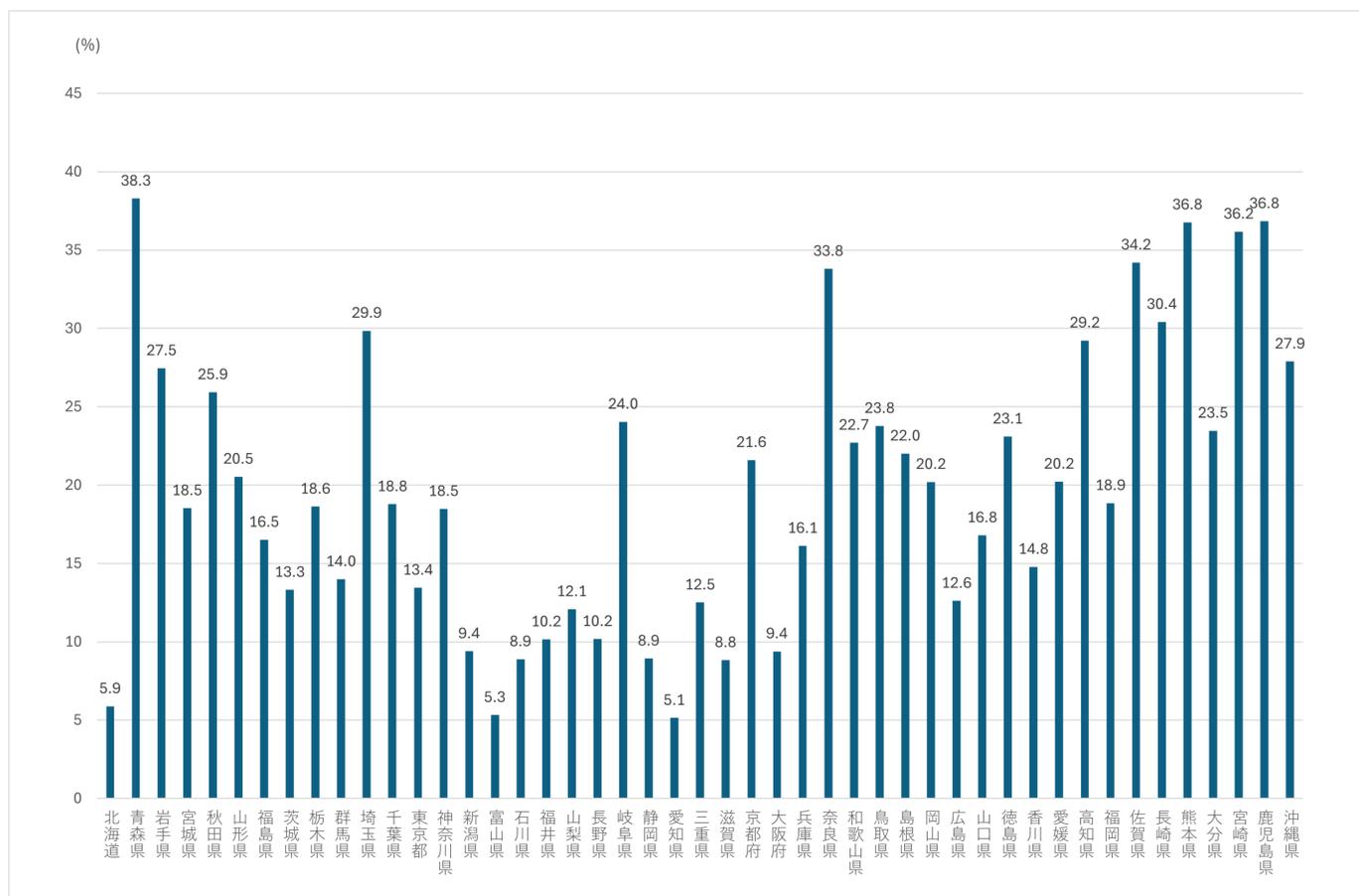
ここでは、就職希望者155名の内、性別不明者6名を除いて149名を分析対象とする。ここでは個人属性や家族環境、社会関係資本、就業意識などが就職希望地選択にどのような影響を与えているのかをみてみたい。

図 3.1: 県外就職者の推移



出所：文部科学省「学校基本調査」。

図 3.2: 県外就職者割合



出所：文部科学省「学校基本調査」。

表 3.1: 性別希望就職地

| (単位：%) | | |
|--------|------------|------------|
| | 男性 | 女性 |
| 県内 | 54.0 | 53.2 |
| 県外 | 26.4 | 25.8 |
| 未定 | 19.5 | 21.0 |
| 合計 | 100.0 (87) | 100.0 (62) |

注) カイ二乗検定は有意でなかった。

3.2 記述統計

3.2.1 属性別就職希望地

ここでは、県内と県外、そして未定（特に決めてない）の三つのグループに分けて分析する。表 3.1 は性別に整理したものである。男性では、54.0 %が県内を希望し、26.4 %が県外、19.5 %が未定となっている。女性もほぼ同じ水準となっており、男女間の差はほとんど見られない。カイ二乗検定でも統計的な差は見られなかった。調査対象者が高校 2 年生であることもあって、未定者が 2 割近く存在している。県外希望者は 26.4 %で、前述したように青森県全体として県外就職者が 38.3 %であることと比較すると低い水準である。県全体の水準を勘案すると、未定者の約半数が県外を選択する可能性があることが予想される。なお、主な県外の行き先は、宮城県、関東甲信となっており、主に都市圏を選択している。

3.2.2 家庭環境と希望就職先

次に世帯構成についてみてみよう。進学とは異なり、高卒就業の場合は移動に伴う費用は家族の負担というより、個人の負担となる場合が多い。そのため、家族環境の影響は進学先選択行動より影響が少ないと予想される。表 2 の結果から三世代、一人っ子、長子の三つのグループ分けにおいて大きな差がないことが読み取れる。またカイ二乗検定においても全て統計的に有意な差は見られなかった。

表 3.2: 世帯形態別希望就職先

| (単位：%) | | | | | |
|---------|---|-------|------|------|-----------|
| | | 希望就職先 | | | 合計 (人数) |
| | | 県内 | 県外 | 未定 | |
| 三世代ダミー | 1 | 54.4 | 23.5 | 22.1 | 100 (68) |
| | 0 | 53.1 | 28.4 | 18.5 | 100 (81) |
| 一人っ子ダミー | 1 | 59.4 | 18.8 | 21.9 | 100 (32) |
| | 0 | 52.1 | 28.2 | 19.7 | 100 (117) |
| 長子ダミー | 1 | 52.4 | 26.2 | 21.4 | 100 (84) |
| | 0 | 55.4 | 26.2 | 18.5 | 100 (65) |

注) カイ二乗検定で統計的に有意なものはなかった。

表 3.3: 両親の出身地別希望就職先

| | | 希望就職先 | | | 合計 (人数) |
|-------|----|-------|------|------|-----------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 | |
| 父親出身地 | 県内 | 56.4 | 21.8 | 21.8 | 100 (110) |
| | 県外 | 46.2 | 38.5 | 15.4 | 100 (39) |
| 母親出身地 | 県内 | 54.2 | 26.7 | 19.1 | 100 (131) |
| | 県外 | 50.0 | 22.2 | 27.8 | 100 (18) |
| 両親共に | 県内 | 57.3 | 22.9 | 19.8 | 100 (96) |
| | 県外 | 47.2 | 32.1 | 20.8 | 100 (53) |

注) カイ二乗検定で統計的に有意なものはなかった。

表 3.2 は両親の出身地別に希望就職地をまとめたものである。両親の出身地が県内であれば、親戚や知人などの社会関係資本の存在から経済的な利点や安心感につながることで県内就職を希望する可能性が高いと予想される。また、逆に家族の関係が良好でない場合は、心理的な負担となり、親元を離れることを選択することも考えられる。表 3.2 を一見すると、両親が県内出身であれば、県外出身より県内希望者が多くなっているように見える。しかし、カイ二乗検定では統計的に有意な差がみられず、両親の出身地と就職地選択には統計的な関係は認められなかった。

表 3.4: 両親の学歴別希望就職先

| | | 希望就職先 | | | 合計 (人数) |
|------|---------|-------|------|------|-----------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 | |
| 父親学歴 | 高卒以下 | 56.1 | 26.5 | 17.4 | 100 (98) |
| | 短大・大学以上 | 50.0 | 11.1 | 38.9 | 100 (18) |
| 母親学歴 | 高卒以下 | 59.4 | 22.8 | 17.8 | 100 (101) |
| | 短大・大学以上 | 37.8 | 35.1 | 27.0 | 100 (37) |

注) カイ二乗検定で父親、母親共に 10%水準で有意であった。

前述したように、進学行動と異なって就職地選択の場合、移動費用は家族よりも本人の負担となる場合が多いと予想される。そのため、家族の経済状況には大きく左右されないと考えられる。親の学歴は親の収入と強く相関するため、移動費用の負担能力と関連する。ただし、就職地選択の場合には前述したように大きな影響がないことが予想される。表 3.4 から父親が高卒以下の場合は、県内希望者が 56.1% で、県外希望者 26.5% を大きく上回っている。また、短大・大卒以上の場合にも県内希望者が 50.0% で、県外希望者 11.1% を大きく上回っている。そして母親が短大・大卒以上の場合、県内が 37.8%、県外が 35.1% で県内と県外ほぼ同じ水準である。父親より母親の学歴と就職地選択行動とが関連していると思われる。

表 3.5 は家族の経済状況別にみた希望就職地である。表から経済状況が苦しいと県内希望者が多く、ゆとりがあれば県外希望者が多いように見えるが、カイ二乗検定では統計的に有意な差は見られなかった。前述したように進学と異なり移動費用の家族負担が少ないことや移動費用そのものが大きくないことが理由として考えられる。以上から就職移動においては家族環境による制約は限定的であることが予想される。

表 3.5: 両親の学歴別希望就職先

| | | 希望就職先 | | | (単位：%) |
|--------|----------|-------|------|------|----------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 | 合計（人数） |
| 暮らしの状況 | 大変苦しい | 80.0 | 0.0 | 20.0 | 100 (5) |
| | やや苦しい | 45.2 | 25.8 | 29.0 | 100 (31) |
| | ふつう | 54.4 | 25.3 | 20.3 | 100 (79) |
| | ややゆとりがある | 50.0 | 38.9 | 11.1 | 100 (18) |
| | 大変ゆとりがある | 62.5 | 25.0 | 12.5 | 100 (16) |

注) カイ二乗検定では有意でなかった。

3.2.3 社会関係資本、専門と希望就職先

ここでは社会関係資本と希望就職先についてみてみたい。今回の調査では、社会関係資本として、「現在の友人や知人の数」を尋ねている。現在の生活の中で、友人や知人の数が多いと、生活の満足度や幸福感が高まり、県内での期待効用が高まるのが容易に想定できる。また、現在の友人や知人が多いほど、移動に伴う心理的なコストが高くなることも考えられる。そのため、友人・知人数が多いほど県内を、少ないほど県外を選択しやすいと思われる。表 3.6 は、友人数が多いほど県外を、友人数が少ないほど県内を希望していることがわかる。カイ二乗検定でも 5%水準で統計的に有意であった。この結果は、社会関係資本が多いほどコミュニケーション能力や環境への適応能力が高く、新しい環境への不安が少ないことが移動の心理的なコストを軽減していると思われる。また、SNSなどで物理的な距離が離れていても容易にコミュニケーションが取れることから、県外への挑戦に対しても地元の社会関係資本が後押しをしていることが考えられる。これらについては心理的な観点からのより詳細な分析が求められる。

表 3.7 は現在の所属学科別に希望就職先をまとめたものである。労働政策研究・研修機構（2008）でも指摘しているように、少子化や進学率の上昇などに伴って高卒就職を前提とした専門学科の廃止が相次いだため、進学を前提とする普通学科から就職をするケースが多くなっている。表 7 から高卒就職者が専門学科より専門学科以外が多くなっていることがわかる。就職希望地については、専門学科か否かについては大きな差はみられなかった。

表 3.6: 社会関係資本と希望就職先

| | | 希望就職先 | | | (単位：%) |
|-----|--------|-------|------|------|-----------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 | 合計（人数） |
| 友人数 | 10 人未満 | 75.8 | 15.2 | 9.1 | 100 (33) |
| | 10 人以上 | 47.4 | 29.3 | 23.3 | 100 (116) |

注) カイ二乗検定で 5%水準で有意であった。

表 3.7: 所属学科と希望就職先

| | | 希望就職先 | | | (単位：%) |
|------|------|-------|------|------|----------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 | 合計 (人数) |
| 所属学科 | 専門 | 50.7 | 31.0 | 18.3 | 100 (71) |
| | 専門以外 | 56.4 | 21.8 | 21.8 | 100 (78) |

注) カイ二乗検定では統計的に有意でなかった。

3.2.4 希望職種別希望就職先

次に、希望業種別に希望就職地をみてみよう。表 8 は、民間企業か否か別に希望就職地をまとめたものである。表 3.8 から民間企業希望者が 48.3 (72 名) で最も多く、次にどちらでも 33.6 % (50 名)、公務員 18.1 % (27 名) となっていることがわかる。民間企業では、52.8 %が県内を、31.9 %が県外を、15.3 %が未定となっている。公務員もほぼ同様な傾向を示している。カイ二乗検定においてもグループ間の差は認められなかった。

表 3.8: 民間公務別希望就職先

| | | (単位：%) | | |
|-------|----|------------|------------|------------|
| | | 民間企業 | 公務員 | どちらでも |
| 希望就職地 | 県内 | 52.8 | 51.9 | 56.0 |
| | 県外 | 31.9 | 25.9 | 18.0 |
| | 未定 | 15.3 | 22.2 | 26.0 |
| 合計 | | 100.0 (72) | 100.0 (27) | 100.0 (50) |

注) カイ二乗検定は有意でなかった。

表 3.9: 産業別希望就職先

| | | (単位：%) | | |
|-----------|--|--------|------|------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 |
| 公務 | | 20.3 | 9.1 | 25.0 |
| 飲食業・宿泊業 | | 18.9 | 21.2 | 17.9 |
| 電気・ガス・水道業 | | 14.9 | 33.3 | 28.6 |
| 医療・福祉 | | 10.8 | 6.1 | 7.1 |
| 製造業 | | 9.5 | 6.1 | 0.0 |
| サービス業 | | 8.1 | 15.2 | 14.3 |

注) カイ二乗検定では統計的に有意でなかった。

表 3.9 は希望産業を三つのグループに整理したものである。複数回答で回答者の 10.0 %以上の回答があった希望産業のみをまとめたものである。県内希望者をみると、公務が最も多く、飲食業・宿泊業、電気・ガス・水道業、医療・福祉の順となっており、製造業は 1 割に満たなかった。県外希望者は、電気・ガス・水道業が最も多く、続いて飲食業・宿泊業、サービス業の順になっている。未定者は電気・ガス・水道業、公務、飲食業・

宿泊業となっている。製造業の割合がいずれのグループにおいても1割に満たないということと、飲食業・宿泊業が共通して大きなウェイトを占めている点が注目される。青森労働局の令和5年3月の新規高等学校卒業予定者職業紹介状況をみると、宿泊業・飲食サービス業の県内求人数が195であるのに対し、県内就職内定者数は61で、求人の1/3にも満たないことがわかる。同じ産業内であれば、労働条件などのミスマッチを解消し、県内でマッチングできる余地があることがわかる。

表 3.10: 就職先を選ぶ基準

| | | 希望就職先 | | |
|------|------------|---------|---------|---------|
| | | 県内 | 県外 | 未定 |
| 選ぶ基準 | 希望の勤務地で働ける | 25.0 | 20.5 | 26.7 |
| | 仕事内容が魅力的 | 30.0 | 30.8 | 33.3 |
| | 労働環境がいい | 53.8 | 46.2 | 46.7 |
| | 休日・休暇が多い | 61.3 | 43.6 | 50.0 |
| | 福利厚生が整っている | 31.3 | 43.6 | 40.0 |
| | 将来性がある | 17.5 | 20.5 | 16.7 |
| | 社会への貢献度が高い | 10.0 | 7.7 | 0.0 |
| | 給料が高い | 68.8 | 71.8 | 80.0 |
| | 大企業や有名な会社 | 1.3 | 15.4 | 3.3 |
| | 親や先生の勧め | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | その他 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | 合計（人数） | 100（80） | 100（39） | 100（30） |

表 3.10 は「あなたが就職先を選ぶときに、重要だと思ったものは何ですか。上位三つをお選びください。」の問に対する回答を希望就職地別に整理したものである。回答は複数回答となっている。まず、県内を選んだ人が重視したものをみると、「給料が高い」が68.8%で最も高く、続いて「休日・休暇が多い」、「労働環境がいい」の順になっている。県外の選択した者も同じく、「給料が高い」が最も多く、続いて「労働環境がいい」、「休日・休暇が多い」「福利厚生が整っている」となっている。未定の者も「給料が高い」「休日・休暇が多い」「労働環境がいい」の順になっている。三つのグループでほとんど差がないことがわかる。李（2024）の弘前地域の大学生を対象とした調査では、県内希望・県外希望を問わず最も重視した基準が「仕事の内容と職種」だったのと比較すると、就職時の基準が異なっていることがわかる。経済的な理由で進学をあきらめている者が多いことを考慮すると、賃金が最も重要な基準となっていることも理解できる。

3.2.5 地元意識と希望就職先

ここでは、地元への意識と就職地選択についてみてみたい。地元への愛着や主体性などの地元意識が高いと、同じ条件であれば地元を選択する可能性を高める要因となる。新型コロナのような外部からの制約条件ではなく、地域での様々な体験や学習、あるいは地域内の人間関係などから形成される地元意識が地域に定着する選択要因になりうると考えられる。今回の調査では、表 3.11 の5つの質問で地元への意識を計っている。各質問は、「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を5点に評価した。各グループ別の平均値をまとめたのが表 11 である。

表 3.11: 地元意識と希望就職地

| | 希望就職先 | | |
|------------------------------------|-------|------|------|
| | 県内 | 県外 | 未定 |
| 地域の一員であると感じる | 3.59 | 3.62 | 3.70 |
| この地域の将来のことが、とても気になる | 3.40 | 3.10 | 3.10 |
| この地域に愛着を感じる | 3.78 | 3.44 | 3.77 |
| この地域を離れることは、たとえ離れたくても、大変困難である | 3.05 | 2.23 | 2.53 |
| 現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである | 3.48 | 3.13 | 3.23 |

まず、「地域の一員であると感じる」についてはグループ間の差はほとんど見られない。続いて、「この地域の将来のことが、とても気になる」は県内が 3.40 で最も高く、県外と未定は 3.10 となっている。「この地域に愛着を感じる」も県内が最も高く 3.78 で、未定、県外の順になっていることがわかる。県内と県外の差は 0.30 ポイントと 0.34 ポイントで「この地域に愛着を感じる」の差が大きいことがわかる。続いて、必要性を示す「この地域を離れることは、たとえ離れたくても、大変困難である（強い拘束性）」と「現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである（主体的な必要性）」では、強い拘束性を示す質問で、県内希望者の平均が 3.05 で、県外希望者の平均は 2.23 であり、両者の差は 0.82 ポイントであることがわかる。主体的な必要性の質問では、県内希望者が 3.48、県外希望者が 3.13 で両者の差は 0.35 ポイントであった。以上のことから、県内希望者と県外希望者の差が大きいのは、地元の愛着と強い拘束性で、両方が高い方が県内に定着しやすいことがわかる。

3.3 希望就職地選択行動の推計

ここでは、高卒就職者の希望就職地選択が、経済社会情勢に関する要因をコントロールした上で、どのような属性や要因に影響を受けているのか、そして希望就職地選択の決定要因がなにかを統計的に明らかにする。そのため、推計方法として希望就職地の三つのカテゴリーを被説明変数とした多項ロジット回帰分析を行う。

多項ロジット回帰分析に用いる変数は以下の通りである。被説明変数は、希望就職地が県内であれば 1、県外であれば 2、未定であれば 3 とした。説明変数には、個人属性については、1 性別、2 専門学科ダミーを用いた。家族属性には、3 一人っ子ダミー、4 父親または母親が県内出身者であれば 1、両親とも移住者であれば 0 とする両親の出身地ダミーを用いた。5 家計の経済的状況を、「大変苦しい」を 1、「大変ゆとりがある」を 5 として用いた。次に就業機会と賃金に関する説明変数には、6 産業ダミーとして公務、飲食・宿泊業、医療・福祉業のダミー変数を用いた。7 賃金については、就職地の選択基準として「賃金が高い」を選んだ場合は 1 とするダミー変数を用いた。社会関係資本として、8 友人や知人数を用いた。そして、地元意識について、9 地元愛着と 10 強い拘束性を用いた。

表 3.12 が推定結果である。モデル 1 は個人属性と家族環境、モデル 2 は雇用機会と賃金、モデル 3 は社会関係資本と地元意識を説明変数として推計した結果である。そして、被説明変数の基準は希望就職地が地元である場合とした。モデル 1～3 で統計的に有意な係数はモデル 3 の友人・知人数と強い拘束性であった。友人・知人数は県外と未定で、係数が正で、5%水準で有意となっている。つまり、友人・知人数が多ければ多いほど、県外へ進出しやすいことを意味する。質問が「現在の友人や知人の数を教えてください」となっているので、県内の友人か県外の友人かは特定できない。しかし、友人・知人数が多いということはコミュニケーション能力が高いと予想される。高いコミュニケーション能力が県外へ進出する心理的なコストを下げているため、県外を志望する傾向が強くなるのではないだろうか。また、未定のグループの係数が県外とほぼ同じよう

な傾向を示していることが、県外へ踏み出しきれない者が決めかねているように思われる。

次に統計的に有意だったのは強い拘束性であった。県外、未定ともに係数が負で、5%水準で有意である。つまり、地元を離れるのが大変困難だと感じている若者は県内に留まっていることがわかる。

モデル4はすべての説明変数を投入した推計結果である。上述した友人・知人数、強い拘束性は5%水準で有意で、上述したのと同じ結果であった。新たに有意だったのは、公務ダミーであった。係数が負で、10%水準で有意である。つまり、公務を希望する者は県内に残る確率が高いことを意味している。しかし、地元に残りたいために公務の仕事を選んだのか、公務の仕事を選んでたまたま地元に残ったのかは明確ではない。

表 3.12: 推定結果

| | | モデル 1 | | モデル 2 | | モデル 3 | | モデル 4 | | |
|------------|------------|--------|--------|--------|-----------|--------|-------|--------|----------|-------|
| | | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | |
| 県外 | 男性ダミー | -0.141 | 0.422 | | | | | -0.497 | 0.513 | |
| | 専門学科ダミー | 0.512 | 0.407 | | | | | 0.276 | 0.461 | |
| | 一人っ子ダミー | -0.598 | 0.524 | | | | | -0.341 | 0.573 | |
| | 両親県内出身ダミー | -0.638 | 0.423 | | | | | -0.672 | 0.479 | |
| | 家計の経済状況 | 0.169 | 0.219 | | | | | 0.209 | 0.253 | |
| | 公務ダミー | | | -0.696 | 0.465 | | | -1.196 | ** 0.546 | |
| | 医療・福祉ダミー | | | -0.598 | 0.696 | | | -0.391 | 0.834 | |
| | 飲食業・宿泊業ダミー | | | 0.020 | 0.521 | | | -0.073 | 0.591 | |
| | 賃金ダミー | | | 0.149 | 0.435 | | | -0.229 | 0.507 | |
| | 友人・知人数 | | | | | 0.569 | ** | 0.229 | 0.770 | *** |
| | 地元愛着 | | | | | -0.224 | | 0.184 | -0.251 | 0.196 |
| | 強い拘束性 | | | | | -0.601 | *** | 0.191 | -0.704 | *** |
| | 定数項 | -0.908 | 0.733 | -0.581 | 0.401 | -0.720 | 1.023 | -0.684 | 1.297 | |
| | 未定 | 男性ダミー | -0.010 | 0.454 | | | | | -0.171 | 0.528 |
| 専門学科ダミー | | -0.027 | 0.448 | | | | | -0.220 | 0.481 | |
| 一人っ子ダミー | | -0.021 | 0.516 | | | | | 0.158 | 0.540 | |
| 両親県内出身ダミー | | -0.128 | 0.465 | | | | | -0.283 | 0.497 | |
| 家計の経済状況 | | -0.287 | 0.248 | | | | | -0.253 | 0.267 | |
| 公務ダミー | | | | -0.165 | 0.467 | | | -0.624 | 0.527 | |
| 医療・福祉ダミー | | | | 0.040 | 0.645 | | | 0.077 | 0.732 | |
| 飲食業・宿泊業ダミー | | | | -0.057 | 0.581 | | | -0.071 | 0.628 | |
| 賃金ダミー | | | | 0.592 | 0.517 | | | 0.227 | 0.562 | |
| 友人・知人数 | | | | | | 0.504 | ** | 0.250 | 0.660 | *** |
| 地元愛着 | | | | | | -0.031 | | 0.202 | -0.031 | 0.205 |
| 強い拘束性 | | | | | | -0.411 | ** | 0.197 | -0.421 | ** |
| 定数項 | | -0.024 | 0.776 | -1.366 | *** 0.497 | -1.848 | 1.204 | -1.356 | 1.491 | |
| サンプル数 | | 149 | | 149 | | 149 | | 149 | | |
| Pseude R2 | 0.026 | | 0.016 | | 0.077 | | 0.124 | | | |

注) ***, **, *印は 1%, 5%, 10%水準で有意であることを示す。

3.4 小括

本章では、個人属性、家庭環境、社会関係資本など個人を取り巻く諸環境に注目して、高卒就職者の希望就職地選択行動の決定要因を分析した。

小括すると、友人・知人数と強い拘束性が希望就職地を分けていることがわかった。言い換えると、個人属性や市場環境などは就職地選択に影響を及ぼしていないと言える。つまり、この結果は、賃金や労働条件の違いや雇用機会の格差などは高卒新卒市場においては、流出の主要因ではないことを含意している。

その背景には、高卒新卒市場が製造業中心から飲食業・宿泊業やサービス業、そして医療・福祉など、地域

密着型産業中心に変化したことが挙げられる。また、地方においても労働力不足が深刻な状況で、有効求人倍率の格差が縮小していることや、地域間賃金格差が継続して縮小したことも大きな要因となっている。そして、少子化に伴って家族環境の変化が地域の拘束性を強め、地元定着を促していることも考えられる。ただし、コミュニケーション能力が高い若者が県外に流出していることについては、地元に残る期待効用をより高くして、地元を選択できるようなより一層の環境整備が必要であると思われる。

参考文献

- 李永俊（2024）「地域間移動の決定要因について」『令和5年大学生の地元意識と就業に関する意識調査報告書』弘前大学人文社会科学部，21-30.
- 労働政策研究・研修機構（2018）『「日本的高卒就職システム」の現在－1977年・2007年・2017年の事例調査から－』労働政策研究報告書 No. 201.

第4章 高校生の地元に対する意識と個人・世帯属性の関連性

花田真一

4.1 はじめに

本章では、高校生の地元に対する意識と個人及び世帯属性との関連性について示す。個人の属性や世帯の属性は、高校生にとっては地元に対する意識を形成するよりも先に与えられたものであると考えられる。つまり、地元に対する意識を涵養する原因となる要素であると考えられる。これらの要素を政策的に直接操作することは必ずしも容易ではない。しかし、これらの要素と地元に対する意識に何らかの関連性が見られるのであれば、各生徒に対して、直接的な調査を行わずとも、地元に対する意識を推測することが可能になる。それにより、例えば地元に対する意識を変化させるためにアプローチするべき層とそのままでよい層とを識別することができると考えられる。

以下ではまず、高校生の個人属性と地元に対する意識についての関係を示す。そのうえで、世帯属性との関連性を示すこととする。また、今回の調査では、地元に対する意識として5つの項目を聞いている。表では簡単化のために、以下の略語を用いる：

「私は地域の一員であると感じる」⇒「一員」

「私はこの地域の将来のことが、とても気になる」⇒「将来」

「私はこの地域に愛着を感じる」⇒「愛着」

「この地域を離れることは、たとえ離れたくても大変困難である」⇒「困難」

「現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである」⇒「必要」

4.2 個人の属性と地元に対する意識の関係

まず、個人の属性と地元に対する意識の関係についてみてみよう。表4.1には、性別と地元に対する意識の関係について示している。性別による有意な差が生まれた項目は「将来」のみであり、男性のほうが「ややあてはまらない」が少なく「あてはまる」が多くなっている。傾向としては女性のほうがやや中央に分布が集中しているようにも見え、男性のほうが比較的是っきりと「あてはまる」と答えているようにも見える。

表 4.1: 個人の属性と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|----|--|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| | | 地域の将来が気になる | | | | | |
| 男性 | | 12.2 % | 12.2 % | 23.3 % | 31.4 % | 20.9 % | 468 |
| 女性 | | 10.8 % | 19.0 % | 20.5 % | 35.4 % | 14.4 % | 591 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 4.2: 同居している家族と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|-----|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| | | 地域の一員であると感じる | | | | | |
| 弟 | 同居 | 5.9 % | 8.6 % | 24.8 % | 30.0 % | 30.7 % | 290 |
| | 非同居 | 7.9 % | 11.7 % | 25.5 % | 32.5 % | 22.3 % | 808 |
| | | 地域の将来が気になる | | | | | |
| 父 | 同居 | 11.1 % | 15.0 % | 20.4 % | 36.0 % | 17.5 % | 845 |
| | 非同居 | 13.8 % | 17.8 % | 28.1 % | 23.7 % | 16.6 % | 253 |
| 母 | 同居 | 11.6 % | 15.3 % | 21.8 % | 34.2 % | 17.2 % | 1036 |
| | 非同居 | 14.5 % | 22.6 % | 27.4 % | 16.1 % | 19.4 % | 62 |
| | | 地域に愛着を感じる | | | | | |
| 父 | 同居 | 6.4 % | 8.2 % | 16.3 % | 40.0 % | 29.1 % | 845 |
| | 非同居 | 11.1 % | 7.5 % | 23.7 % | 30.4 % | 27.3 % | 253 |
| 母 | 同居 | 7.1 % | 8.1 % | 17.5 % | 38.0 % | 29.3 % | 1036 |
| | 非同居 | 12.9 % | 6.5 % | 27.4 % | 33.9 % | 19.4 % | 62 |
| | | 地域を離れるのが困難 | | | | | |
| 母 | 同居 | 23.6 % | 23.3 % | 26.5 % | 17.9 % | 8.9 % | 1036 |
| | 非同居 | 37.1 % | 14.5 % | 29.0 % | 14.5 % | 4.8 % | 62 |
| 祖父母 | 同居 | 19.3 % | 22.5 % | 29.3 % | 18.5 % | 10.5 % | 400 |
| | 非同居 | 27.2 % | 22.9 % | 25.1 % | 17.2 % | 7.6 % | 698 |
| 兄 | 同居 | 17.4 % | 19.2 % | 37.8 % | 16.9 % | 8.7 % | 172 |
| | 非同居 | 25.6 % | 23.4 % | 24.5 % | 17.8 % | 8.6 % | 926 |
| 妹 | 同居 | 31.0 % | 23.3 % | 19.2 % | 19.5 % | 7.0 % | 287 |
| | 非同居 | 22.0 % | 22.6 % | 29.2 % | 17.0 % | 9.3 % | 811 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

4.3 世帯の属性と地元に対する意識の関係

次に、世帯の属性と地元に対する意識の関係についてみてみよう。まず、同居している家族と地元に対する意識の関係を、表 4.2 に示している。

表 4.2 から、以下のことが読み取れる。まず、親世代についてみると、父親と同居していない場合、「将

来」と「愛着」について「ややあてはまる」が減る傾向が見て取れる。また、母親と同居していない場合、「将来」について「ややあてはまる」が減る一方、「愛着」「困難」については「あてはまらない」が増える傾向が見て取れる。また、祖父・祖母については、同居していない場合は「困難」について「あてはまらない」が増えている。兄弟世代についてみると、兄については同居していると「困難」に「あてはまらない」が減る傾向が示されている。一方で、妹については逆に、同居していると「困難」について「あてはまらない」が増える傾向にある。また、弟と同居している場合は「一員」の「あてはまる」が増える傾向が示されている。

以上の傾向は、特に「困難」については、家族の中に生徒が支える必要があると思っている主体が存在しているかどうか、およびそれが自分であるかどうかの影響を受けているように見て取れる。母親や祖父母などは、生徒が支えるべき存在であると考えている可能性があり、「困難」が高まる傾向を示している。また、高校生世代であることを考えると、兄については進学や就職などで今後家を離れる可能性があり、場合によっては自分が支えるべき主体になる可能性がある。そのことが、同居している場合に「どちらともいえない」の回答割合を増やしていると考えられる。一方、妹の場合は、自分が家を離れてもしばらくは妹が家に残ることが予想され、今回の回答の段階である高校生時点では「あてはまらない」が増えている可能性があるのではないかと考えられる。

表 4.3: 両親が青森県出身かどうかと地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | |
| 両親とも青森出身 | 22.2 % | 23.4 % | 26.0 % | 18.8 % | 9.6 % | 676 |
| 父親のみ青森出身 | 27.3 % | 19.5 % | 28.6 % | 16.9 % | 7.8 % | 77 |
| 母親のみ青森出身 | 42.9 % | 34.3 % | 20.0 % | 2.9 % | 0.0 % | 35 |
| 両親とも県外出身 | 42.3 % | 19.2 % | 23.1 % | 7.7 % | 7.7 % | 26 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 両親とも青森出身 | 8.0 % | 13.8 % | 30.3 % | 27.8 % | 20.1 % | 676 |
| 父親のみ青森出身 | 11.7 % | 10.4 % | 39.0 % | 20.8 % | 18.2 % | 77 |
| 母親のみ青森出身 | 14.3 % | 28.6 % | 28.6 % | 14.3 % | 14.3 % | 35 |
| 両親とも県外出身 | 15.4 % | 30.8 % | 30.8 % | 19.2 % | 3.9 % | 26 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 4.3 には、両親が青森県出身かどうかと地元に対する意識の関係について示している。両親の出身により有意な差がみられたのは「困難」と「必要」であり、「一員」や「愛着」には有意な差は見られなかった。このことは、地元に対する心理的な距離と両親の出身にはあまり関係がなく、地域でどのように育ったか、のほうの影響が大きいことを示唆しているように見える。一方で、実際的な必要性を表す「困難」と「必要」については、両親の出身の影響がある程度反映されているように見える。両親ともに県外出身であれば、弘前を離れることについての困難や、地域に住み続ける必要性を感じる割合が低い。一方で、特に父親の出身が県内である場合、「困難」や「必要性」が高まっている傾向が示されている。

表 4.4: 父親の学歴と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | |
| 大学・大学院卒 | 27.6 % | 25.5 % | 22.2 % | 18.9 % | 5.8 % | 275 |
| 短大・専門学校卒 | 24.7 % | 19.1 % | 25.8 % | 21.4 % | 9.0 % | 89 |
| 高校卒 | 23.0 % | 23.2 % | 28.2 % | 16.1 % | 9.6 % | 448 |
| 中学校卒 | 15.2 % | 6.1 % | 36.4 % | 18.2 % | 24.2 % | 33 |

注) カイ二乗検定で 1%水準で有意であった。

表 4.5: 母親の学歴と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 大学・大学院卒 | 5.6 % | 6.0 % | 13.3 % | 39.4 % | 35.7 % | 249 |
| 短大・専門学校卒 | 8.6 % | 8.2 % | 16.5 % | 35.4 % | 31.3 % | 243 |
| 高校卒 | 6.3 % | 9.2 % | 19.5 % | 39.1 % | 25.9 % | 522 |
| 中学校卒 | 27.3 % | 4.6 % | 27.3 % | 27.3 % | 13.6 % | 22 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | |
| 大学・大学院卒 | 26.9 % | 29.7 % | 21.7 % | 15.7 % | 6.0 % | 249 |
| 短大・専門学校卒 | 23.1 % | 19.3 % | 26.3 % | 20.2 % | 11.1 % | 243 |
| 高校卒 | 22.2 % | 22.8 % | 28.4 % | 17.6 % | 9.0 % | 522 |
| 中学校卒 | 22.7 % | 4.6 % | 36.4 % | 22.7 % | 13.6 % | 22 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

次に、両親の学歴と地元に対する意識の関係について分析する。まず、父親の学歴と地元に対する意識の関係について、表 4.4 に示している。学歴による有意な差がみられたのは「困難」のみであった。「大学・大学院卒」については「あてはまる」が少なく、全体的にみても学歴が高いほうが「あてはまる」が少なく「あてはまらない」が多くなっている。

次に、表 4.5 には母親の学歴と地元に対する意識の関係について示している。母親の学歴については、「愛着」についても有意な差が生まれた。母親の学歴が高いほうが、全体的に地元への愛着が高い傾向が示されている。「困難」については、父親の学歴の場合と同様、学歴が高くなるにつれてあてはまる割合が減っていく傾向が示されている。

このような結果になった理由についてはさらなる調査が必要であるが、母親の学歴が高いほうが地域への愛着が高まり、両親の学歴が高いほうが高校生の進路に自由度が確保されているように思われる。このような層が、地元に残る場合、その選択は主体的なものであると考えられる。地域の教育水準を高めることは、地元に対する愛着を高めるうえでも、下の世代の選択の自由を確保するうえでも、重要ではないだろうか。

両親の職業と地元に対する意識の関係については、父親の職業では有意な差が見られなかった。母親の職業については、地域を離れるのが困難である、について表 4.6 に示したとおり有意な差がみられた。母親の職業が「自営業」の場合、「ややあてはまる」の回答が他の職業に比べると多くなっている。また、「なし」の場合、「あてはまらない」と「あてはまる」がともに他の職業に比べると多くなっている。

表 4.6: 母親の職業と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| | 地域を離れるのが困難である | | | | | |
| 公務員（自治体職員など） | 29.2 % | 26.2 % | 18.5 % | 20.0 % | 6.2 % | 65 |
| 公務員（教員） | 16.4 % | 32.8 % | 24.6 % | 14.8 % | 11.5 % | 61 |
| 会社員 | 18.7 % | 26.1 % | 33.5 % | 13.9 % | 7.8 % | 230 |
| 専門職 | 27.3 % | 19.7 % | 25.1 % | 18.6 % | 9.3 % | 183 |
| 自営業 | 20.8 % | 15.3 % | 30.6 % | 29.2 % | 4.2 % | 72 |
| 農林水産業 | 22.5 % | 26.5 % | 22.5 % | 18.4 % | 10.2 % | 49 |
| パート・アルバイト | 23.0 % | 27.2 % | 24.0 % | 18.9 % | 6.9 % | 217 |
| 契約・派遣・嘱託社員 | 18.2 % | 22.7 % | 22.7 % | 27.3 % | 9.1 % | 22 |
| なし | 33.8 % | 12.5 % | 25.0 % | 12.5 % | 16.3 % | 80 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

母親が自営業を営んでいる場合、その手伝いや跡を継ぐという理由から、地域を離れるのが困難だと感じる傾向が強くなっている可能性がある。結果の表は省略するが、母親の職業が「自営業」の場合、父親の職業が何であるかについての有意な差は見られない。このことから、特に母親が自営業の場合に影響を受けていることが示唆されている。また、母親が仕事をしていない場合、可能性としては世帯の経済状況が十分であり母親が仕事をする必要がない場合と、何らかの事情で母親が仕事ができない状況である場合の両方が考えられる。これにより、両極端な結果が多くなっている可能性がある。結果の表は省略するが、母親の職業が「なし」の場合、次の設問である家庭の経済状況について「大変ゆとりがある」と回答している割合が約 15 %であり、全体の割合の約 8 %と比べてかなり多くなっている。一方で、「大変苦しい」と回答している割合も約 8 %であり、全体の割合の約 4 %に比べて多くなっている。こうした家庭の状況が、「困難」に対する考え方に影響を与えている可能性がある。

表 4.7 は、家族の暮らしの状況を経済的にみてどう感じているかと地元に対する意識の関係について示したものである。「大変苦しい」と回答した場合、「一員」「将来」「愛着」の「あてはまらない」が多く、「将来」については「あてはまる」が少ない傾向を示している。「やや苦しい」と回答した場合、「愛着」の「あまりあてはまらない」が多くなっている。一方、「大変ゆとりがある」と回答した場合は、「一員」の「あてはまる」が多くなっており、「困難」の「あてはまらない」が多く「ややあてはまらない」が少なくなっている。

この結果は、まず、家庭の経済状況が悪い場合、地域との間に距離感を感じるようになる一方、地域を離れることも困難であるという状況が生まれていることを示している。一方で、家庭の経済状況が良ければ、地域の一員であると感じる割合が上がり、将来に対する選択の幅が広がっていることを示唆している。家庭の経済状況が悪い世帯が増えれば、地域に対する愛着は低い、地域に残らざるを得ない層が増えてしまう可能性を示している。

4.4 まとめ

本章では、高校生の地元に対する意識と個人及び世帯属性との関連性について検証した。ここまでの結果から、まず、同居家族など、家庭環境で地元に対する意識が決定される部分があることが示された。兄弟の有無や、祖父母など両親以外の世代と同居しているかによって、地元に対する愛着が異なる傾向が示された。

表 4.7: 家族の暮らしの状況を経済的にみてどう感じているかと地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | |
| 大変苦しい | 21.4 % | 7.1 % | 21.4 % | 35.7 % | 14.3 % | 42 |
| やや苦しい | 10.7 % | 15.1 % | 25.4 % | 27.8 % | 21.0 % | 205 |
| ふつう | 5.0 % | 10.1 % | 28.2 % | 32.9 % | 23.8 % | 596 |
| ややゆとりがある | 8.4 % | 10.3 % | 20.0 % | 33.3 % | 27.9 % | 165 |
| 大変ゆとりがある | 6.7 % | 10.0 % | 17.8 % | 30.0 % | 35.6 % | 90 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | |
| 大変苦しい | 28.6 % | 19.1 % | 28.6 % | 14.3 % | 9.5 % | 42 |
| やや苦しい | 12.2 % | 17.6 % | 16.1 % | 36.1 % | 18.1 % | 205 |
| ふつう | 10.0 % | 15.4 % | 24.5 % | 33.6 % | 16.6 % | 596 |
| ややゆとりがある | 10.3 % | 13.9 % | 19.4 % | 38.2 % | 18.2 % | 165 |
| 大変ゆとりがある | 17.8 % | 14.4 % | 22.2 % | 23.3 % | 22.2 % | 90 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 大変苦しい | 19.1 % | 9.5 % | 28.6 % | 23.8 % | 19.1 % | 42 |
| やや苦しい | 7.8 % | 11.7 % | 19.0 % | 33.7 % | 27.8 % | 205 |
| ふつう | 6.5 % | 7.1 % | 19.5 % | 40.3 % | 26.7 % | 596 |
| ややゆとりがある | 7.3 % | 6.1 % | 13.3 % | 38.2 % | 35.2 % | 165 |
| 大変ゆとりがある | 7.8 % | 8.8 % | 10.0 % | 36.7 % | 36.7 % | 90 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | |
| 大変苦しい | 21.4 % | 14.3 % | 19.1 % | 28.6 % | 16.7 % | 42 |
| やや苦しい | 18.5 % | 22.9 % | 21.5 % | 22.4 % | 14.6 % | 205 |
| ふつう | 23.5 % | 23.3 % | 32.2 % | 14.9 % | 6.0 % | 596 |
| ややゆとりがある | 28.5 % | 28.5 % | 17.6 % | 17.6 % | 7.9 % | 165 |
| 大変ゆとりがある | 36.7 % | 12.2 % | 21.1 % | 20.0 % | 10.0 % | 90 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

また、家庭の経済状況が苦しい場合、地元に対する愛着が低いにもかかわらず、地域を離れることが困難だと感じる傾向がみられた。両親の学歴と地元に対する意識の関係も含めて考えると、両親の学歴や家庭の経済環境が良いほど、高校生の地域に対する愛着が高まると同時に、進路などに対する自由度が確保されていることが示された。本調査に先駆けて行った大学生に対する調査でも、同様の傾向が示されていた。つまり、家族の中の自分の立場や役割（きょうだいがいるか、自分が長子かどうかなど）から、地元に対する意識が影響を受けていた。また、地元での就職を選ぶ層には、地元に対する愛着が強く、主体的に地元に残ることを選択した層と、地元に対する愛着は低いものの、地域を離れることが困難であるためにやむなく地元に残る層が存在することが示されていた。

確かに、人材の流出を防ぐことは重要である。しかし、地元に対する愛着が低いにもかかわらず、地域に残らざるを得ないという状況で消極的に地域に残る人材が増えることは、望ましいことではないだろう。今回の調査の結果からは、地域の経済状況を改善することや、地域の教育水準を上げることが、長期的にみれば地元に対する愛着を持つ、主体的に地域に残ることを選択した層を増やせる可能性が示唆されている。高校生に地

域を選んでもらうように働きかけることも重要だが、高校生を取り巻く環境を整備することが、長期的には重要であると考えられる。

第5章 地元に対する意識と家庭外の活動の関係

花田真一

5.1 はじめに

本章では、家庭外の活動が地元に対する意識に与える影響について示す。本調査の対象である高校生にとって、学校は家庭の次に大きな比重を占める場所であると考えられる。家族とは異なる様々な友人と触れたり、学校が提供するプログラムに参加したりすることで、地元に対する意識が影響を受ける可能性がある。よって、学校生活の状況や学校における活動と地元に対する意識の関係を見ることは重要であろう。

一方で、学校生活の状況は家庭環境と異なり、高校生が選択することがある程度は可能なものである。つまり、中学校の時点でどの高校を選ぶかや、入学した高校でどのような活動に参加するかについては、高校生自身に一定の選択の余地がある。その意味で、個人属性や世帯属性と異なり、地元に対する意識との因果関係は明確ではない。例えば地域と交流するようなプログラムがあったとする。このプログラムに参加した高校生の地元に対する愛着が高まったことが観察されたのであれば、一見、プログラムの効果によって地元に対する意識が向上したことを示しているように見える。しかし、そもそも地元に対する愛着の高い高校生が積極的に参加し、地元に対する愛着が低い高校生はプログラムへの不参加を選択しているかもしれない。この場合は、プログラムの効果として地元に対する愛着が向上したのではなく、愛着が低い高校生が不参加という形で取り除かれた結果、平均が高いように見えていることになる。この点を踏まえたうえで、本章で示される結果を解釈する必要があるだろう。

また、高校生が従事する活動は、学校によるものだけとは限らない。地元の祭りなどに参加することもあるだろうし、学校とは別の学習塾などの習い事の場合もある。また、ボランティア活動のように、学校が機会を提供することもあれば、地域が機会を提供したり、高校生が自主的に機会を見つけ出すような活動も考えられる。こうした活動についても、本章で合わせて扱うこととする。今回の調査では、特に種々の活動について、提供主体を区別できる質問はしていない。例えば、中学生のときに地元の祭りに参加したか、という質問項目があるが、これはあくまで中学生という時期について聞いており、中学校の行事として、という聞き方ではない。クラブ・サークル活動についても、学内や学外で、という質問の仕方をしている。こうした点に留意して、以下の節を解釈していただきたい。

5.2 高校の選択と地元に対する意識の関係

本節では、高校の選択と地元に対する意識の関係についてみる。なお、本報告書の目的はあくまで高校生の意識の調査であり、高校の評価ではない。よって、以下の記述では具体的な高校名には触れず、概要だけを示すこととする。

まず、高校の選択と地元に対する意識について、主成分分析を行って関係性を考察する。主成分分析は、多次元データの縮約手法の一つである。各分析対象が多次元の属性を持つ場合に、その多次元空間内の分散が最

も大きくなる方向に各属性の合成ベクトルを引き、これが主成分となる。複数の主成分を配置する場合は、各主成分との直交条件を課したうえで、最も分散が大きくなるような合成ベクトルを設定し、それを次の主成分とする、という手法である。主成分分析は分散が最も大きくなる方向に合成ベクトルを引くことから、もっとも分析対象の位置の差が大きくなるように多次元の要素を縮約する手法であり、その意味で様々な要素を合成して分析対象を評価することに適した手法である。今回の調査であれば、各高校生は、地元に対する意識として5項目の質問に答えており、5次元の情報を持っている。それを高校ごとの平均という形で集約すると、各高校が、所属している生徒の地元に対する意識についてやはり5次元の情報を持つことになり、5次元空間内に各高校が位置することになる。各高校の差が最も大きくなるように、この5つの要素を合成したものが主成分となる。

図 5.1: 地元に対する意識に関する主成分分析

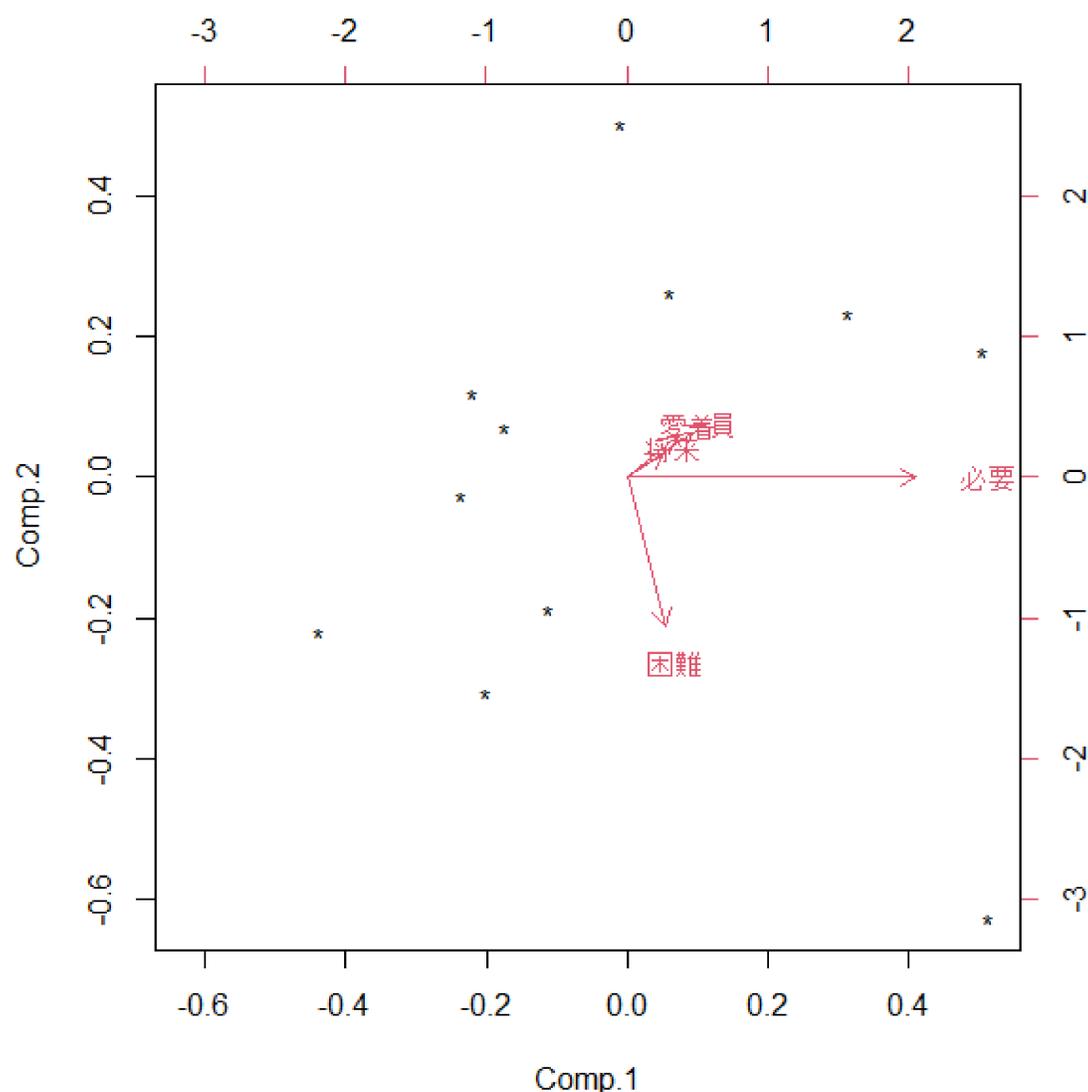


図 5.1 に、主成分分析の結果が示されている。左右の軸が第 1 主成分、上下の軸が第 2 主成分となる。また、図内の点は各高校の主成分空間内での位置を示し、矢印は地元に対する意識のそれぞれの項目が、主成分にどのような影響を与えているか、逆に言えば各主成分が、どのような要素に影響を受けて構成されているか、を表している。図から次のことが読み取れる。まず、基本的に各要素の矢印が右側に向いていることから、第 1 主成分はどの項目についても「あてはまる」と答えた高校生が平均的に多い高校ほど右側に、「あてはまらない」と答えた高校生が平均的に多い高校ほど左側に、位置するような軸となる、特に、「必要」が右側に長く伸びていることから、右側に位置している高校ほど「必要」に「あてはまる」と答えた高校生が多い傾向にあり、左側に位置している高校ほど「あてはまらない」という高校生が多い傾向にある。つまり、第 1 主成分は基本

的に地元にいる必要性について評価を行った軸であると考えられる。次に、上下についてみると、「必要」がほぼ水平であり、「困難」が下側、「一員」「将来」「愛着」が同じような形で上側に伸びている。このことは、第2主成分に対しては「必要」はあまり影響を与えておらず、「困難」と「一員」「将来」「愛着」が別方向に影響を持っていることを表している。特に、「困難」の矢印が下に長く伸びており、その他の矢印は上方向であるがあまり長くないことから、第2主成分、つまり上下の位置は地元を離れるのが「困難」かどうか、積極的に地元に残るか事情により地元に残るか（あるいは残らないか）を表していると考えられる。また、この結果は、地元に対する意識を問う5つの質問のうち、「困難」と「必要性」が他の項目と異なる回答パターンを示す傾向にあり、特に「困難」と「一員」「将来」「愛着」がかなり異なる回答パターンを持っていることを示唆している。

こうした点を踏まえて各高校の位置を見てみると、中央に寄っているというよりは、かなり分散して位置していることが示されている。各点が中央に寄るほどその分析対象は平均的な性質を持っており、中央から離れるほど何らかの特徴を持っていることになる。また、互いに近い位置にある点が多いほど分析対象間に差が少ないこと、散らばっているほど分析対象間に特徴の差がみられることになる。今回の結果はかなり散らばって、様々な方向に点が位置していることから、高校ごとに、在籍している生徒の地元に対する意識に特徴があることが示されている。このことは、高校入学の時点である程度傾向が決まっている可能性を示唆しているようにも思われる。

表 5.1: 所属している学科と地域に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の将来が気になる | | | | | | |
| 普通科 | 9.0 % | 16.5 % | 20.5 % | 34.7 % | 19.5 % | 626 |
| 専門学科 | 14.5 % | 18.6 % | 24.4 % | 28.1 % | 14.5 % | 221 |
| 特進クラス | 15.7 % | 10.8 % | 16.9 % | 36.1 % | 20.5 % | 83 |
| 総合学科 | 11.1 % | 18.5 % | 22.2 % | 40.7 % | 7.4 % | 27 |
| 定時制 | 31.0 % | 12.0 % | 26.2 % | 21.4 % | 9.5 % | 42 |
| その他 | 12.1 % | 9.1 % | 30.3 % | 35.4 % | 13.1 % | 99 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | |
| 普通科 | 25.2 % | 24.1 % | 24.0 % | 18.1 % | 8.6 % | 626 |
| 専門学科 | 24.4 % | 23.5 % | 27.7 % | 17.2 % | 7.2 % | 221 |
| 特進クラス | 25.3 % | 28.9 % | 19.3 % | 19.3 % | 7.2 % | 83 |
| 総合学科 | 25.9 % | 22.2 % | 40.7 % | 3.7 % | 7.4 % | 27 |
| 定時制 | 16.7 % | 7.1 % | 45.2 % | 19.0 % | 12.0 % | 42 |
| その他 | 20.2 % | 14.1 % | 35.4 % | 18.2 % | 12.1 % | 99 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 普通科 | 8.0 % | 13.7 % | 31.2 % | 25.9 % | 21.3 % | 626 |
| 専門学科 | 12.2 % | 14.5 % | 31.7 % | 24.4 % | 17.2 % | 221 |
| 特進クラス | 12.1 % | 19.3 % | 25.3 % | 25.4 % | 18.1 % | 83 |
| 総合学科 | 3.7 % | 22.2 % | 22.2 % | 44.4 % | 7.4 % | 27 |
| 定時制 | 16.7 % | 7.1 % | 47.6 % | 16.7 % | 11.9 % | 42 |
| その他 | 10.1 % | 9.1 % | 36.4 % | 28.3 % | 16.2 % | 99 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

次に、所属している学科と地域に対する意識の関係について、表 5.1 に示している。なお、「一員」および「愛着」については、学科による有意な差は見られなかった。表から、以下の傾向が見て取れる。まず、普通科の生徒については、「将来」について「あてはまらない」がやや低い傾向が示されている。また、総合学科については「必要」について「ややあてはまる」が多い傾向が示されている。そして、定時制については「将来」について「あてはまらない」が高く、「困難」について「あまりあてはまらない」が低く、「必要」については「あてはまらない」が多い傾向を示している。普通科と異なるコースを選択する生徒は、地元に対して関心が高いことを示している可能性がある。また、定時制については、地元に残りたい、というよりは地元を離れるのが困難な事情があり、それでも勉強するために定時制コースを選択している可能性が見て取れる。

表 5.2: 成績と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|---------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 高 ~ 低 | 第1群 | 14.6 % | 9.8 % | 22.0 % | 31.7 % | 22.0 % | 41 |
| | 第2群 | 7.8 % | 14.8 % | 17.7 % | 39.5 % | 20.2 % | 243 |
| | 第3群 | 10.2 % | 17.4 % | 21.8 % | 33.3 % | 17.4 % | 547 |
| | 第4群 | 17.0 % | 15.5 % | 27.2 % | 28.2 % | 12.1 % | 206 |
| | 第5群 | 21.3 % | 8.2 % | 26.2 % | 24.6 % | 19.8 % | 61 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 高 ~ 低 | 第1群 | 14.6 % | 2.4 % | 9.8 % | 39.0 % | 34.2 % | 41 |
| | 第2群 | 7.4 % | 9.5 % | 12.4 % | 39.5 % | 31.3 % | 243 |
| | 第3群 | 7.0 % | 7.5 % | 18.7 % | 38.4 % | 28.5 % | 547 |
| | 第4群 | 7.3 % | 9.2 % | 26.2 % | 32.5 % | 24.8 % | 206 |
| | 第5群 | 8.2 % | 6.6 % | 13.1 % | 42.6 % | 29.5 % | 61 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | | |
| 高 ~ 低 | 第1群 | 31.7 % | 19.5 % | 19.5 % | 9.8 % | 19.5 % | 41 |
| | 第2群 | 26.3 % | 28.4 % | 22.6 % | 14.4 % | 8.2 % | 243 |
| | 第3群 | 24.3 % | 23.6 % | 25.8 % | 17.7 % | 8.6 % | 547 |
| | 第4群 | 21.8 % | 18.0 % | 35.0 % | 20.9 % | 4.4 % | 206 |
| | 第5群 | 19.7 % | 11.5 % | 26.2 % | 24.6 % | 18.0 % | 61 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 高 ~ 低 | 第1群 | 14.6 % | 9.8 % | 34.2 % | 17.1 % | 24.4 % | 41 |
| | 第2群 | 11.1 % | 18.9 % | 19.8 % | 32.1 % | 18.1 % | 243 |
| | 第3群 | 8.6 % | 13.4 % | 34.0 % | 22.3 % | 21.8 % | 547 |
| | 第4群 | 10.2 % | 11.2 % | 30.9 % | 28.2 % | 13.6 % | 206 |
| | 第5群 | 6.6 % | 9.8 % | 39.3 % | 31.2 % | 13.1 % | 61 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

5.3 家庭外の活動と地元に対する意識の関係

本節では、家庭外の活動と地元に対する意識の関係について概観する。

まず、学校生活の重要な指標である成績と地元に対する意識の関係についてみる。今回の調査では、成績として校内偏差を5段階に分けて回答してもらっている。校内偏差はあくまで校内の相対的な学力に基づく成績であり、通常は異なる高校同士を比較することはできない。そのため、のちの章では指標化を行う。ただし、本章ではあくまで当該高校内での活動の指標として用いるため、調整などは行わず、直接用いた。

表5.2には、成績と地元に対する意識の関係が示されている。傾向としては、まず、成績のもっとも良い第1群については「愛着」について「あてはまらない」が多くなっている。続く第2群については、「将来」について「あてはまらない」が少なく「ややあてはまる」が多い。また、「必要」について、「どちらでもない」が少なく、「あまりあてはまらない」が多くなっている。下から2番目の第4群については「将来」について「あてはまらない」が多く「あてはまる」が少なくなっており、「愛着」については「どちらともいえない」が多くなっている。「困難」については「あてはまる」が少なくなっている。最後の第5群については、「困難」で「あまりあてはまらない」が少なく、「あてはまる」が多くなっている。これらの結果は、成績によるグラデーションをはっきり示してはいない。どちらかという「将来」の傾向から、第2群と第4群で地域への関心が逆方向を示しているくらいである。ただし、最も成績の低い第5群において、地域を離れることが困難という回答が多くなっている。因果関係は今回の結果からは不明だが、離れることが難しいために地域に残らざるを得ない層の潜在的な予備軍である可能性も否定できない。

表 5.3: 部活等への所属と地域に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | |
| 所属している | 5.4 % | 11.2 % | 24.6 % | 33.5 % | 25.3 % | 794 |
| 所属していない | 12.5 % | 10.2 % | 27.3 % | 27.6 % | 22.4 % | 304 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | |
| 所属している | 10.1 % | 15.2 % | 21.4 % | 35.4 % | 17.9 % | 794 |
| 所属していない | 16.1 % | 16.8 % | 24.0 % | 27.3 % | 15.8 % | 304 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 所属している | 5.9 % | 7.4 % | 17.1 % | 39.4 % | 30.1 % | 794 |
| 所属していない | 11.5 % | 9.5 % | 20.4 % | 33.6 % | 25.0 % | 304 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | |
| 所属している | 25.6 % | 24.7 % | 25.7 % | 16.4 % | 7.7 % | 794 |
| 所属していない | 21.1 % | 17.8 % | 29.0 % | 21.1 % | 11.2 % | 304 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 所属している | 8.8 % | 13.9 % | 30.1 % | 26.6 % | 20.7 % | 794 |
| 所属していない | 11.5 % | 13.8 % | 35.9 % | 24.0 % | 14.8 % | 304 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表5.3には、学内や学外のクラブやサークル・部活に所属しているかどうかと地元に対する意識の関係について示している。所属しているか所属していないかと、地元に対する意識の間には一定の関係があることが見て取れる。どこにも所属していない場合、「一員」「愛着」については「あてはまらない」が多くなる。「将来」については「あてはまらない」が多く「ややあてはまる」が少なくなっている。「困難」については「あまりあてはまらない」が少なくなり、「あてはまる」が多くなる。「必要」については「あてはまる」が少なくなる。この結果の因果関係は、今回の調査からは明らかにできない。例えば「一員」については所属していない場合に

疎外感を感じていることを示しているが、クラブ活動等に参加しないことで疎外感を感じているのか、もともと地域に対して疎外感を感じているために活動に参加していないのか、の区別はできない。因果関係はともかく、こうした活動に参加していない層については地域との間に心理的な距離を感じている可能性がある程度あることは示されている。また、「困難」については、地域を離れることが困難な層がクラブ活動等に参加できていないことを示している。こうした活動には一定の費用と自由な時間が必要であるが、経済状況など何らかの理由で本人の意思と関係なく参加できていない層の存在も示唆している。

表 5.4: 友人・知人の数と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----------------|-------|-------|-------|-------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | |
| 30人以上 | 5.0% | 8.4% | 24.5% | 32.4% | 29.7% | 522 |
| 10～29人 | 6.4% | 11.5% | 25.2% | 34.4% | 22.6% | 349 |
| 5～9人 | 7.7% | 16.1% | 30.8% | 30.1% | 15.3% | 143 |
| 1～5人 | 22.8% | 17.5% | 17.5% | 24.6% | 17.5% | 57 |
| ほとんどいない | 33.3% | 11.1% | 29.6% | 14.8% | 11.1% | 27 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | |
| 30人以上 | 8.6% | 15.3% | 25.9% | 33.7% | 16.5% | 522 |
| 10～29人 | 11.2% | 15.5% | 17.8% | 35.8% | 19.8% | 349 |
| 5～9人 | 14.7% | 20.3% | 23.1% | 27.3% | 14.7% | 143 |
| 1～5人 | 29.8% | 5.3% | 17.5% | 33.3% | 14.0% | 57 |
| ほとんどいない | 25.9% | 22.2% | 11.1% | 18.5% | 22.2% | 27 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 30人以上 | 5.6% | 5.9% | 16.5% | 40.0% | 32.0% | 522 |
| 10～29人 | 6.6% | 7.7% | 17.5% | 39.8% | 28.4% | 349 |
| 5～9人 | 9.8% | 12.6% | 21.7% | 37.1% | 18.9% | 143 |
| 1～5人 | 15.8% | 15.8% | 24.6% | 17.5% | 26.3% | 57 |
| ほとんどいない | 25.9% | 11.1% | 22.2% | 14.8% | 25.9% | 27 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | |
| 30人以上 | 27.8% | 24.0% | 24.9% | 16.3% | 7.1% | 522 |
| 10～29人 | 20.9% | 24.4% | 26.4% | 18.9% | 9.5% | 349 |
| 5～9人 | 18.9% | 24.5% | 31.5% | 17.5% | 7.7% | 143 |
| 1～5人 | 28.1% | 3.5% | 33.3% | 22.8% | 12.3% | 57 |
| ほとんどいない | 22.2% | 11.1% | 22.2% | 18.5% | 25.9% | 27 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 30人以上 | 7.5% | 13.0% | 32.2% | 26.4% | 20.9% | 522 |
| 10～29人 | 9.2% | 15.8% | 31.2% | 24.9% | 18.9% | 349 |
| 5～9人 | 9.1% | 15.4% | 34.3% | 26.6% | 14.7% | 143 |
| 1～5人 | 26.3% | 7.0% | 24.6% | 26.3% | 15.8% | 57 |
| ほとんどいない | 22.2% | 11.1% | 29.6% | 22.2% | 14.8% | 27 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.4 には、友人・知人の数と地元に対する意識の関係について示されている。まず、友人がほとんどいない場合、「一員」の「あてはまらない」が多く、「愛着」についても「あてはまらない」が多くなり、「ややあてはまる」が少なくなっている。一方で、「困難」については「あてはまる」が多くなっており、地域と距離を感じている一方で、離れることができない状況にある層が存在することが示されている。また、1~4人と少数の場合も、「一員」「将来」「愛着」についていずれも「あてはまらない」が多くなっている。「困難」については「あまりあてはまらない」が少なく、「必要」については「あてはまらない」が多くなっている。友人・知人の数は、高校生が現在地域に持っている社会的ネットワークの大きさを示していると考えられる。ネットワークが構築されていない層が、そのうえで地域を離れることが難しいという状況に対しては、何らかの手当てが必要だろう。

表 5.5: 学習塾や習い事と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| なにもしていない | 選択 | 7.2 % | 8.3 % | 19.4 % | 37.9 % | 27.1 % | 870 |
| | 非選択 | 8.3 % | 7.0 % | 12.7 % | 37.3 % | 34.7 % | 228 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | | |
| 習い事 | 選択 | 23.9 % | 20.2 % | 17.4 % | 24.8 % | 13.8 % | 109 |
| | 非選択 | 24.4 % | 23.1 % | 27.6 % | 16.9 % | 8.1 % | 989 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.5 には、学習塾や習い事を行っているかどうかと、地元に対する意識の関係について示している。選択肢としては「学習塾」、「習い事」、「なにもしていない」、の中から複数選択を許容している。まず、学習塾については、通っているかどうかで有意な差は見られなかった。習い事をしている場合、「困難」について「あてはまる」「ややあてはまる」が多いという結果になった。また、何もしていない場合、愛着について「あてはまる」が少なくなっている。習い事や学習塾についても広い意味で社会的なネットワークの一端をなしていると考えられる。今回の調査では因果関係の特定はできず、ネットワークを構築できていないために愛着を感じていないのか、愛着を感じていないからネットワークを構築していないのかはわからない。いずれにせよ、ネットワークを構築できていない層が、地域に対して愛着を感じていない可能性がある。

表 5.6: 保有資格と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|----------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 製造・電気・建設・土木関係 | 選択 | 7.1 % | 0.0 % | 21.4 % | 25.0 % | 46.4 % | 28 |
| | 非選択 | 7.4 % | 11.2 % | 25.4 % | 32.1 % | 23.9 % | 1070 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 技術関係 | 選択 | 7.9 % | 18.4 % | 36.8 % | 25.0 % | 11.8 % | 76 |
| | 非選択 | 12.0 % | 15.5 % | 21.0 % | 33.8 % | 17.7 % | 1022 |
| 英語関係 | 選択 | 9.0 % | 17.7 % | 17.4 % | 36.5 % | 19.4 % | 345 |
| | 非選択 | 13.0 % | 14.7 % | 24.3 % | 31.6 % | 16.3 % | 753 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | | |
| 法律・財務・経営・不動産関係 | 選択 | 32.0 % | 28.0 % | 4.0 % | 32.0 % | 4.0 % | 25 |
| | 非選択 | 24.1 % | 22.7 % | 27.1 % | 17.3 % | 8.8 % | 1073 |
| 英語関係 | 選択 | 27.0 % | 31.0 % | 19.1 % | 14.5 % | 8.4 % | 345 |
| | 非選択 | 23.1 % | 19.0 % | 30.0 % | 19.1 % | 8.8 % | 753 |
| もっていない | 選択 | 24.4 % | 18.5 % | 30.2 % | 17.7 % | 9.2 % | 480 |
| | 非選択 | 24.3 % | 26.1 % | 23.8 % | 17.6 % | 8.3 % | 618 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 医療・保健衛生・社会福祉関係 | 選択 | 22.7 % | 18.2 % | 9.1 % | 27.2 % | 22.7 % | 22 |
| | 非選択 | 9.3 % | 13.8 % | 32.2 % | 25.8 % | 19.0 % | 1076 |
| 教育関係 | 選択 | 10.0 % | 0.0 % | 70.0 % | 0.0 % | 20.0 % | 10 |
| | 非選択 | 9.6 % | 14.0 % | 31.3 % | 26.1 % | 19.0 % | 1088 |
| 事務処理関係 | 選択 | 8.3 % | 15.3 % | 44.4 % | 27.8 % | 4.2 % | 72 |
| | 非選択 | 9.7 % | 13.7 % | 30.8 % | 25.7 % | 20.1 % | 1026 |
| 英語関係 | 選択 | 8.1 % | 17.7 % | 28.4 % | 27.3 % | 18.6 % | 345 |
| | 非選択 | 10.2 % | 12.1 % | 33.2 % | 25.2 % | 19.3 % | 753 |
| もっていない | 選択 | 11.5 % | 12.3 % | 30.1 % | 24.6 % | 21.3 % | 480 |
| | 非選択 | 8.1 % | 15.1 % | 32.7 % | 26.9 % | 17.3 % | 618 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.6 には、現在持っている免許・資格と地元に対する意識の関係について示している。なお、回答者が 10 名未満であった「営業・販売・サービス・保安関係」「運輸・通信関係」「統計関連」は分析に含めなかった。まず、何でもよいので何か資格を持っている場合、「困難」については「あまりあてはまらない」が多く、「どちらでもない」が少なくなっている。「必要」については「あてはまらない」「あてはまる」という両側の回答が少なく、回答が中央に寄っている傾向が見て取れる。英語系の資格については、「将来」について「あてはまらない」「どちらでもない」が少なくなっている。「困難」については「あまりあてはまらない」が多く「どちらでもない」が少なくなっている。「必要」については「あまりあてはまらない」が多くなっている。他のものについては選択した人数が少ないこともあり評価が難しいが、「製造・電気・建築・土木関係」については、「一員」で「あまりあてはまらない」がおらず、「あてはまる」が多くなっている。これは、後述する進路において、希望する業種と整合した結果となっている。一方で、「医療・保健衛生・社会福祉」については「困難」で「あて

はまらない」が多くなっており、こちらは後述の希望する業種とは逆の結果になっている。資格などの取得には、将来の進路を意識したものと、学習の成果の確認のためのものが混在していると考えられるが、何らかの資格を持っている場合、地域を離れることがあまり困難ではないことが示唆されている。逆に言えば、こうした資格を取得できていない層が、地域を離れることの困難さにより地域に残る可能性がある。

表 5.7 には、取得したいと思う資格・免許の種類と地元に対する意識の関係について示している。「特にない」と答えている場合、「一員」は「あてはまらない」が多く「あてはまる」が少なくなっている。「将来」についても、「あてはまらない」が多く、「あまりあてはまらない」が少なくなっている。「愛着」についても「あてはまらない」が多くなっている。「困難」については「あまりあてはまらない」が少なく、「どちらでもない」が多くなっている。個別の資格を見ると、「英語関係」について、「将来」の「ややあてはまる」が多く、「必要」については「あてはまる」が少なくなっている。「法律・財務・経営・不動産関係」については「困難」について「あてはまらない」が多く、「必要」についても「あまりあてはまらない」が多くなっている。「教育関係」については「必要」の「あてはまる」が多くなっている。現在持っている資格等と同様、特にないと回答している場合、全体的に地域との間に距離を感じている一方で地域を離れるのが困難であるという傾向が見える。また、英語のように視野が広がる資格に関心のある層は地域に関する関心も高い傾向にあることがわかる。一方で、教育関係の資格は地域にいる必要がある場合に、その手段として考えられている傾向も見て取れる。

次に、地域における様々な体験と地元に対する意識の関係についてみてみよう。まず、表 5.8 は「学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある」と地元に対する意識の関係について示している。活動を中学生で経験している場合、「困難」について「あてはまらない」が多くなっている。また、高校で体験していると「必要」について「あてはまる」が少なく、「あてはまらない」が多くなっている。アウトドアの活動を学校以外でも体験している層は、地域にいる必要性がない層である傾向にあるようだ。

次に、「興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある」と地元に対する意識の関係について表 5.9 に示した。まず、小学生で体験していると「将来」について「あてはまる」が多くなっている。中学生で体験していると、「一員」の「あてはまらない」が少なくなっている。「将来」については「ややあてはまる」が多くなり、「あてはまらない」が少なくなっている。「愛着」については「あてはまらない」が少ない。「困難」については「あてはまる」が少ない。「必要」についても「あてはまらない」が少なく、「ややあてはまる」が多い。高校生で体験していると、「困難」について「ややあてはまる」が多い。体験していないと「一員」「将来」「愛着」について「あてはまらない」が多くなっている。「必要」については「ややあてはまる」が少なくなっている。体験する段階に応じて少し傾向に違いがあるが、一度も体験していない場合は、やはり地域との間に距離を感じている傾向が見て取れる。

続いて、表 5.10 には「職場見学や職場訪問をしたことがある」と地元に対する意識の関係について示している。小学生で体験していると、「一員」については「ややあてはまる」が多く、「愛着」「必要」については「あてはまる」が多い。中学生で体験していると「一員」の「あてはまらない」が少ない。高校生で経験していると「必要」の「ややあてはまる」が多く「あまりあてはまらない」が少ない。一度も経験していないと、「一員」「愛着」「必要」の「あてはまらない」が多く、「一員」については「ややあてはまる」が少なくなっている。体験した時期により少し傾向は異なるが、職場見学を行うことで地域との距離が縮まる効果があるようだ。その一方で、こちらも一度も体験していない層は地域との間に距離を感じているように見える。

4つ目の活動として、「職場体験やインターンシップを体験したことがある」と地元に対する意識の関係について表 5.11 に示している。中学生で経験していると、「一員」について「あてはまらない」から「ややあてはまらない」へのシフトがみられる。高校生で経験していると「必要」について「あまりあてはまらない」が少なくなっている。高校生における職場体験は、より就職活動に直結した体験であると考えられる。地元に残る必要がある層が、積極的にそうした機会を利用している様子がうかがえる。

5つ目に、「地域の祭りに参加したことがある」と地元に対する意識の関係について表 5.12 に示している。

表 5.7: 取得したい資格と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|----------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 特にない | 選択 | 15.2 % | 9.8 % | 26.6 % | 32.1 % | 16.3 % | 184 |
| | 非選択 | 5.8 % | 11.2 % | 25.1 % | 31.8 % | 26.2 % | 914 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 英語関係 | 選択 | 9.1 % | 18.5 % | 19.4 % | 39.0 % | 15.0 % | 428 |
| | 非選択 | 13.4 % | 14.5 % | 23.9 % | 29.4 % | 18.8 % | 670 |
| 特にない | 選択 | 19.0 % | 11.4 % | 22.3 % | 31.5 % | 15.8 % | 184 |
| | 非選択 | 10.3 % | 16.5 % | 22.1 % | 33.5 % | 17.6 % | 914 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 特にない | 選択 | 14.7 % | 6.0 % | 22.3 % | 33.7 % | 23.4 % | 184 |
| | 非選択 | 6.0 % | 8.4 % | 17.2 % | 38.6 % | 29.8 % | 914 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | | |
| 法律・財務・経営・不動産関係 | 選択 | 30.3 % | 24.7 % | 17.6 % | 20.4 % | 7.0 % | 142 |
| | 非選択 | 23.4 % | 22.5 % | 27.9 % | 17.3 % | 8.9 % | 956 |
| 運輸・通信関係 | 選択 | 32.4 % | 38.2 % | 17.7 % | 2.9 % | 8.8 % | 34 |
| | 非選択 | 24.1 % | 22.3 % | 26.9 % | 18.1 % | 8.7 % | 1064 |
| 製造・電気・建設・土木関係 | 選択 | 34.2 % | 13.9 % | 32.9 % | 12.7 % | 6.3 % | 79 |
| | 非選択 | 23.6 % | 23.6 % | 26.1 % | 18.1 % | 8.8 % | 1019 |
| 英語関係 | 選択 | 27.1 % | 27.8 % | 20.6 % | 18.0 % | 6.5 % | 428 |
| | 非選択 | 22.5 % | 19.6 % | 30.5 % | 17.5 % | 10.0 % | 670 |
| 特にない | 選択 | 25.0 % | 15.8 % | 33.7 % | 16.9 % | 8.7 % | 184 |
| | 非選択 | 24.2 % | 24.2 % | 25.2 % | 17.9 % | 8.6 % | 914 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 法律・財務・経営・不動産関係 | 選択 | 12.7 % | 21.1 % | 24.7 % | 23.2 % | 18.3 % | 142 |
| | 非選択 | 9.1 % | 12.8 % | 32.7 % | 26.3 % | 19.1 % | 956 |
| 教育関係 | 選択 | 11.1 % | 17.7 % | 22.7 % | 22.7 % | 26.0 % | 181 |
| | 非選択 | 9.3 % | 13.1 % | 33.5 % | 26.5 % | 17.7 % | 917 |
| 事務処理関係 | 選択 | 10.0 % | 20.8 % | 30.8 % | 27.5 % | 10.8 % | 120 |
| | 非選択 | 9.5 % | 13.0 % | 31.8 % | 25.7 % | 20.0 % | 978 |
| 運輸・通信関係 | 選択 | 11.8 % | 32.4 % | 29.4 % | 8.8 % | 17.7 % | 34 |
| | 非選択 | 9.5 % | 13.3 % | 31.8 % | 26.4 % | 19.1 % | 1064 |
| 英語関係 | 選択 | 10.5 % | 15.4 % | 30.4 % | 28.5 % | 15.2 % | 428 |
| | 非選択 | 9.0 % | 12.8 % | 32.5 % | 24.2 % | 21.5 % | 670 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.8: 学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|----------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域を離れるのが困難であると | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 30.4 % | 20.6 % | 25.5 % | 16.7 % | 6.9 % | 306 |
| | 非選択 | 22.0 % | 23.6 % | 27.0 % | 18.1 % | 9.3 % | 792 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 高校生 | 選択 | 13.8 % | 13.0 % | 34.8 % | 27.5 % | 10.9 % | 138 |
| | 非選択 | 9.0 % | 14.0 % | 31.3 % | 25.6 % | 20.2 % | 960 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

小学生で体験していると「一員」「将来」「愛着」については「あてはまる」が多く、「一員」「将来」については「あまりあてはまらない」が少ない。中学生で経験していると「愛着」について「あまりあてはまらない」が少なく、「あてはまる」が多い。高校生で体験していると「一員」「愛着」について「あまりあてはまらない」が少なく、「あてはまる」が多くなっている。経験がない場合、「一員」「将来」「愛着」について「あまりあてはまらない」「あてはまらない」が多くなっており、「あてはまる」が少なくなっている。特に弘前では、ねぷたまつりに代表されるように、町内会単位での祭りが行われている。こうした祭りに参加することで、地域に対する愛着が涵養されている可能性がある。一方で、こうした祭りに参加しない、あるいはできない層については、地域との間に距離ができてしまう傾向がうかがえる。

6つ目に、「地域のイベントに参加したことがある」と地元に対する意識の関係について表 5.13 に示している。小学生で経験していると、「一員」「将来」について「あてはまらない」が少なく、「ややあてはまる」が多くなっている。「愛着」については「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が少なく、「あてはまる」が多くなっている。「必要」については「あてはまらない」が少なくなっている。中学生で経験していると「一員」「困難」について「ややあてはまる」が多くなっている。「愛着」「必要」については「あてはまる」が多くなっている。高校生で経験していると「一員」について「ややあてはまる」が多く、「一員」「将来」とともに「あまりあてはまらない」が少なくなっている。高校生で経験していると「将来」について「ややあてはまる」が多く、「必要」については「あてはまる」が多く「あまりあてはまらない」が少なくなっている。経験していないと「一員」について「あてはまらない」が多く「ややあてはまる」が少なくなっている。「将来」「愛着」については「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が多く、「将来」については「ややあてはまる」「あてはまる」が少なくなっている。「必要」については「あてはまらない」が多く「あてはまる」が少なくなっている。イベントについても祭りと同様、参加することで地域との距離が縮まり、参加しないと地域との距離を感じる結果となっている。進学するにつれて参加者が減っていき、「必要」の重要性が増しているようにも見える。

7つ目に、「地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある」と地元に対する意識の関係について表 5.14 に示している。小学生で体験していると、「一員」の「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が少なく、「あてはまる」が多くなっている。また、「将来」の「ややあてはまる」が多くなっている。中学生で体験していると、「一員」や「愛着」の「あてはまる」が多くなっている。また、「将来」の「あてはまらない」が少なくなっている。高校生で体験していると「一員」や「愛着」の「あてはまる」が多くなっている。一度も参加したことがないと、「一員」や「将来」の「あてはまる」が少なく、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」が多くなっている。また、「愛着」の「あてはまらない」が多く、「あてはまる」が少なくなっている。前に見た参加と比べると、手伝いを行うということにより積極的な姿勢が求められる体験である。年代にかかわらず、こうした体験を通じて地域に対する意識が高まっていることがうかがえる。

表 5.9: 興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 6.4 % | 10.3 % | 24.1 % | 33.3 % | 26.0 % | 751 |
| | 非選択 | 9.5 % | 12.4 % | 28.0 % | 28.8 % | 21.3 % | 347 |
| 経験なし | 選択 | 15.0 % | 11.0 % | 31.0 % | 24.0 % | 19.0 % | 100 |
| | 非選択 | 6.6 % | 10.9 % | 24.8 % | 32.7 % | 25.1 % | 998 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 11.1 % | 17.2 % | 18.7 % | 31.9 % | 21.1 % | 379 |
| | 非選択 | 12.1 % | 14.9 % | 23.9 % | 33.8 % | 15.3 % | 719 |
| 中学生 | 選択 | 10.0 % | 15.7 % | 20.5 % | 36.6 % | 17.2 % | 751 |
| | 非選択 | 15.6 % | 15.6 % | 25.7 % | 25.7 % | 17.6 % | 347 |
| 経験なし | 選択 | 22.0 % | 9.0 % | 32.0 % | 17.0 % | 20.0 % | 100 |
| | 非選択 | 10.7 % | 16.3 % | 21.1 % | 34.8 % | 17.0 % | 998 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 6.4 % | 7.5 % | 16.9 % | 39.6 % | 29.7 % | 751 |
| | 非選択 | 9.8 % | 9.2 % | 20.5 % | 34.0 % | 26.5 % | 347 |
| 高校生 | 選択 | 6.7 % | 8.1 % | 16.5 % | 39.3 % | 29.4 % | 806 |
| | 非選択 | 9.6 % | 7.9 % | 22.3 % | 33.6 % | 26.7 % | 292 |
| 経験なし | 選択 | 16.0 % | 6.0 % | 24.0 % | 31.0 % | 23.0 % | 100 |
| | 非選択 | 6.6 % | 8.2 % | 17.4 % | 38.5 % | 29.3 % | 998 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 23.6 % | 24.1 % | 26.1 % | 18.9 % | 7.3 % | 751 |
| | 非選択 | 25.9 % | 19.9 % | 27.7 % | 15.0 % | 11.5 % | 347 |
| 高校生 | 選択 | 24.4 % | 24.1 % | 24.1 % | 19.1 % | 8.3 % | 806 |
| | 非選択 | 24.0 % | 19.2 % | 33.6 % | 13.7 % | 9.6 % | 292 |
| 経験なし | 選択 | 30.0 % | 15.0 % | 37.0 % | 7.0 % | 11.0 % | 100 |
| | 非選択 | 23.8 % | 23.6 % | 25.6 % | 18.7 % | 8.4 % | 998 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 8.3 % | 14.0 % | 30.4 % | 27.7 % | 19.7 % | 751 |
| | 非選択 | 12.4 % | 13.5 % | 34.6 % | 21.9 % | 17.6 % | 347 |
| 経験なし | 選択 | 10.0 % | 10.0 % | 45.0 % | 15.0 % | 20.0 % | 100 |
| | 非選択 | 9.5 % | 14.2 % | 30.4 % | 27.0 % | 18.9 % | 998 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.10: 職場見学や職場訪問をしたことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 6.2 % | 10.7 % | 23.2 % | 35.5 % | 24.5 % | 634 |
| | 非選択 | 9.1 % | 11.2 % | 28.2 % | 26.9 % | 24.6 % | 464 |
| 中学生 | 選択 | 4.8 % | 13.0 % | 22.6 % | 34.1 % | 25.6 % | 461 |
| | 非選択 | 9.3 % | 9.4 % | 27.3 % | 30.3 % | 23.7 % | 637 |
| 経験なし | 選択 | 12.1 % | 11.6 % | 26.3 % | 23.2 % | 26.8 % | 190 |
| | 非選択 | 6.4 % | 10.8 % | 25.1 % | 33.7 % | 24.0 % | 908 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 6.9 % | 7.1 % | 16.3 % | 38.2 % | 31.6 % | 634 |
| | 非選択 | 8.2 % | 9.3 % | 20.5 % | 37.3 % | 24.8 % | 464 |
| 経験なし | 選択 | 11.6 % | 7.9 % | 21.1 % | 34.7 % | 24.7 % | 190 |
| | 非選択 | 6.6 % | 8.0 % | 17.4 % | 38.4 % | 29.5 % | 908 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 9.0 % | 13.9 % | 29.7 % | 25.6 % | 21.9 % | 634 |
| | 非選択 | 10.3 % | 13.8 % | 34.5 % | 26.3 % | 15.1 % | 464 |
| 高校生 | 選択 | 7.1 % | 10.3 % | 31.6 % | 33.0 % | 18.1 % | 282 |
| | 非選択 | 10.4 % | 15.1 % | 31.7 % | 23.4 % | 19.4 % | 816 |
| 経験なし | 選択 | 14.7 % | 12.6 % | 35.8 % | 20.5 % | 16.3 % | 190 |
| | 非選択 | 8.5 % | 14.1 % | 30.8 % | 27.0 % | 19.6 % | 908 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.11: 職場体験やインターンシップを体験したことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 2.1 % | 14.2 % | 22.1 % | 35.5 % | 26.1 % | 330 |
| | 非選択 | 9.6 % | 9.5 % | 26.7 % | 30.3 % | 23.8 % | 768 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 高校生 | 選択 | 8.3 % | 9.9 % | 31.9 % | 29.6 % | 20.4 % | 314 |
| | 非選択 | 10.1 % | 15.4 % | 31.6 % | 24.4 % | 18.5 % | 784 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.12: 地域の祭りに参加したことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 7.0 % | 10.1 % | 24.4 % | 32.3 % | 26.2 % | 934 |
| | 非選択 | 9.8 % | 15.9 % | 30.5 % | 29.3 % | 14.6 % | 164 |
| 中学生 | 選択 | 6.8 % | 9.6 % | 23.8 % | 33.4 % | 26.3 % | 676 |
| | 非選択 | 8.3 % | 13.0 % | 27.7 % | 29.4 % | 21.6 % | 422 |
| 高校生 | 選択 | 7.7 % | 8.6 % | 21.7 % | 35.4 % | 26.6 % | 452 |
| | 非選択 | 7.1 % | 12.5 % | 27.9 % | 29.4 % | 23.1 % | 646 |
| 経験なし | 選択 | 12.2 % | 17.8 % | 26.7 % | 26.7 % | 16.7 % | 90 |
| | 非選択 | 6.9 % | 10.3 % | 25.2 % | 32.3 % | 25.2 % | 1008 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 11.4 % | 14.9 % | 21.0 % | 34.5 % | 18.3 % | 934 |
| | 非選択 | 14.0 % | 20.1 % | 28.7 % | 25.6 % | 11.6 % | 164 |
| 高校生 | 選択 | 12.6 % | 15.5 % | 17.5 % | 35.6 % | 18.8 % | 452 |
| | 非選択 | 11.2 % | 15.8 % | 25.4 % | 31.4 % | 16.3 % | 646 |
| 経験なし | 選択 | 17.8 % | 21.1 % | 22.2 % | 31.1 % | 7.8 % | 90 |
| | 非選択 | 11.2 % | 15.2 % | 22.1 % | 33.3 % | 18.2 % | 1008 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 7.1 % | 7.8 % | 16.7 % | 37.9 % | 30.5 % | 934 |
| | 非選択 | 9.8 % | 9.2 % | 25.6 % | 37.2 % | 18.3 % | 164 |
| 中学生 | 選択 | 7.0 % | 5.5 % | 18.3 % | 37.7 % | 31.5 % | 676 |
| | 非選択 | 8.3 % | 12.1 % | 17.5 % | 37.9 % | 24.2 % | 422 |
| 高校生 | 選択 | 6.4 % | 5.8 % | 15.5 % | 37.4 % | 35.0 % | 452 |
| | 非選択 | 8.2 % | 9.6 % | 19.8 % | 38.1 % | 24.3 % | 646 |
| 経験なし | 選択 | 13.3 % | 11.1 % | 20.0 % | 36.7 % | 18.9 % | 90 |
| | 非選択 | 6.9 % | 7.7 % | 17.9 % | 37.9 % | 29.6 % | 1008 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

8つ目に、「有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある」と地元に対する意識の関係について表 5.15 に示している。小学生で体験していると「困難」の「あてはまる」が少なく、「あまりあてはまらない」が多くなっている。高校生で体験していると、「愛着」の「あてはまる」が多くなっている。一度もない場合、「将来」や「愛着」の「あまりあてはまらない」「あてはまらない」が多くなっている。また、「困難」の「あまりあてはまらない」が少なく、「あてはまる」が多くなっている。有料の習い事は、通常の教育に加えて費用のかかる体験である。「困難」の結果からは、早期に体験できるのは比較的余裕のある家庭で、一度も経験できていないのは不利な立場にある家庭である可能性が示されている。また、こうした場合は学校以外のネットワークが広がる場であると考えられる。そのため、地域に対する意識が高まっているのではないかと考えられる。

表 5.16 には、ボランティア活動への参加と地元に対する意識の関係について示している。「福祉に関係した活動」をしていると「一員」「愛着」の「あてはまる」が多く、「あてはまらない」が少ない。また、「将来」の「あてはまらない」が少なく「ややあてはまる」が多い。「子どもに関係した活動」をしていると「一員」の「や

表 5.13: 地域のイベントに参加したことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 6.0 % | 10.3 % | 23.3 % | 34.3 % | 26.1 % | 832 |
| | 非選択 | 11.7 % | 12.8 % | 31.6 % | 24.4 % | 19.6 % | 266 |
| 中学生 | 選択 | 6.4 % | 9.4 % | 20.2 % | 37.4 % | 26.6 % | 530 |
| | 非選択 | 8.3 % | 12.3 % | 30.1 % | 26.8 % | 22.5 % | 568 |
| 高校生 | 選択 | 5.9 % | 8.1 % | 20.5 % | 37.5 % | 28.0 % | 307 |
| | 非選択 | 8.0 % | 12.0 % | 27.2 % | 29.7 % | 23.1 % | 791 |
| 経験なし | 選択 | 12.7 % | 13.8 % | 33.7 % | 22.1 % | 17.7 % | 181 |
| | 非選択 | 6.3 % | 10.4 % | 23.7 % | 33.8 % | 25.9 % | 917 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 9.7 % | 14.4 % | 21.2 % | 36.5 % | 18.2 % | 832 |
| | 非選択 | 18.1 % | 19.6 % | 25.2 % | 22.6 % | 14.7 % | 266 |
| 中学生 | 選択 | 11.3 % | 13.2 % | 19.3 % | 36.6 % | 19.6 % | 530 |
| | 非選択 | 12.2 % | 18.0 % | 24.8 % | 29.9 % | 15.1 % | 568 |
| 高校生 | 選択 | 10.1 % | 13.4 % | 18.6 % | 38.4 % | 19.5 % | 307 |
| | 非選択 | 12.4 % | 16.6 % | 23.5 % | 31.1 % | 16.4 % | 791 |
| 経験なし | 選択 | 19.3 % | 22.1 % | 24.9 % | 22.1 % | 11.6 % | 181 |
| | 非選択 | 10.3 % | 14.4 % | 21.6 % | 35.3 % | 18.4 % | 917 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 6.4 % | 7.1 % | 17.3 % | 38.9 % | 30.3 % | 832 |
| | 非選択 | 10.9 % | 10.9 % | 20.3 % | 34.2 % | 23.7 % | 266 |
| 中学生 | 選択 | 7.4 % | 6.6 % | 16.0 % | 37.9 % | 32.1 % | 530 |
| | 非選択 | 7.6 % | 9.3 % | 19.9 % | 37.7 % | 25.5 % | 568 |
| 高校生 | 選択 | 6.8 % | 7.5 % | 15.3 % | 36.5 % | 33.9 % | 307 |
| | 非選択 | 7.7 % | 8.2 % | 19.1 % | 38.3 % | 26.7 % | 791 |
| 経験なし | 選択 | 12.2 % | 11.6 % | 18.8 % | 33.7 % | 23.8 % | 181 |
| | 非選択 | 6.5 % | 7.3 % | 17.9 % | 38.6 % | 29.7 % | 917 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 25.1 % | 22.6 % | 23.0 % | 20.6 % | 8.7 % | 530 |
| | 非選択 | 23.6 % | 22.9 % | 29.9 % | 15.0 % | 8.6 % | 568 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 7.9 % | 14.3 % | 31.7 % | 26.2 % | 19.8 % | 832 |
| | 非選択 | 14.7 % | 12.4 % | 31.6 % | 24.8 % | 16.5 % | 266 |
| 中学生 | 選択 | 9.8 % | 12.8 % | 28.7 % | 26.6 % | 22.1 % | 530 |
| | 非選択 | 9.3 % | 14.8 % | 34.5 % | 25.2 % | 16.2 % | 568 |
| 高校生 | 選択 | 8.5 % | 10.8 % | 27.4 % | 28.3 % | 25.1 % | 307 |
| | 非選択 | 10.0 % | 15.0 % | 33.4 % | 24.9 % | 16.7 % | 791 |
| 経験なし | 選択 | 14.4 % | 14.9 % | 33.2 % | 23.8 % | 13.8 % | 181 |
| | 非選択 | 8.6 % | 13.6 % | 31.4 % | 26.3 % | 20.1 % | 917 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 5.14: 地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 5.8 % | 8.9 % | 24.7 % | 33.4 % | 27.3 % | 689 |
| | 非選択 | 10.0 % | 14.4 % | 26.4 % | 29.3 % | 19.8 % | 409 |
| 中学生 | 選択 | 6.4 % | 10.4 % | 20.4 % | 32.9 % | 29.9 % | 422 |
| | 非選択 | 8.0 % | 11.2 % | 20.4 % | 31.2 % | 21.2 % | 676 |
| 高校生 | 選択 | 6.2 % | 6.9 % | 14.5 % | 35.9 % | 36.6 % | 145 |
| | 非選択 | 7.6 % | 11.5 % | 27.0 % | 31.3 % | 22.7 % | 953 |
| 経験なし | 選択 | 11.6 % | 15.1 % | 28.3 % | 28.3 % | 16.7 % | 258 |
| | 非選択 | 6.1 % | 9.6 % | 24.4 % | 33.0 % | 26.9 % | 917 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 11.3 % | 14.5 % | 21.2 % | 36.1 % | 16.8 % | 689 |
| | 非選択 | 12.5 % | 17.6 % | 23.7 % | 28.1 % | 18.1 % | 409 |
| 中学生 | 選択 | 9.2 % | 14.2 % | 21.1 % | 35.7 % | 19.7 % | 422 |
| | 非選択 | 13.3 % | 16.6 % | 22.8 % | 31.5 % | 15.0 % | 676 |
| 経験なし | 選択 | 16.7 % | 19.4 % | 20.5 % | 27.9 % | 15.5 % | 258 |
| | 非選択 | 10.2 % | 14.5 % | 22.6 % | 34.8 % | 17.9 % | 917 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 6.4 % | 6.6 % | 16.4 % | 36.3 % | 34.4 % | 422 |
| | 非選択 | 8.1 % | 8.1 % | 19.1 % | 38.8 % | 25.2 % | 676 |
| 高校生 | 選択 | 8.3 % | 8.3 % | 11.0 % | 35.9 % | 36.6 % | 145 |
| | 非選択 | 7.4 % | 8.0 % | 19.1 % | 30.1 % | 27.5 % | 953 |
| 経験なし | 選択 | 10.5 % | 9.7 % | 14.7 % | 41.1 % | 24.0 % | 258 |
| | 非選択 | 6.4 % | 7.5 % | 19.1 % | 36.8 % | 30.1 % | 917 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

やあてはまる」が多い。「スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」をしていると「一員」「将来」の「ややあてはまる」が多く「あてはまらない」が少ない。また、「必要」の「あてはまらない」が多くなっている。「まちづくり・生活に関係した活動」をしていると「一員」の「あてはまる」が多い。ボランティア活動をやったことがない場合、「一員」「将来」の「あてはまらない」が多く「あてはまる」「ややあてはまる」が少ない。「愛着」についても「あてはまらない」が多くなっている。今回の結果から、ボランティア活動への参加と地元に対する意識には何らかの相関があることについては示唆されている。特に、何の活動にも参加していない場合、地元との間に距離感が生まれているように見える。地元になじめていないからボランティア活動に参加していないのか、ボランティア活動に参加しないことにより地元に対する愛着が育まれていないのか、については、さらなる調査が必要だろう。

表 5.15: 有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 9.9 % | 16.5 % | 19.3 % | 34.9 % | 19.5 % | 545 |
| | 非選択 | 13.7 % | 14.8 % | 25.0 % | 31.5 % | 15.2 % | 553 |
| 経験なし | 選択 | 17.0 % | 14.3 % | 21.0 % | 27.1 % | 18.5 % | 265 |
| | 非選択 | 10.1 % | 16.1 % | 21.9 % | 35.1 % | 16.9 % | 833 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 中学生 | 選択 | 6.8 % | 8.4 % | 15.2 % | 38.5 % | 31.0 % | 545 |
| | 非選択 | 8.1 % | 7.6 % | 20.8 % | 37.1 % | 26.4 % | 553 |
| 高校生 | 選択 | 7.8 % | 7.3 % | 12.1 % | 37.4 % | 35.4 % | 206 |
| | 非選択 | 7.4 % | 8.2 % | 19.4 % | 37.9 % | 27.1 % | 892 |
| 経験なし | 選択 | 10.9 % | 9.1 % | 21.9 % | 32.1 % | 26.0 % | 265 |
| | 非選択 | 6.4 % | 7.7 % | 16.8 % | 39.6 % | 29.5 % | 833 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | | |
| 小学生 | 選択 | 25.5 % | 25.0 % | 25.7 % | 16.7 % | 7.1 % | 705 |
| | 非選択 | 22.1 % | 18.8 % | 28.2 % | 19.3 % | 11.5 % | 393 |
| 経験なし | 選択 | 26.4 % | 17.0 % | 25.7 % | 19.6 % | 11.3 % | 265 |
| | 非選択 | 23.7 % | 24.6 % | 26.9 % | 17.1 % | 7.8 % | 833 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

5.4 まとめ

本章では、家庭外の活動が地元に対する意識に与える影響について分析した。個々の結果については各項目に譲るが、全体的な傾向として、積極的に活動することが、地域に対する愛着を高めることが示された。課外活動なども含めて、様々な活動に参加する層が、地域に対する愛着が高い傾向が示されている。さらに言えば、何も活動に参加していない層については、地域から疎外感を感じているように見える。今回の調査から、因果関係を明確に示すことはできない。活動に参加することによって地域への愛着が高まっている可能性も、地域への愛着が高いことで様々な活動に参加する割合が高まっている可能性も、どちらも考えられる。さらに言えば、因果関係はどちらか一方に固定されるものではなく、双方向的であると考えるのが自然だろう。様々な活動に参加する機会を提供するとともに、そうした活動への参加が消極的な層へ働きかけることも必要であろう。活動に参加しない層の中には、家庭の状況などにより、活動に参加しにくい層があることも考えられる。そうした層に対して、地域における様々な活動に参加することを手助けする環境整備が重要であると考えられる。

また、友人の数など、地域に対して高校生が持っているネットワークの広さも、地元に対する愛着へ影響しているように見える。特に、友人がほとんどいないと感じている層は、地域から疎外感を感じているように見える。

こうした傾向は、やはり大学生に対する調査と同様である。大学生に対する調査でも、大学入学以前の地域における活動が、地域への愛着を高めている傾向が示されていた。また、大学における地域志向的な科目の履修が、地域への愛着を高め、初職地として地元を選択する割合を高めることも示されていた。

一方で、今回の調査からは、高校選択の段階で地元に対する意識が影響を持っている可能性も示唆された。

表 5.16: ボランティア活動への参加と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|----------------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 福祉に関係した活動 | 選択 | 4.1 % | 11.7 % | 20.9 % | 31.6 % | 31.6 % | 196 |
| | 非選択 | 8.1 % | 10.8 % | 26.3 % | 31.9 % | 23.0 % | 902 |
| 子どもに関係した活動 | 選択 | 5.7 % | 8.0 % | 19.6 % | 40.7 % | 25.4 % | 209 |
| | 非選択 | 7.8 % | 11.5 % | 26.7 % | 29.8 % | 24.3 % | 889 |
| スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動 | 選択 | 4.5 % | 9.6 % | 17.5 % | 39.6 % | 28.8 % | 177 |
| | 非選択 | 7.9 % | 11.2 % | 26.8 % | 30.4 % | 23.7 % | 921 |
| まちづくり・生活に関係した活動 | 選択 | 6.2 % | 8.9 % | 22.0 % | 32.8 % | 30.1 % | 259 |
| | 非選択 | 7.8 % | 11.6 % | 26.3 % | 31.6 % | 22.8 % | 839 |
| やったことがない | 選択 | 10.8 % | 12.3 % | 29.2 % | 27.5 % | 20.2 % | 342 |
| | 非選択 | 5.8 % | 10.3 % | 23.5 % | 33.9 % | 26.5 % | 756 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 福祉に関係した活動 | 選択 | 6.1 % | 15.3 % | 16.8 % | 40.3 % | 21.4 % | 196 |
| | 非選択 | 13.0 % | 15.7 % | 23.3 % | 31.6 % | 16.4 % | 902 |
| スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動 | 選択 | 7.9 % | 14.7 % | 24.9 % | 39.6 % | 13.0 % | 177 |
| | 非選択 | 12.5 % | 15.9 % | 21.6 % | 31.9 % | 18.1 % | 921 |
| やったことがない | 選択 | 17.0 % | 15.8 % | 23.4 % | 26.9 % | 17.0 % | 342 |
| | 非選択 | 9.4 % | 15.6 % | 21.6 % | 36.0 % | 17.5 % | 756 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 福祉に関係した活動 | 選択 | 4.1 % | 8.7 % | 17.4 % | 31.7 % | 38.3 % | 196 |
| | 非選択 | 8.2 % | 7.9 % | 18.2 % | 39.1 % | 26.6 % | 902 |
| やったことがない | 選択 | 9.7 % | 9.7 % | 19.6 % | 36.3 % | 24.9 % | 342 |
| | 非選択 | 6.5 % | 7.3 % | 17.3 % | 30.5 % | 30.4 % | 756 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動 | 選択 | 4.5 % | 11.9 % | 37.9 % | 27.1 % | 18.6 % | 177 |
| | 非選択 | 10.5 % | 14.2 % | 30.5 % | 25.6 % | 19.1 % | 921 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

大学生に対する調査では、大学に入学する以前にすでにある程度、地元に対する意識が決定されており、大学における教育的な働きかけは、効果は持つものの限定的である可能性が示唆されていた。今回の調査からは、高校に入学する前に、やはりある程度傾向が決まっている可能性がうかがえる。高校入学以前に決定される部分の割合が大きければ、高校が努力をすることの効果は限定的にならざるを得ない。高校入学以前の状況について、さらなる調査を行う必要があるだろう。

最後に、この結果は、高校の地元定着に対する働きかけの効果を、卒業生の状況の調査から単純に評価することができないことを示していることを強調したい。働きかけが成功しており、地元に対する愛着を高めていたとしても、高校入学以前の愛着が低ければ、卒業生の地元に対する関心は、やはり低く見えてしまうかもしれない。あるいは、高校入学以前の愛着が高い生徒が多く入学してくる高校であれば、高校の働きかけがなくとも、卒業生の地元に対する関心が高く見える可能性もある。出口における一時点の調査で評価するのではな

く、入学時点から卒業までの経年変化を適切に調査したうえで、評価を行う必要があるだろう。

第6章 地元に対する意識と進路選択の関係

花田真一

6.1 はじめに

本章では、地元に対する意識と進路選択の関係についての結果を示す。今回の高校生調査の目的の一つは、高校生がどのような意識で進路選択をしているかについて、分析することである。

地方における人口減少と都市部、特に首都圏への過度な人口流入を防ぐため、近年、生徒や学生の地元定着が政策として推奨されている。大学であれば地元就職率が問われる状況にある。こうした点に関連して、筆者らは弘前大学の学生に対して2019年から4年間の追跡調査を行った。調査の結果、地元を離れる層、地元に残る層、それぞれにいくつかのカテゴリーが存在すること、具体的に言えば積極的な理由による層と必要性が理由となる層が存在することが浮き彫りになった。つまり、地元を離れる学生には主体的に何らかの目的をもって地元を離れる学生と、地元から疎外感を感じていて離れる学生とが混在していた。また、地元に残る学生にも、地元への愛着が高く地元に残る学生と、地元を離れることが困難であったり必要性があったりして残る学生とが混在していた。大学における地域志向科目などの実践は、確かに大学所在地への関心を喚起し、愛着に一定の影響を与えていた。そのため、UターンやJターンという形で将来的に地元に戻ってくる意向は高めているように見えたが、その一方で卒業直後の初職地選択への影響は限定的であるようにもみられた。

その一方で、地方から都市部への人口流出の際に問題点として指摘されている、高度な人材の都市部への集中は、弘前大学における調査では限定的であった。大学における成績を人的資源の指標としてみた場合、成績下位層が公務員になる割合が低いことを除けば、成績と職業との間に強い関係は見られなかった。また、公務員は地元もしくはその近くの地域を選択する割合が高いこともあり、地元就職と首都圏就職の学生の間で成績の大きな差も見られなかった。このことから、高度な人材の流出は、弘前大学では起きていないように見える。

しかし、この調査は弘前大学の学生を対象としたものであり、必ずしも十分ではないと筆者らは考えた。確かに、弘前大学を進学先として選択した学生については高度な人材の流出は起きていない。しかし、そもそも大学進学時点で、高度な人材となりうる層が都市部に流入しているのであれば、地域全体としてみた場合はやはり高度な人材の流出の問題が起きているということになる。加えて、各大学は地域志向教育を充実させているが、ここでいう地域とは通常はその大学の所在地域を指す。弘前大学における青森を地域とした地域志向科目が他の地域から進学した学生に対して津軽地域や青森県への志向を高める役割を果たしているのであれば、同様に他大学における地域志向教育は、青森出身の学生に対して、青森県以外の地域への志向を高める役割を果たしている可能性がある。

こうした問題意識に基づき、高校時点における進路選択を把握することが、今回の調査の目的の一つである。そこで、本章では地元に対する意識と進路選択の関係を分析する。まず、地元に対する意識と進路の選択自体の関係を示し、次にその選択に他者が与える影響について論じることとする。

6.2 地元に対する意識と進路選択の関係

本章では、地元に対する意識と進路選択の関係を示す。まず、表 6.1 に地元に対する意識と就職/進学という進路の方向性の関係を示している。

表 6.1: 進学/就職の選択と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 進学 | 7.0 % | 7.7 % | 17.5 % | 38.2 % | 29.5 % | 840 |
| 就職 | 9.0 % | 5.8 % | 23.9 % | 31.6 % | 29.7 % | 155 |
| 決めかねている | 8.7 % | 13.6 % | 13.6 % | 43.7 % | 20.4 % | 103 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | |
| 進学 | 25.7 % | 24.2 % | 23.7 % | 18.0 % | 8.5 % | 840 |
| 就職 | 21.3 % | 16.8 % | 36.1 % | 16.1 % | 9.7 % | 155 |
| 決めかねている | 17.5 % | 20.4 % | 35.9 % | 17.5 % | 8.7 % | 103 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表から、次の傾向が見て取れる。まず、就職を志望している高校生は、「困難」について「あまりあてはまらない」が少ない傾向がみられる。次に、まだ進路を決めていない層は、「愛着」について「あまりあてはまらない」が高く、「あてはまる」が低い傾向を示している。高校を卒業して就職を選ぶ理由はさまざまであると考えられるが、今回の結果からは、地域を離れることができないから地元で就職をする、というケースは相対的に少ないように見える。また、進路をまだはっきり決められていない理由の一つに、地元に対する愛着があまり高くないため、明確な卒業後に居たい場所が見えていないことがあることを示唆しているようにも見える。

以下では、特に進学者について、地元に対する意識と進路選択の関係についてみてみる。就職にせよ進学にせよ、もちろん進路に受け入れてもらう必要がある。つまり、進学であれば大学受験を経て入学試験に合格する必要がある、就職であれば採用試験に合格する必要がある。とはいえ、これらの試験はそれぞれに特徴があり、分けて考える必要があるだろう。

入学試験の場合は、推薦入試等を除けば基本的に問われるのは学力である。学力は比較的客観的に測定しやすく、高校生自身も模試などを通じて把握することができるだろう。また、進学の場合、基本的に収入はアルバイトなどによる限定的なものか奨学金のようなのちに返済する必要があるものに頼ることになり、保護者にとってはしばらく学費の支出が続くことになる。そのため、高校生は模試で測定された自身の学力と各大学の入試の難易度、および進学した場合に必要な授業料や生活費などの学費を勘案したうえで、進路指導の先生とも相談しながら希望大学を選ぶ必要がある。

一方、採用試験の場合、もちろん公務員のように一定の学力が問われる場合もあるが、よりその仕事に必要なとされるスキルや社会人として求められるコミュニケーション能力などが重視される場合もある。また、就職試験の場合、もちろん高校生自身の希望を踏まえたうえでではあるが、大学進学と比べてもより、その高校がもつネットワークや進路指導の先生の尽力が必要になる場合があるだろう。

こうした点から、進学と就職は分けて考える必要がある。そこで、以下ではまず、進学について状況を見る。そのうえで、就職についての状況を示すこととする。

6.2.1 進学希望者の地元に対する意識と進路選択の関係

まず、進学先の所在地と地元に対する意識の関係を見てみよう。表 6.2 には、進学先の所在地と地元に対する意識の関係について示されている。なお、希望者が 1 桁にとどまった山形県 (5 名)、福島県 (6 名)、中国・四国 (3 名)、九州・沖縄 (1 名) と希望者がいなかった外国については表から除いている。

表から、まず青森県を希望している高校生については、「将来」について「あてはまらない」が少なく、「困難」について「あてはまらない」が少なく「ややあてはまる」が多く、「必要」について「あまりあてはまらない」が少ない傾向が示された。また、関東甲信については、「愛着」で「あまりあてはまらない」が多く、「困難」で「あてはまらない」が多く、「必要」で「あまりあてはまらない」が多くなっている。該当者が少ないため慎重に評価する必要があるが、東海・北陸や近畿についても「愛着」については「あてはまらない」が多く、「必要」についても特に近畿で「あてはまらない」が多くなっている。関東甲信よりも遠い地域を進学先に希望する高校生について、「困難」や「必要性」が低いのは自然であるが、「愛着」についても低くなっていることから、遠方への進学を希望する高校生の一定数が地元への愛着が低いことが要因となっている可能性が示されている。一方で、青森県を希望している場合については、「将来」が高いことから地域への関心が高い層が存在する一方で、地域を離れることが難しい事情により、青森県を進学先として選ばざるを得ない層が一定数存在することも示されている。なお、この結果は弘前大学の大学生について行った調査の結果とも近いものになっている。

次に、表 6.3 に希望進学先の種類と地元に対する意識の関係について示す。一般的に、国立大学は学費が安い一方でその地域の中では比較的入学試験の難易度が高い傾向にある。また、私立大学は数が多く自分の学力に見合った大学を見つけやすい一方で、学費は国立大学や公立大学に比べると高い傾向にある。公立大学については比較的学費が安い場合が多く、また、入試や学費の面で地元出身の学生に援助をする場合もある。表から、国立大学希望者については「将来」について「ややあてはまる」が多く、「愛着」については「あてはまらない」が少ない傾向が示されている。また、まだ決めていない高校生は「愛着」について「あてはまる」が少ない傾向が示されている。もちろん、この質問は高校 2 年生の冬に行ったものであり、今後高校生自身の学力が変動し、希望も変わると考えられる。特に国立大学の場合、最終的な受験校の決定は共通テストの成績を待って決めることも多いだろう。とはいえ、地域に対する愛着を持つ層が国立大学を選ぶ傾向にある一方で、地域に対する愛着が低い層はより自由に進路を選ぶ傾向にある（そのため、まだ決められていない）ように思われる。

表 6.4 には、希望学部と地元に対する意識の関係が示されている。「必要」以外の項目については、希望学部による有意な差は見られなかった。「必要」についてみると、教育学部と保健学部で「あてはまる」が多くなっている一方、工学部については「あまりあてはまらない」が多く、「あてはまる」が少なくなっている。学ぶ内容の地域差が比較的小さいと思われる工学部については地域にいる必要があるかどうかをあまり考慮せずに希望されているように見える。一方で、地域に残るための職業として、教員や看護師・保健師などがイメージされているようにも思われる。

表 6.5 は、第一志望の大学を選ぶ基準として選択された項目と、地元に対する意識の関係を示している。「愛着」や「必要」については有意な差がみられる項目はなかった。まず、「行きたい学部・学科があるから」、を選ばなかった高校生は、「一員」について「あまりあてはまらない」が多く、「あてはまる」が少ない傾向が見て取れる。また、「家族・親戚の勧めがあるから」を選んだ高校生は、「困難」について「あてはまる」が多くなっている。「経済的な理由で」を選んだ高校生は、「将来」について「あてはまる」が多く、「困難」についても「あまりあてはまらない」が少なく「ややあてはまる」「あてはまる」が多い傾向を示している。大学の選択基準に行きたい学部というある種の積極的な理由を選んでいない高校生は、地域の一員であると感じていない傾向が示されており、これは進学先の所在地の方を優先している可能性を示唆している。つまり、まず進学先の大学や地域を選んでおり、学部はそれに付随して選択していることを示唆しているのではないかと思われる。

表 6.2: 進学先の所在地と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の将来が気になる | | | | | | |
| 北海道 | 15.1 % | 17.0 % | 15.1 % | 41.5 % | 11.3 % | 53 |
| 青森県 | 7.7 % | 13.7 % | 22.3 % | 37.5 % | 18.9 % | 403 |
| 岩手県 | 13.8 % | 17.2 % | 20.7 % | 31.0 % | 17.2 % | 29 |
| 秋田県 | 0.0 % | 18.2 % | 0.0 % | 27.3 % | 54.6 % | 11 |
| 宮城県 | 15.7 % | 13.4 % | 20.2 % | 31.3 % | 19.4 % | 134 |
| 関東甲信 | 11.6 % | 20.7 % | 24.5 % | 31.6 % | 11.6 % | 155 |
| 東海・北陸 | 11.8 % | 17.7 % | 17.6 % | 29.4 % | 23.5 % | 17 |
| 近畿 | 34.8 % | 13.0 % | 13.0 % | 21.7 % | 17.4 % | 23 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 北海道 | 9.4 % | 1.9 % | 13.2 % | 43.4 % | 32.1 % | 53 |
| 青森県 | 5.2 % | 5.7 % | 17.1 % | 40.0 % | 32.0 % | 403 |
| 岩手県 | 0.0 % | 13.8 % | 27.6 % | 20.7 % | 37.9 % | 29 |
| 秋田県 | 9.1 % | 9.1 % | 0.0 % | 27.3 % | 54.6 % | 11 |
| 宮城県 | 5.2 % | 10.5 % | 15.7 % | 43.3 % | 25.4 % | 134 |
| 関東甲信 | 9.7 % | 12.3 % | 20.0 % | 35.5 % | 22.6 % | 155 |
| 東海・北陸 | 17.7 % | 0.0 % | 17.7 % | 17.7 % | 47.1 % | 17 |
| 近畿 | 26.1 % | 4.3 % | 21.7 % | 30.4 % | 17.4 % | 23 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | |
| 北海道 | 22.6 % | 39.6 % | 20.8 % | 15.1 % | 1.9 % | 53 |
| 青森県 | 15.9 % | 18.9 % | 28.5 % | 24.3 % | 12.4 % | 403 |
| 岩手県 | 37.9 % | 13.8 % | 31.0 % | 13.8 % | 3.5 % | 29 |
| 秋田県 | 45.5 % | 18.2 % | 0.0 % | 9.1 % | 27.3 % | 11 |
| 宮城県 | 29.1 % | 30.6 % | 21.6 % | 14.2 % | 4.5 % | 134 |
| 関東甲信 | 42.6 % | 26.5 % | 18.7 % | 8.4 % | 3.9 % | 155 |
| 東海・北陸 | 11.8 % | 47.1 % | 17.7 % | 17.7 % | 5.9 % | 17 |
| 近畿 | 43.5 % | 30.4 % | 4.4 % | 13.0 % | 8.7 % | 23 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 北海道 | 11.3 % | 18.9 % | 39.6 % | 18.9 % | 11.3 % | 53 |
| 青森県 | 7.0 % | 9.9 % | 29.5 % | 29.0 % | 24.6 % | 403 |
| 岩手県 | 6.9 % | 13.8 % | 31.0 % | 24.1 % | 24.1 % | 29 |
| 秋田県 | 18.2 % | 18.2 % | 18.2 % | 18.2 % | 27.3 % | 11 |
| 宮城県 | 13.4 % | 18.7 % | 26.1 % | 26.9 % | 14.9 % | 134 |
| 関東甲信 | 11.6 % | 23.2 % | 31.6 % | 22.6 % | 11.0 % | 155 |
| 東海・北陸 | 11.8 % | 11.8 % | 35.3 % | 11.8 % | 29.4 % | 17 |
| 近畿 | 26.1 % | 8.7 % | 21.7 % | 21.7 % | 21.7 % | 23 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 6.3: 希望進学先の種類と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の将来が気になる | | | | | | |
| 国立 | 9.1 % | 14.7 % | 17.9 % | 39.7 % | 18.6 % | 408 |
| 公立 | 14.7 % | 14.7 % | 18.7 % | 37.3 % | 14.7 % | 75 |
| 私立 | 11.2 % | 18.8 % | 23.5 % | 30.0 % | 16.5 % | 170 |
| まだ決めていない | 14.4 % | 15.2 % | 29.6 % | 28.0 % | 12.9 % | 132 |
| どれでもよい | 14.6 % | 18.2 % | 18.2 % | 23.6 % | 25.5 % | 55 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 国立 | 5.2 % | 7.1 % | 14.7 % | 40.9 % | 32.1 % | 408 |
| 公立 | 12.0 % | 8.0 % | 13.3 % | 34.7 % | 32.0 % | 75 |
| 私立 | 8.8 % | 5.9 % | 20.6 % | 35.9 % | 28.8 % | 170 |
| まだ決めていない | 6.8 % | 11.4 % | 25.8 % | 36.4 % | 19.7 % | 132 |
| どれでもよい | 9.1 % | 9.1 % | 14.6 % | 34.6 % | 32.7 % | 55 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 6.4: 希望学部と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 人文学部 | 12.2 % | 11.0 % | 35.4 % | 20.7 % | 20.7 % | 82 |
| 社会科学部 | 10.8 % | 18.3 % | 22.5 % | 28.3 % | 20.0 % | 120 |
| 教育学部 | 6.9 % | 12.6 % | 20.7 % | 26.4 % | 33.3 % | 87 |
| 理学部 | 9.6 % | 13.5 % | 30.8 % | 28.9 % | 17.3 % | 52 |
| 工学部 | 10.2 % | 32.7 % | 32.7 % | 16.3 % | 8.2 % | 49 |
| 農学部 | 8.7 % | 17.4 % | 32.6 % | 30.4 % | 10.9 % | 46 |
| 医学部 | 7.0 % | 9.9 % | 35.2 % | 26.8 % | 21.1 % | 71 |
| 保健学部 | 7.3 % | 13.4 % | 23.2 % | 25.6 % | 30.5 % | 82 |
| 決めかねている | 15.1 % | 7.0 % | 31.4 % | 32.6 % | 14.0 % | 86 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

る。また、他の地域に進学する場合、学費に加えて下宿代や食費などの追加の支出がある。そのため、経済的に負担が難しい場合、地域を離れることが困難だという回答になり、進学先も経済面を考慮して選択しているのではないか。また、家族や親戚が勧めるということも、やはり自由に進学先を選ばせることが難しいという、その世帯の状況を反映していると考えられ、高校生自身もそれを感じ取っていることが示唆されている。

6.2.2 就職希望者の地元に対する意識と進路選択

次に、就職希望者について、地元に対する意識と進路選択の関係を見てみよう。

表 6.6 には、就職希望地と地元に対する意識の関係が示されている。なお、選択者が 10 名以上いた地域は、

表 6.5: 第一志望の選択基準と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|---------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 行きたい学部・学科がある | 選択 | 6.5 % | 9.4 % | 25.6 % | 32.0 % | 26.5 % | 657 |
| | 非選択 | 8.2 % | 15.9 % | 25.7 % | 33.9 % | 16.4 % | 183 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 経済的な理由で | 選択 | 7.2 % | 18.9 % | 10.8 % | 37.8 % | 25.2 % | 111 |
| | 非選択 | 11.8 % | 15.4 % | 22.5 % | 34.2 % | 16.2 % | 729 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | | |
| 家族・親戚の勧めがあるから | 選択 | 25.7 % | 19.8 % | 16.8 % | 23.8 % | 13.9 % | 101 |
| | 非選択 | 25.7 % | 24.8 % | 24.6 % | 17.2 % | 7.7 % | 739 |
| 経済的な理由で | 選択 | 19.8 % | 17.1 % | 20.7 % | 29.7 % | 12.6 % | 111 |
| | 非選択 | 26.6 % | 25.2 % | 24.1 % | 16.2 % | 7.8 % | 729 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 6.6: 就職希望地と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|-------------|--|-----------------|--------|--------|--------|--------|----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域を離れることが困難 | | | | | | | |
| 青森県 | | 15.5 % | 11.9 % | 39.3 % | 19.1 % | 14.3 % | 84 |
| 関東甲信 | | 45.5 % | 22.7 % | 22.7 % | 4.6 % | 4.6 % | 22 |
| 特に決めていない | | 19.4 % | 25.8 % | 32.3 % | 19.4 % | 3.2 % | 31 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 青森県 | | 10.7 % | 6.0 % | 31.0 % | 31.0 % | 21.4 % | 84 |
| 関東甲信 | | 9.1 % | 22.7 % | 45.5 % | 18.2 % | 4.6 % | 22 |
| 特に決めていない | | 9.7 % | 9.7 % | 51.6 % | 12.9 % | 16.1 % | 31 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

青森県・関東甲信・特に決めていない、の3つのみであった。特徴としては、関東甲信について、「困難」については「あてはまらない」が多く、「必要」についても「あまりあてはまらない」が多いことが示されている。高校を卒業して県内に就職するケースは、やはり地域を離れることについての制約が少ない層であることがうかがえる。

次に、表 6.7 には希望する業種と地元に対する意識の関係を示している。業種としては、電気・ガス・水道については「一員」について「あてはまる」が多かった。医療・福祉については「一員」で「ややあてはまる」が多く、「将来」については「あまりあてはまらない」が多く、「困難」については「あてはまる」が多かった。卸・小売業については「困難」について「あてはまらない」がおらず、「あてはまる」が多かった。農林漁業については「必要」について、「あてはまる」が多くなっている。青森県の産業的な背景を踏まえれば、一次産業にあたる農林漁業で「必要」が高い傾向なのは自然であろう。また、医療・福祉については、前節でみた進学希望者の希望学部とも似た傾向を示しており、地域に残る手段として、医療・福祉は受け皿となる産業であると高校生には考えられているようである。地域の一員であると考えている場合、地域を支えるインフラ事業へ

表 6.7: 希望する業種と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|---------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 電気・ガス・水道業 | 選択 | 6.1 % | 3.0 % | 27.3 % | 18.2 % | 45.5 % | 33 |
| | 非選択 | 9.8 % | 8.2 % | 23.8 % | 34.4 % | 23.8 % | 122 |
| 飲食業・宿泊業 | 選択 | 17.2 % | 3.5 % | 13.8 % | 48.3 % | 17.2 % | 29 |
| | 非選択 | 7.1 % | 7.9 % | 27.0 % | 27.0 % | 31.0 % | 126 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 医療・福祉 | 選択 | 16.7 % | 27.8 % | 5.6 % | 27.8 % | 22.2 % | 18 |
| | 非選択 | 15.3 % | 9.5 % | 27.7 % | 28.5 % | 19.0 % | 137 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | | |
| 卸売・小売業 | 選択 | 0.0 % | 7.1 % | 57.1 % | 14.3 % | 21.4 % | 14 |
| | 非選択 | 23.4 % | 17.7 % | 34.0 % | 16.3 % | 8.5 % | 141 |
| 医療・福祉 | 選択 | 22.2 % | 16.7 % | 11.1 % | 27.8 % | 22.2 % | 18 |
| | 非選択 | 21.2 % | 16.8 % | 39.4 % | 14.6 % | 8.0 % | 137 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 農林漁業 | 選択 | 0.0 % | 7.7 % | 53.9 % | 0.0 % | 38.5 % | 13 |
| | 非選択 | 11.3 % | 9.2 % | 36.6 % | 27.5 % | 15.5 % | 142 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

の希望が増えているようにも見える。

6.3 進路選択に他者が与える影響

ここでは、進路選択に他者が与える影響について考察する。進路選択はもちろん、高校生自身の希望が優先されるべきではあるが、特に進学の場合は収入が増えるわけではなく、むしろしばらく支出が続くため、家庭環境によって進学先が限定される可能性がある。また、高校生自身が希望したとしても、入学試験に合格する必要があり、進路指導の先生のように経験と客観的な視点を持つ第三者からの指摘の影響を受ける可能性もある。こうした点を鑑みて、高校生本人の希望と他者のかかわりについて考察する。

表 6.8 には、父親が勧めている進学先の所在地と、地域に対する意識の関係が示されている。なお、回答者が 10 名以下であった秋田県 (3 名)、山形県 (2 名)、福島県 (2 名)、東海・北陸 (6 名)、近畿 (4 名)、外国 (9 名) と、回答者がいなかった中国・四国と九州・沖縄は表から除いている。また、「一員」「将来」「愛着」については地域間に有意な分布の差が見られなかった。表から、青森県については「困難」の「あてはまらない」が低い傾向が読み取れる。また、岩手県については「必要」に「あてはまらない」が多くなっている。宮城県については「困難」について、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が多い一方で、「あてはまる」は 1 人もいなかった。関東甲信については「困難」には「あてはまらない」が多く、「必要」については「あまりあてはまらない」が多くなっている。父親が青森県を勧める場合、高校生自身も地域を自由に離れられるとは考えていない傾向が示されている。また、父親が県外を勧める場合、高校生自身も地域を離れることが困難だとはとらえていないことがうかがえる。もちろん、因果関係について直ちに断定することはできないが、父親の勧めは地域を離れることの容易さと関連しているように思われる。

表 6.8: 父親が勧めている進学先の所在地と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | |
| 北海道 | 25.0 % | 43.8 % | 18.8 % | 12.5 % | 0.0 % | 16 |
| 青森県 | 19.6 % | 22.0 % | 27.4 % | 20.8 % | 10.3 % | 486 |
| 岩手県 | 57.1 % | 28.6 % | 7.1 % | 7.1 % | 0.0 % | 14 |
| 宮城県 | 40.0 % | 38.0 % | 12.0 % | 10.0 % | 0.0 % | 50 |
| 関東甲信 | 45.0 % | 28.3 % | 18.3 % | 6.7 % | 1.7 % | 60 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 北海道 | 12.5 % | 18.8 % | 37.5 % | 12.5 % | 18.8 % | 16 |
| 青森県 | 8.6 % | 12.8 % | 29.6 % | 28.2 % | 20.8 % | 486 |
| 岩手県 | 7.1 % | 42.9 % | 14.3 % | 21.4 % | 14.3 % | 14 |
| 宮城県 | 16.0 % | 18.0 % | 32.0 % | 18.0 % | 16.0 % | 50 |
| 関東甲信 | 3.3 % | 26.7 % | 28.3 % | 26.7 % | 15.0 % | 60 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 6.9: 母親が勧めている進学先の所在地と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|------------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | |
| 北海道 | 20.0 % | 4.0 % | 20.0 % | 24.0 % | 32.0 % | 25 |
| 青森県 | 5.6 % | 6.8 % | 15.6 % | 40.0 % | 32.1 % | 577 |
| 岩手県 | 0.0 % | 21.4 % | 35.7 % | 14.3 % | 28.6 % | 14 |
| 宮城県 | 7.1 % | 10.0 % | 18.6 % | 40.0 % | 24.3 % | 70 |
| 関東甲信 | 9.1 % | 13.0 % | 15.6 % | 40.3 % | 22.1 % | 77 |
| 地域を離れるのが困難 | | | | | | |
| 北海道 | 28.0 % | 40.0 % | 20.0 % | 12.0 % | 0.0 % | 25 |
| 青森県 | 19.1 % | 23.1 % | 26.5 % | 20.6 % | 10.8 % | 577 |
| 岩手県 | 50.0 % | 35.7 % | 7.1 % | 7.1 % | 0.0 % | 14 |
| 宮城県 | 31.4 % | 30.0 % | 15.7 % | 18.6 % | 4.3 % | 70 |
| 関東甲信 | 52.0 % | 24.7 % | 16.9 % | 5.2 % | 1.3 % | 77 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | |
| 北海道 | 24.0 % | 8.0 % | 44.0 % | 16.0 % | 8.0 % | 25 |
| 青森県 | 7.7 % | 14.0 % | 28.6 % | 27.6 % | 22.2 % | 577 |
| 岩手県 | 7.1 % | 28.6 % | 28.6 % | 28.6 % | 7.1 % | 14 |
| 宮城県 | 15.7 % | 14.3 % | 37.1 % | 21.4 % | 11.4 % | 70 |
| 関東甲信 | 13.0 % | 19.5 % | 32.5 % | 24.7 % | 10.4 % | 77 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

次に、表 6.9 には母親が勧めている進学先の所在地と地元意識の関係が示されている。やはり回答者が 10 名未満であった秋田県 (3 名)、山形県 (4 名)、福島県 (5 名)、東海・北陸 (8 名)、近畿 (7 名)、外国 (6 名) および回答者がいなかった中国・四国と九州・沖縄は表から除いている。また、「一員」と「将来」は地域による有意な差が見られなかった。表から、北海道については「愛着」と「必要」について「あてはまらない」が多い傾向にある。また、岩手県については「愛着」に「あまりあてはまらない」が多い。宮城県については「必要」について「あてはまらない」が多く「あてはまる」が少なくなっている。関東甲信については「困難」について「あてはまらない」が多く「ややあてはまる」が少なくなっている。全体的には、やはり地域を離れることが困難かどうかで母親の勧めが変わっている、あるいは変わっているように高校生自身が感じていることが示されている。

表 6.10: 進路指導の先生が勧めている進学先の所在地と地元に対する意識の関係

| | あてはまらない ⇄ あてはまる | | | | | 総数 |
|-------|-----------------|--------|--------|--------|--------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| | 地域を離れることが困難 | | | | | |
| 北海道 | 25.0 % | 31.3 % | 25.0 % | 18.8 % | 0.0 % | 32 |
| 青森県 | 19.3 % | 21.6 % | 27.7 % | 21.0 % | 10.4 % | 538 |
| 岩手県 | 33.3 % | 38.9 % | 16.7 % | 11.1 % | 0.0 % | 18 |
| 宮城県 | 34.4 % | 32.3 % | 13.5 % | 13.5 % | 6.3 % | 96 |
| 関東甲信 | 43.0 % | 23.4 % | 18.7 % | 12.2 % | 2.8 % | 107 |
| 東海・北陸 | 18.2 % | 27.3 % | 45.5 % | 9.1 % | 0.0 % | 11 |
| 近畿 | 41.7 % | 50.0 % | 0.0 % | 0.0 % | 8.3 % | 12 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

最後に、表 6.10 に進路指導の先生などが勧めている進学先の所在地と、地元に対する意識の関係を示している。なお、回答者が 10 名未満であった秋田県 (5 名)、山形県 (8 名)、福島県 (2 名)、中国・四国 (2 名)、九州・沖縄 (2 名)、外国 (7 名) は表から除いている。まず、両親の場合と比べると、進路指導の先生のほうが少し勧める地域の幅が広いことがわかる。特に、東海・北陸や近畿が勧められるケースも 10 名以上おり、勧められたと回答した高校生がいないという地域もなかった。進路指導の先生のほうが、両親に比べれば進学先についての情報を多く持っていることが考えられ、そのために幅が広がっていると考えられる。「一員」「将来」「愛着」「必要」については有意な差は見られず、「困難」についてのみ差がみられた。傾向としては、青森県については「あてはまらない」が少なくなっている一方、宮城県・関東甲信については「あてはまらない」が多くなっている。このことは、進路指導の際に、ただ学力だけを見ているのではなく、その生徒の家庭の状況なども勘案したうえで、視野を広げるような進路指導が行われていることを示唆している。

表 6.11: 勧める進学先の一致

| | 該当数 | 割合 | 主な地域 |
|---------|-----|--------|-----------------------------|
| 3 者とも一致 | 721 | 65.7 % | 青森県 (51 %) |
| 父親だけ異なる | 150 | 13.7 % | 父親が無回答、母親・先生は青森県 (65 %) |
| 先生だけ異なる | 134 | 12.2 % | 両親が青森、先生が宮城県 (22 %) |
| 全員異なる | 93 | 8.5 % | 父親が無回答、母親が青森県、先生が関東甲信 (9 %) |

最後に、父親・母親・進路指導の先生それぞれの勧める進学先がどの程度一致しているかについて表 6.11 に

示す。まず、最も多かったのは3者とも一致しているケースで、その中でも青森県で一致しているケースが最も多かった。次に多かったのが父親だけ異なるケースだが、この場合は父親について無回答というケースであり、母親と先生は青森県で一致していた。先生だけが異なるというケースがそれに続き、この場合は両親が青森県を勧めており、先生だけが宮城県を勧めているケースが最も多い。また、両親が青森県を勧めており、先生だけが関東甲信を勧めているケースも約16%あり、この2つを合わせると約37%になる。ちなみに、逆のケース（両親は宮城県や関東甲信を勧めており、先生が青森県を勧めているケース）は約10%であった。全員が異なるケースも約9%あり、この場合は父親が無回答、母親が青森県、先生が関東甲信というケースが最も多くなっている。なお、母親のみが異なるというケースはなかった。

このことは、まず、進路指導が両親の希望や家庭の状況、本人の希望などを勘案し、バランスを取りながら進められていることを示していると考えられる。全体の約2/3は3者の勧めが一致していることからそのことがうかがえる。なお、この場合の約75%は高校生自身も青森県を進学先に希望しており、生徒も含めた4者の希望が一致しているケースとなる。一方で、両親と進路指導の先生の勧めがずれるケースでは、両親が地元進学を望んでいるが、先生は宮城県や関東甲信を勧めているケースが最も多い。宮城県には東北大学があり、関東甲信には様々なレベルの大学があることから、おそらく進路指導の先生は生徒の学力を勘案したうえで、より幅の広い進路を提示しているのではないかと思われる。このとき、先生が宮城県を勧めているケースでは生徒自身の希望は約59%が宮城県、約24%が青森県となっている。また、先生が関東甲信を勧めているケースでは生徒自身の希望は約62%が関東甲信、約24%が青森県となっている。つまり、いずれの場合も先生と生徒の希望の合致率のほうが高く、生徒と先生の希望が異なるケースは約1/4にとどまっている。全体で見ても、約75%で生徒の希望と先生の勧めは合致している。もちろん、生徒が先生の勧めの方に影響されている可能性と、先生が生徒の希望を斟酌している可能性の両方が考えられ、今回の結果だけでは因果関係は不明である。いずれにせよ、進路指導の際には指導と生徒の希望のすり合わせが行われていることは示されているだろう。

表6.12には、高校生自身が就職先を選ぶ際に重要だと思う要素と地元に対する意識の関係について示している。「希望の勤務地で働ける」を選んだ場合、「一員」の「あてはまる」が多く「あまりあてはまらない」が少なくなっている。また、「愛着」の「あてはまる」が多くなっている。「困難」については「ややあてはまる」が多くなっている。「必要」については「あてはまる」「ややあてはまる」が多くなっている。「労働環境が良い」を選んだ場合、「愛着」の「ややあてはまる」が多い。一方で、「困難」については「あまりあてはまらない」が多く、「あてはまる」が少なくなっている。「休日・休暇が多い」を選んだ場合、「一員」「必要性」の「あてはまる」が少なく「あてはまらない」が多くなっている。「愛着」についても「あてはまる」が少なくなっている。「社会への貢献度が高い」を選んだ場合、「一員」「将来」「愛着」「必要性」の「あてはまる」が多く「あてはまらない」が少なくなっている。「給料が高い」を選んだ場合、「将来」の「あてはまる」が少なくなっている。「大企業や有名な会社」を選んだ場合、「困難」の「あてはまらない」が多く、「ややあてはまる」が少なくなっている。

全体の傾向として、希望の勤務地であるかどうかについては、地域に対する愛着による場合と、地域を離れることができない場合の両方が混ざっているように思われる。また、地元に対して親近感を感じている場合、社会貢献などの地域へ還元される要素が強くなっている傾向もみられる。一方で、労働環境や休日・休暇などについては、地域への愛着や必要性とのトレードオフになっているように見える。つまり、地域への愛着や地域で働く必要性があるために、こうした労働条件をある程度犠牲にしても良いと考えている傾向が見て取れる。また、青森県の状況から、大企業などについては特に地域を離れることが困難である場合には選ばれていないように見える。

次に、保護者が就職先を選ぶ際に重要だと思っている要素と地元に対する意識の関係について表6.13に示している。「希望の勤務地で働ける」については「困難」について「あまりあてはまらない」が少なく「ややあ

表 6.12: 就職先の選択基準と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | |
|---------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 総数 |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 希望の勤務地で働ける | 選択 | 6.2 % | 6.6 % | 25.2 % | 31.4 % | 30.6 % | 258 |
| | 非選択 | 7.7 % | 12.3 % | 25.4 % | 32.0 % | 22.6 % | 840 |
| 休日・休暇が多い | 選択 | 10.0 % | 11.5 % | 28.5 % | 30.6 % | 19.5 % | 471 |
| | 非選択 | 5.4 % | 10.5 % | 23.0 % | 32.9 % | 28.2 % | 627 |
| 社会への貢献度が高い | 選択 | 2.8 % | 8.3 % | 19.4 % | 37.0 % | 32.4 % | 108 |
| | 非選択 | 7.9 % | 11.2 % | 26.0 % | 31.3 % | 23.6 % | 990 |
| 給料が高い | 選択 | 7.4 % | 11.5 % | 28.5 % | 29.9 % | 22.7 % | 713 |
| | 非選択 | 7.3 % | 9.9 % | 19.5 % | 35.6 % | 27.8 % | 385 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 社会への貢献度が高い | 選択 | 4.6 % | 4.6 % | 20.4 % | 41.7 % | 28.7 % | 108 |
| | 非選択 | 12.5 % | 16.9 % | 22.3 % | 32.2 % | 16.1 % | 990 |
| 給料が高い | 選択 | 12.6 % | 16.1 % | 24.5 % | 32.4 % | 14.3 % | 713 |
| | 非選択 | 10.1 % | 14.8 % | 17.7 % | 34.6 % | 22.9 % | 385 |
| 親や先生の勧め | 選択 | 30.0 % | 10.0 % | 10.0 % | 10.0 % | 40.0 % | 10 |
| | 非選択 | 11.6 % | 15.7 % | 22.2 % | 33.4 % | 17.1 % | 1088 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 希望の勤務地で働ける | 選択 | 7.0 % | 5.8 % | 19.8 % | 33.3 % | 34.1 % | 258 |
| | 非選択 | 7.6 % | 8.7 % | 17.5 % | 39.2 % | 27.0 % | 840 |
| 労働環境がいい | 選択 | 6.9 % | 8.6 % | 15.6 % | 40.7 % | 28.2 % | 678 |
| | 非選択 | 8.3 % | 7.1 % | 21.9 % | 33.1 % | 29.5 % | 420 |
| 休日・休暇が多い | 選択 | 9.1 % | 9.1 % | 21.4 % | 36.7 % | 23.6 % | 471 |
| | 非選択 | 6.2 % | 7.2 % | 15.5 % | 38.6 % | 32.5 % | 627 |
| 社会への貢献度が高い | 選択 | 2.8 % | 4.6 % | 16.7 % | 36.1 % | 39.8 % | 108 |
| | 非選択 | 8.0 % | 8.4 % | 18.2 % | 38.0 % | 27.5 % | 990 |
| 地域を離れるのが困難である | | | | | | | |
| 希望の勤務地で働ける | 選択 | 20.9 % | 19.0 % | 26.7 % | 23.6 % | 9.7 % | 258 |
| | 非選択 | 25.4 % | 23.9 % | 26.6 % | 15.8 % | 8.3 % | 840 |
| 労働環境がいい | 選択 | 22.6 % | 26.1 % | 26.3 % | 18.0 % | 7.1 % | 678 |
| | 非選択 | 27.1 % | 17.4 % | 27.1 % | 17.1 % | 11.2 % | 420 |
| 大企業や有名な会社 | 選択 | 35.6 % | 28.9 % | 17.8 % | 6.7 % | 11.1 % | 45 |
| | 非選択 | 23.8 % | 22.5 % | 27.0 % | 18.1 % | 8.6 % | 990 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 希望の勤務地で働ける | 選択 | 8.5 % | 11.2 % | 26.7 % | 30.6 % | 22.9 % | 258 |
| | 非選択 | 9.9 % | 14.6 % | 33.2 % | 24.4 % | 17.9 % | 840 |
| 休日・休暇が多い | 選択 | 11.9 % | 14.9 % | 34.4 % | 20.8 % | 18.1 % | 471 |
| | 非選択 | 7.8 % | 13.1 % | 29.7 % | 29.7 % | 19.8 % | 627 |
| 社会への貢献度が高い | 選択 | 3.7 % | 6.5 % | 32.4 % | 29.6 % | 27.8 % | 108 |
| | 非選択 | 10.2 % | 14.7 % | 31.6 % | 25.5 % | 18.1 % | 990 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

表 6.13: 保護者の就職先選択基準と地元に対する意識の関係

| | | あてはまらない ⇔ あてはまる | | | | | 総数 |
|--------------|-----|-----------------|--------|--------|--------|--------|------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 地域の一員であると感じる | | | | | | | |
| 給料が高い | 選択 | 7.5 % | 11.1 % | 28.1 % | 30.8 % | 22.6 % | 669 |
| | 非選択 | 7.2 % | 10.7 % | 21.0 % | 33.6 % | 27.5 % | 429 |
| 大企業や有名な会社 | 選択 | 14.9 % | 19.4 % | 20.9 % | 28.4 % | 16.4 % | 67 |
| | 非選択 | 6.9 % | 10.4 % | 25.6 % | 32.1 % | 25.0 % | 1031 |
| 地域の将来が気になる | | | | | | | |
| 労働環境がよい | 選択 | 9.7 % | 15.8 % | 21.7 % | 35.5 % | 17.4 % | 702 |
| | 非選択 | 12.5 % | 16.9 % | 22.3 % | 32.2 % | 16.1 % | 990 |
| 大企業や有名な会社 | 選択 | 22.4 % | 13.4 % | 19.4 % | 23.9 % | 20.9 % | 67 |
| | 非選択 | 11.1 % | 15.8 % | 22.3 % | 33.8 % | 17.1 % | 1031 |
| 親や先生の勧め | 選択 | 21.9 % | 9.4 % | 40.6 % | 15.6 % | 12.5 % | 32 |
| | 非選択 | 11.4 % | 15.9 % | 21.6 % | 33.7 % | 17.4 % | 1066 |
| 地域に愛着を感じる | | | | | | | |
| 大企業や有名な会社 | 選択 | 19.4 % | 10.5 % | 13.4 % | 31.3 % | 25.4 % | 67 |
| | 非選択 | 6.7 % | 7.9 % | 18.3 % | 38.2 % | 28.9 % | 1031 |
| 親や先生の勧め | 選択 | 9.4 % | 21.9 % | 15.6 % | 31.3 % | 21.9 % | 32 |
| | 非選択 | 7.4 % | 7.6 % | 18.1 % | 38.0 % | 28.9 % | 1066 |
| 地域を離れることが困難 | | | | | | | |
| 希望の勤務地で働ける | 選択 | 22.8 % | 17.2 % | 28.7 % | 21.3 % | 10.0 % | 338 |
| | 非選択 | 25.0 % | 25.3 % | 25.7 % | 16.1 % | 8.0 % | 760 |
| 仕事の内容が魅力的 | 選択 | 29.1 % | 22.8 % | 25.6 % | 16.8 % | 5.6 % | 285 |
| | 非選択 | 22.6 % | 22.8 % | 26.9 % | 18.0 % | 9.7 % | 813 |
| 労働環境がよい | 選択 | 22.8 % | 26.8 % | 25.5 % | 16.2 % | 8.7 % | 702 |
| | 非選択 | 27.0 % | 15.7 % | 28.5 % | 20.2 % | 8.6 % | 990 |
| 休日・休暇が多い | 選択 | 22.1 % | 21.2 % | 31.0 % | 15.6 % | 10.1 % | 358 |
| | 非選択 | 25.4 % | 23.5 % | 24.5 % | 18.7 % | 8.0 % | 740 |
| 地域にいる必要がある | | | | | | | |
| 大企業や有名な会社 | 選択 | 22.4 % | 16.4 % | 17.9 % | 22.4 % | 20.9 % | 67 |
| | 非選択 | 8.7 % | 13.7 % | 32.6 % | 26.1 % | 18.9 % | 740 |

注) 統計的に有意な差があるもののみ示している。

てはまる」が多い。「仕事内容が魅力的」については「困難」で「あてはまらない」が多く「あてはまる」が少なくなっている。「労働環境がいい」については「将来」について「あてはまらない」が少なく「ややあてはまる」が多い。また、「困難」については「あまりあてはまらない」が多くなっている。「大企業や有名な会社である」については「一員」「将来」「愛着」「必要」について「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が多くなっている。「親や先生の勧め」については「将来」について「あてはまらない」が多く「ややあてはまる」が少なくなっている。また、「愛着」については「あまりあてはまらない」が多くなっている。

保護者の場合についても、高校生本人の場合と大きな傾向の差は見られない。ただし、地域に対する愛着が低い場合、親や先生の勧め、というやや他人任せの回答が増えているようにも見える。

表 6.14: 学生と保護者の選択基準の一致状況

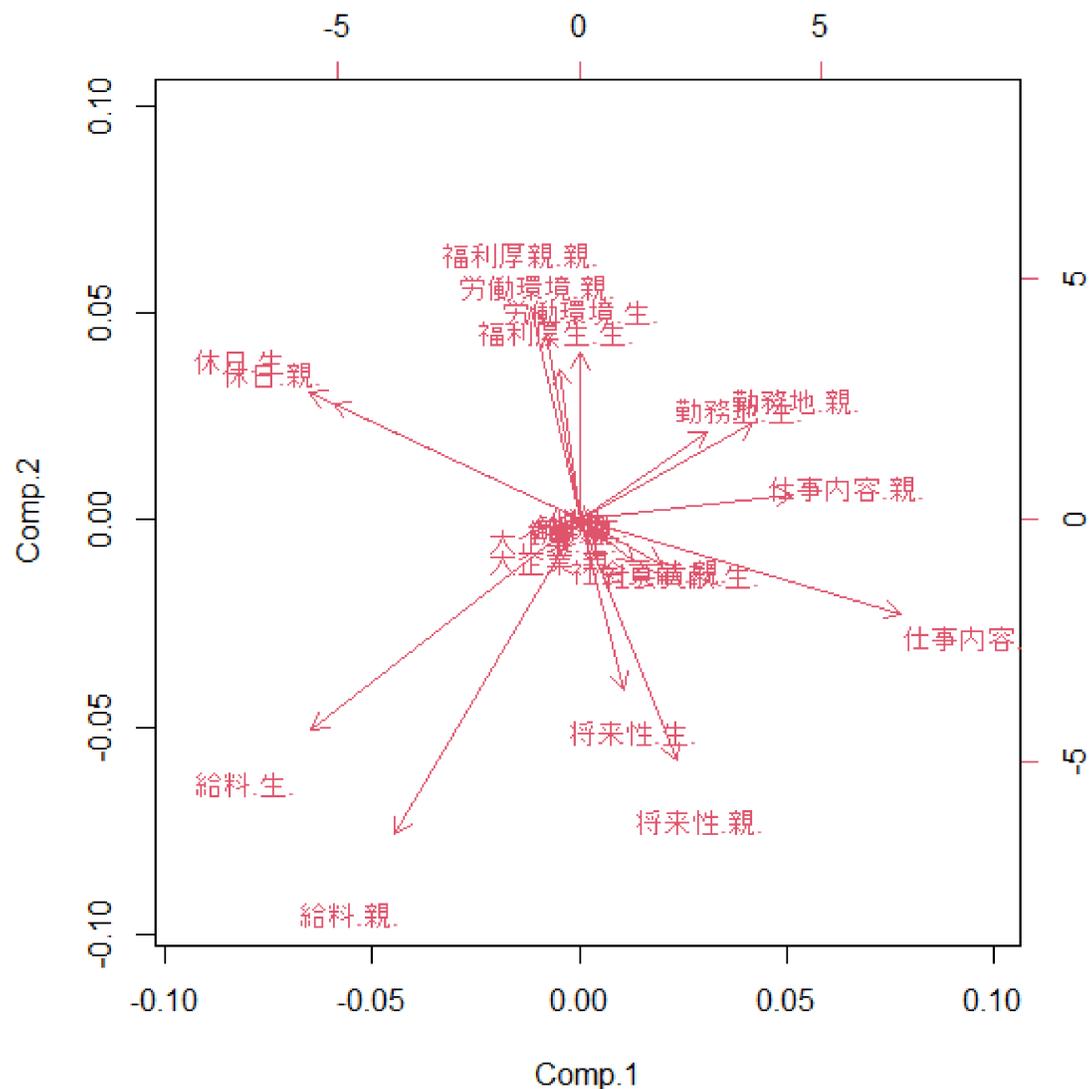
| | 選ばない | 生徒のみ | 保護者のみ | 両方 |
|------------|---------|---------|---------|---------|
| 希望の勤務地 | 58.90 % | 10.30 % | 17.60 % | 13.20 % |
| 仕事内容が魅力的 | 49.70 % | 24.30 % | 8.60 % | 17.40 % |
| 労働環境がいい | 19.30 % | 16.80 % | 18.90 % | 45.00 % |
| 休日・休暇が多い | 46.80 % | 20.60 % | 10.30 % | 22.30 % |
| 福利厚生が整っている | 57.70 % | 11.20 % | 15.50 % | 15.70 % |
| 将来性がある | 55.60 % | 8.70 % | 22.30 % | 13.50 % |
| 社会への貢献度が高い | 85.70 % | 6.70 % | 4.50 % | 3.20 % |
| 給料が高い | 20.80 % | 18.30 % | 14.30 % | 46.60 % |
| 大企業や有名な会社 | 90.90 % | 3.00 % | 5.00 % | 1.10 % |
| 親や先生の勧め | 96.60 % | 0.50 % | 2.50 % | 0.50 % |

ところで、生徒自身と保護者の希望は、どのような関係にあるのだろうか。高校生自身と保護者が希望していることについて、どの程度合致しているかが表 6.14 に示されている。生徒自身も保護者も、「労働環境がいい」「休日・休暇が多い」「給料が高い」といった待遇面について、やはり重視している傾向がみられる。一方で、「希望の勤務地で働ける」「将来性がある」については、比較的保護者の方が重視していると生徒自身は感じているようである。一方で、「仕事内容が魅力的」「給料が高い」といった項目については、生徒自身が重視している傾向が示されている。「社会への貢献度が高い」や「大企業や有名な会社である」については、選ばれている率自体が低くなっている。先ほどの結果から、選ぶかどうかには地元に対する意識が一定の影響を与えていると思われるが、相対的にみれば重視されている項目ではないように見える。

図 6.1 には、各評価項目について主成分分析を行った結果が示されている。方向性としては、生徒による選択と保護者による選択とで傾向に差は見られない。項目間の関係としては、仕事内容と休日、勤務地と給料、福利厚生と将来性、労働環境と将来性が、それぞれ逆方向にあるように見える。これらの矢印が逆方向であるということは、両方が同時に選択されることが少なく、対比的にとらえられているということである。特に、勤務地と給料については、青森県の全国に対する位置も影響して、生徒自身にとっても保護者にとっても、対比的に考えられていることがうかがえる。

最後に、学校における活動の重要な指標である成績と進路の希望の関係についてみてみる。前述のように、今回の調査における成績はあくまでも校内偏差値であるため、異なる高校の回答者の偏差値を直接比べることは難しい。偏差値はあくまで集団内の相対的な位置を表すものであり、絶対的な成績を示すものではない。例えば、どの高校においても校内のちょうど真ん中の生徒は偏差値 50 となるが、進学校と専門校では学力という意味において真ん中の位置が異なる可能性がある。そこで、本章では、成績に関する回答を次のように変換した指標を用いた。まず、高校を、入学偏差値で 4 グループに分けた。弘前市内の高校は、入学偏差値が 70 前

図 6.1: 評価項目の主成分分析



後の高校が1校、60前後の高校が2校、50前後の高校が5校、40前後の高校が3校ある。入学偏差値は高校進学を目指すすべての生徒についての全国的な指標と一致していると考えられる。仮に、成績分布が正規分布に従っているならば、偏差値70は上位約2%、偏差値60は上位約16%、偏差値50はちょうど50%、偏差値40は下位約16%にあたり、その差は小さくない。そこで、高校を4群に分け、第1群の成績上位者から順に1~5、第2群の成績上位者から順に5~9、第3群の成績上位者から順に9~13、第4群の成績上位者から順に13~17、と、上下の1層を重ねさせる形で指標化した。つまり、各階層の境界（上位校の下位層と、下位校の上位層）を重ねさせる形で指標を作成している。

表 6.15: 進学希望先所在地と成績の関係

| | 高い ← 成績 → 低い | | | | | | | | | | | | | |
|----|--------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 15 | 16 | 17 | 全体 |
| 県内 | 17% | 20% | 12% | 52% | 62% | 44% | 55% | 29% | 55% | 47% | 52% | 30% | 29% | 45% |
| 県外 | 83% | 81% | 88% | 48% | 38% | 56% | 45% | 71% | 45% | 53% | 48% | 70% | 71% | 55% |
| 総数 | 29 | 51 | 34 | 124 | 144 | 34 | 11 | 34 | 160 | 30 | 25 | 54 | 28 | 758 |

表 6.15 には、進学希望地が青森県内か県外か、と成績の関係が示されている。なお、第4・5・13・14層については、該当人数が10人以下であったため、表から省略している。全体的な傾向としては、成績と進学先

の間に逆 U 字の関係があるように見える。つまり、成績の上位層と下位層は県外への進学を希望し、中位層が県内への進学を希望しているように見える。県内に進学する場合、受け皿となる大学は限られる。医学部を除くと、文系については偏差値 55 から 45 くらい、理系についても偏差値 55 から 40 の間の大学・学部しか県内には存在していない。さらに言えば、選択できる学部の種類自体が限られてしまう。そのため、弘前大学よりも難関を目指すことができる上位層と、特に文系で県内で最も入学偏差値が低い大学でも難しい層とが、県外に進学している可能性がある。偏差値は相対評価であり、進学を目指す生徒の下位約 20 %は偏差値 45 に届かないことになる。

表 6.16: 進学希望と成績の関係

| | 高い ← 成績 → 低い | | | | | | | | | | | | | |
|----|--------------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 15 | 16 | 17 | 全体 |
| 進学 | 100 % | 100 % | 97 % | 98 % | 95 % | 86 % | 83 % | 81 % | 76 % | 71 % | 61 % | 44 % | 28 % | 80 % |
| 就職 | 0 % | 0 % | 0 % | 0 % | 1 % | 6 % | 8 % | 19 % | 18 % | 27 % | 19 % | 34 % | 28 % | 12 % |
| 未定 | 0 % | 0 % | 3 % | 2 % | 3 % | 8 % | 8 % | 0 % | 6 % | 2 % | 19 % | 22 % | 44 % | 7 % |
| 総数 | 29 | 51 | 34 | 125 | 146 | 36 | 12 | 42 | 195 | 41 | 31 | 82 | 39 | 863 |

表 6.16 には、進学の希望と成績の関係が示されている。回答者の約 80 %が進学希望ということもあり、第 17 層以外では基本的に進学希望が多くなっている。また、成績上位層ほど進学を希望し、低いほど就職が多くなっている。また、成績下位層については未定の割合も高くなる傾向にある。進学をしたいが特に県内に学力的に進学可能な大学がない場合、あるいは高校に進学のモデルとなるような先輩が少ない場合など、理由はいくつか考えられる。

6.4 まとめ

本章では、地元に対する意識と進路選択の関係について分析を行った。個々の結果は各項目に譲るが、全体を通じて以下の傾向が見て取れた。

まず、地元に対する愛着が、進路選択に一定の影響を与えていた。特に、どちらかという地元に対する愛着が低い層が、県外を進路に選ぶ傾向が強いように見える。また、愛着が低い層は、進学ではなく就職を選んでいるようにも見えた。

次に、進路決定については、高校生自身の意向に加えて、両親や進路指導の先生の意見も影響を与えているようである。特に高校における進路指導は、両親と比べても幅広い選択肢を提供しているように見える。ただし、これは学力などに基づいてやみくもに進めるのではなく、地域を離れることが困難であると感じている生徒には地元を勧める傾向も見取れた。つまり、学力と家庭の状況の両方を考慮したうえで、きめ細かな指導が行われていると考えられる。

人材の流出については、成績の上位層と下位層が進路として県外を希望し、中位層が地元を希望する傾向が示された。特に進学を希望した場合、青森県内では大学の数も、学部の数も限られてしまう。学力的にみれば中位層の受け皿となる大学は一定存在するが、成績の最上位層や下位層を受け入れられる大学は存在しないのが実情である。以前行った弘前大学生に対する調査では、卒業後の初職地と大学における成績の間に有意な関係はみられず、高度な人材の流出は起きていないように見えた。しかし、今回の調査の結果から、高校卒業時点の大学選択において、高度な人材となる可能性のある生徒の県外への流出が起きている可能性が示唆された。最後に、重視する条件の結果から、生徒の中でトレードオフの関係があることが示唆された。特に、勤務地の希望と給料の間には逆方向の影響がみられる。県内賃金の向上などに取り組むことで、こうした関係が少しで

も弱まることを期待したい。

回答者の集計表

n=1098

計画サンプル: 2007 名

回収率: $11098/2007 = 54.7\%$

| F1 | 同居しているご家族の方をすべてお選びください。 | N | % |
|----|-------------------------|------|------|
| 1 | 父親 | 845 | 77.0 |
| 2 | 母親 | 1036 | 94.4 |
| 3 | 祖父・祖母 | 400 | 36.4 |
| 4 | 兄 | 172 | 15.7 |
| 5 | 姉 | 195 | 17.8 |
| 6 | 弟 | 290 | 26.4 |
| 7 | 妹 | 287 | 26.1 |
| 8 | その他 | 91 | 8.3 |

| Q1 | あなたが通っている高校の名前を教えてください。 | N | % |
|----|-------------------------|------|-------|
| 1 | 柴田学園高等学校 | 68 | 6.2 |
| 2 | 東奥義塾高等学校 | 75 | 6.8 |
| 3 | 弘前学院聖愛高等学校 | 141 | 12.8 |
| 4 | 青森県立弘前工業高等学校 | 34 | 3.1 |
| 5 | 青森県立弘前高等学校 | 119 | 10.8 |
| 6 | 青森県立弘前実業高等学校 | 212 | 19.3 |
| 7 | 青森県立弘前中央高等学校 | 199 | 18.1 |
| 8 | 弘前東高等学校 | 0 | - |
| 9 | 青森県立弘前南高等学校 | 121 | 11.0 |
| 10 | 青森県立黒石高等学校 | 35 | 3.2 |
| 11 | 青森県立尾上総合高等学校 | 56 | 5.1 |
| 12 | 青森県立柏木農業高等学校 | 38 | 3.5 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q2 | あなたが所属している学科もしくはクラスの名前を教えてください。 | N | % |
|----|---------------------------------|------|-------|
| 1 | 普通科 | 626 | 57.0 |
| 2 | 専門学科 | 221 | 20.1 |
| 3 | 特進クラス | 83 | 7.6 |
| 4 | 総合学科 | 27 | 2.5 |
| 5 | 定時制 | 42 | 3.8 |
| 6 | その他 | 99 | 9.0 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q3 | あなたは進学か就職かどちらを希望していますか。 | N | % |
|----|-------------------------|------|-------|
| 1 | 進学 | 840 | 76.5 |
| 2 | 就職 | 155 | 14.1 |
| 3 | 決めかねている | 103 | 9.4 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q4.1 | あなたが希望している進学先についてうかがいます。希望している進学先はつぎのどれですか。 | N | % |
|------|---|-----|-------|
| 1 | 4年制大学 | 649 | 77.3 |
| 2 | 短期大学 | 31 | 3.7 |
| 3 | 専門学校 | 135 | 16.1 |
| 4 | 専修学校 | 2 | 0.2 |
| 5 | その他 | 23 | 2.7 |
| | 全体 | 840 | 100.0 |

| Q4.2 | 第一志望の進学先の所在地を教えてください。 | N | % |
|------|-----------------------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 53 | 6.3 |
| 2 | 青森県 | 403 | 48.0 |
| 3 | 岩手県 | 29 | 3.5 |
| 4 | 秋田県 | 11 | 1.3 |
| 5 | 宮城県 | 134 | 16.0 |
| 6 | 山形県 | 5 | 0.6 |
| 7 | 福島県 | 6 | 0.7 |
| 8 | 関東甲信 | 155 | 18.5 |
| 9 | 東海・北陸 | 17 | 2.0 |
| 10 | 近畿 | 23 | 2.7 |
| 11 | 中国・四国 | 3 | 0.4 |
| 12 | 九州・沖縄 | 1 | 0.1 |
| 13 | 外国 | 0 | - |
| | 全体 | 840 | 100.0 |

| Q4.3 | 第一志望の進学先は国公立か私立かを教えてください。 | N | % |
|------|---------------------------|-----|-------|
| 1 | 国立 | 408 | 48.6 |
| 2 | 公立 | 75 | 8.9 |
| 3 | 私立 | 170 | 20.2 |
| 4 | まだ決めていない | 132 | 15.7 |
| 5 | どれでもよい? | 55 | 6.5 |
| | 全体 | 840 | 100.0 |

| Q4.4 | 第一志望の進学先の学部（専門）を教えてください。 | N | % |
|------|--------------------------|-----|-------|
| 1 | 人文学部（文学部，歴史，文学，語学，人類学など） | 82 | 9.8 |
| 2 | 社会科学部（法学，社会学，経済学，経営学など） | 120 | 14.3 |
| 3 | 教育学部 | 87 | 10.4 |
| 4 | 理学部 | 52 | 6.2 |
| 5 | 工学部 | 49 | 5.8 |
| 6 | 農学部 | 46 | 5.5 |
| 7 | 医学部 | 71 | 8.5 |
| 8 | 保健学部 | 82 | 9.8 |
| 9 | 決めかねていた | 86 | 10.2 |
| 10 | その他の学部 | 165 | 19.6 |
| | 全体 | 840 | 100.0 |

| Q4.5 | 第一志望の大学を選ぶ基準として、あてはまるものをすべてお選びください。 | N | % |
|------|-------------------------------------|-----|-------|
| 1 | 教育内容が良いから | 308 | 36.7 |
| 2 | 行きたい学部、学科があるから | 657 | 78.2 |
| 3 | 教師、友人の勧めがあるから | 59 | 7.0 |
| 4 | 家族や親戚の勧めがあるから | 101 | 12.0 |
| 5 | 経済的な理由で | 111 | 13.2 |
| 6 | 学校の成績や偏差値などから | 154 | 18.3 |
| 7 | その他 | 46 | 5.5 |
| | 全体 | 840 | 100.0 |

| Q5 | 父親が勧めている進学先の所在地を教えてください。 | N | % |
|----|--------------------------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 16 | 2.5 |
| 2 | 青森県 | 486 | 74.5 |
| 3 | 岩手県 | 14 | 2.1 |
| 4 | 秋田県 | 3 | 0.5 |
| 5 | 宮城県 | 50 | 7.7 |
| 6 | 山形県 | 2 | 0.3 |
| 7 | 福島県 | 2 | 0.3 |
| 8 | 関東甲信 | 60 | 9.2 |
| 9 | 東海・北陸 | 6 | 0.9 |
| 10 | 近畿 | 4 | 0.6 |
| 11 | 中国・四国 | 0 | - |
| 12 | 九州・沖縄 | 0 | - |
| 13 | 外国 | 9 | 1.4 |
| | 全体 | 652 | 100.0 |

| Q6 | 母親が勧めている進学先の所在地を教えてください。 | N | % |
|----|--------------------------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 25 | 3.1 |
| 2 | 青森県 | 577 | 72.5 |
| 3 | 岩手県 | 14 | 1.8 |
| 4 | 秋田県 | 3 | 0.4 |
| 5 | 宮城県 | 70 | 8.8 |
| 6 | 山形県 | 4 | 0.5 |
| 7 | 福島県 | 5 | 0.6 |
| 8 | 関東甲信 | 77 | 9.7 |
| 9 | 東海・北陸 | 8 | 1.0 |
| 10 | 近畿 | 7 | 0.9 |
| 11 | 中国・四国 | 0 | - |
| 12 | 九州・沖縄 | 0 | - |
| 13 | 外国 | 6 | 0.8 |
| | 全体 | 796 | 100.0 |

| Q7 | 進路指導の先生などが勧めている進学先の所在地を教えてください。 | N | % |
|----|---------------------------------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 32 | 3.8 |
| 2 | 青森県 | 538 | 64.0 |
| 3 | 岩手県 | 18 | 2.1 |
| 4 | 秋田県 | 5 | 0.6 |
| 5 | 宮城県 | 96 | 11.4 |
| 6 | 山形県 | 8 | 1.0 |
| 7 | 福島県 | 2 | 0.2 |
| 8 | 関東甲信 | 107 | 12.7 |
| 9 | 東海・北陸 | 11 | 1.3 |
| 10 | 近畿 | 12 | 1.4 |
| 11 | 中国・四国 | 2 | 0.2 |
| 12 | 九州・沖縄 | 2 | 0.2 |
| 13 | 外国 | 7 | 0.8 |
| | 全体 | 840 | 100.0 |

| Q8 | あなたが希望している就職先の所在地を教えてください。 | N | % |
|----|----------------------------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 0 | - |
| 2 | 青森県 | 84 | 54.2 |
| 3 | 岩手県 | 1 | 0.6 |
| 4 | 秋田県 | 0 | - |
| 5 | 宮城県 | 7 | 4.5 |
| 6 | 山形県 | 0 | - |
| 7 | 福島県 | 0 | - |
| 8 | 関東甲信 | 22 | 14.2 |
| 9 | 東海・北陸 | 3 | 1.9 |
| 10 | 近畿 | 4 | 2.6 |
| 11 | 中国・四国 | 1 | 0.6 |
| 12 | 九州・沖縄 | 0 | - |
| 13 | 外国 | 2 | 1.3 |
| 14 | 特に決めてない | 31 | 20.0 |
| | 全体 | 155 | 100.0 |

| Q9 | 民間企業で働くことを希望しますか。あてはまるものを1つお選びください。 | N | % |
|----|-------------------------------------|-----|-------|
| 1 | 民間企業を希望する。 | 74 | 47.7 |
| 2 | 公務員を希望する。 | 27 | 17.4 |
| 3 | どちらでもかまわない。 | 54 | 34.8 |
| | 全体 | 155 | 100.0 |

| Q10 | あなたが働きたいと希望している会社の業種を教えてください。あてはまるものをすべてお選びください。 | N | % |
|-----|--|-----|-------|
| 1 | 公務 | 46 | 29.7 |
| 2 | 農林漁業 | 7 | 4.5 |
| 3 | 建設業 | 13 | 8.4 |
| 4 | 製造業 | 30 | 19.4 |
| 5 | 電気・ガス・水道業 | 33 | 21.3 |
| 6 | 運輸・通信業 | 6 | 3.9 |
| 7 | 卸売, 小売業 | 14 | 9.0 |
| 8 | サービス業 | 35 | 22.6 |
| 9 | 金融・保険業 | 6 | 3.9 |
| 10 | 不動産業 | 2 | 1.3 |
| 11 | 教育・学習支援業 | 4 | 2.6 |
| 12 | 医療・福祉 | 18 | 11.6 |
| 13 | 飲食業・宿泊業 | 29 | 18.7 |
| 14 | その他 具体的に | 19 | 12.3 |
| | 全体 | 155 | 100.0 |

| Q11 | 高校の成績は次のどれにあてはまりますか。 | N | % |
|-----|----------------------|------|-------|
| 1 | 偏差値 25～34 | 61 | 5.6 |
| 2 | 偏差値 35～44 | 206 | 18.8 |
| 3 | 偏差値 45～54 | 547 | 49.8 |
| 4 | 偏差値 55～64 | 243 | 22.1 |
| 5 | 偏差値 65～75 | 41 | 3.7 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q12 | あなたは現在学内や学外のクラブやサークル, 部活に所属していますか。 | N | % |
|-----|------------------------------------|------|-------|
| 1 | 所属している | 794 | 72.3 |
| 2 | 所属していない | 304 | 27.7 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q13 | 現在の友人や知人の数を教えてください。 | N | % |
|-----|---------------------|------|-------|
| 1 | 30人以上 | 522 | 47.5 |
| 2 | 10～29人 | 349 | 31.8 |
| 3 | 5～9人 | 143 | 13.0 |
| 4 | 1～4人 | 57 | 5.2 |
| 5 | ほとんどいない | 27 | 2.5 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q14 | あなたは現在学習塾や習い事を行っていますか。あてはまるものをすべてお選びください。 | N | % |
|-----|---|------|-------|
| 1 | 学習塾に通っている | 136 | 12.4 |
| 2 | 習い事をしている（ピアノ、水泳など） | 109 | 9.9 |
| 3 | なにもやっていない | 870 | 79.2 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q15 | 現在持っている資格・免許の種類は何ですか。あてはまるものをすべてお選びください。 | N | % |
|-----|--|------|-------|
| 1 | 技術関係 | 76 | 6.9 |
| 2 | 医療・保健衛生・社会福祉関係 | 22 | 2.0 |
| 3 | 法律・財務・経営・不動産関係 | 25 | 2.3 |
| 4 | 教育関係 | 10 | 0.9 |
| 5 | 事務処理関係 | 72 | 6.6 |
| 6 | 営業・販売、サービス、保安関係 | 5 | 0.5 |
| 7 | 運輸・通信関係 | 1 | 0.1 |
| 8 | 製造・電気・建設・土木関連の技能関係 | 28 | 2.6 |
| 9 | 英語関係（英語検定、TOEIC） | 345 | 31.4 |
| 10 | 統計関連 | 1 | 0.1 |
| 11 | その他の資格・免許 具体的に | 199 | 18.1 |
| 12 | もっていない | 480 | 43.7 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q16 | 取得したいと思う資格・免許の種類は何ですか。あてはまるものをすべてお選びください。 | N | % |
|-----|---|------|-------|
| 1 | 技術関係 | 163 | 14.8 |
| 2 | 医療・保健衛生・社会福祉関係 | 275 | 25.0 |
| 3 | 法律・財務・経営・不動産関係 | 142 | 12.9 |
| 4 | 教育関係 | 181 | 16.5 |
| 5 | 事務処理関係 | 120 | 10.9 |
| 6 | 営業・販売, サービス, 保安関係 | 110 | 10.0 |
| 7 | 運輸・通信関係 | 34 | 3.1 |
| 8 | 製造・電気・建設・土木関連の技能関係 | 79 | 7.2 |
| 9 | 英語関係 (英語検定, TOEIC) | 428 | 39.0 |
| 10 | 統計関連 | 26 | 2.4 |
| 11 | その他の資格・免許 具体的に | 79 | 7.2 |
| 12 | 特にない | 184 | 16.8 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q17 | あなたの小学生・中学生・高校生のときのことについてお聞きします。以下のことを体験したことがありますか。すべての項目について、あてはまる場合は選んでください。 | 全体 | 1 小学生で 体験した | 2 中学生で 体験した | 3 高校生で 体験した | 4 体験した ことがな い |
|-------|--|---------------|-------------------|-------------------|-------------------|------------------------|
| Q17S1 | 学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある | 1098 100.0 | 513 46.7 | 306 27.9 | 138 12.6 | 478 43.5 |
| Q17S2 | 興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある | 1098 100.0 | 379 34.5 | 751 68.4 | 806 73.4 | 100 9.1 |
| Q17S3 | 職場見学や職場訪問をしたことがある | 1098 100.0 | 634 57.7 | 461 42.0 | 282 25.7 | 190 17.3 |
| Q17S4 | 職場体験やインターンシップを体験したことがある | 1098 100.0 | 289 26.3 | 330 30.1 | 314 28.6 | 415 37.8 |
| Q17S5 | 地域の祭りに参加したことがある | 1098 100.0 | 934 85.1 | 676 61.6 | 452 41.2 | 90 8.2 |
| Q17S6 | 地域のイベントに参加したことがある | 1098 100.0 | 832 75.8 | 530 48.3 | 307 28.0 | 181 16.5 |
| Q17S7 | 地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある | 1098 100.0 | 689 62.8 | 422 38.4 | 145 13.2 | 258 23.5 |
| Q17S8 | 有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある | 1098 100.0 | 705 64.2 | 545 49.6 | 206 18.8 | 265 24.1 |
| Q17S9 | アルバイトをしたことがある | 1098 100.0 | 7 0.6 | 8 0.7 | 270 24.6 | 823 75.0 |

| Q18 | あなたはつぎのようなボランティア活動を行ったことがありますか。 あてはまるものをすべてお選びください。 | N | % |
|-----|--|------|-------|
| 1 | 福祉に関係した活動（高齢者施設や福祉施設など） | 196 | 17.9 |
| 2 | 子どもに関係した活動 | 209 | 19.0 |
| 3 | スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動 | 177 | 16.1 |
| 4 | まちづくり・生活に関連した活動 | 259 | 23.6 |
| 5 | 環境に関連した活動 | 415 | 37.8 |
| 6 | 国際協力に関連した活動 | 29 | 2.6 |
| 7 | やったことがない | 342 | 31.1 |
| 8 | その他 具体的に | 9 | 0.8 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q19 | 「弘前（弘前市・津軽地方）」に対する意識についてお聞きます。あてはまるものを1つだけお選びください。 | 全体 | 1 あてはまらない | 2 あまりあてはまらない | 3 どちらともいえない | 4 ややあてはまる | 5 あてはまる |
|-------|--|---------------|--------------|-----------------|----------------|--------------|-------------|
| Q19S1 | 私は地域の一員であると感じる | 1098 100.0 | 81 7.4 | 120 10.9 | 278 25.3 | 350 31.9 | 269 24.5 |
| Q19S2 | 私はこの地域の将来のことが、とても気になる | 1098 100.0 | 129 11.7 | 172 15.7 | 243 22.1 | 364 33.2 | 190 17.3 |
| Q19S3 | 私はこの地域に愛着を感じる | 1098 100.0 | 82 7.5 | 88 8.0 | 198 18.0 | 415 37.8 | 315 28.7 |
| Q19S4 | この地域を離れることは、たとえ離れたくても、大変困難である | 1098 100.0 | 267 24.3 | 250 22.8 | 292 26.6 | 194 17.7 | 95 8.7 |
| Q19S5 | 現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである | 1098 100.0 | 105 9.6 | 152 13.8 | 348 31.7 | 284 25.9 | 209 19.0 |

| Q20 | あなたの性別をお知らせください。 | N | % |
|-----|------------------|------|-------|
| 1 | 男性 | 468 | 42.6 |
| 2 | 女性 | 591 | 53.8 |
| 3 | 回答しない | 39 | 3.6 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q21 | 父親の出身地を教えてください。 | N | % |
|-----|-----------------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 9 | 1.1 |
| 2 | 青森県（弘前市・津軽地域） | 691 | 81.8 |
| 3 | 青森県（弘前市・津軽地域以外） | 91 | 10.8 |
| 4 | 岩手県 | 4 | 0.5 |
| 5 | 秋田県 | 7 | 0.8 |
| 6 | 宮城県 | 3 | 0.4 |
| 7 | 山形県 | 2 | 0.2 |
| 8 | 福島県 | 6 | 0.7 |
| 9 | 関東甲信 | 15 | 1.8 |
| 10 | 東海・北陸 | 4 | 0.5 |
| 11 | 近畿 | 7 | 0.8 |
| 12 | 中国・四国 | 0 | - |
| 13 | 九州・沖縄 | 3 | 0.4 |
| 14 | 外国 | 3 | 0.4 |
| | 全体 | 845 | 100.0 |

| Q22 | 母親の出身地を教えてください。 | N | % |
|-----|-----------------|------|-------|
| 1 | 北海道 | 16 | 1.5 |
| 2 | 青森県（弘前市・津軽地域） | 773 | 74.6 |
| 3 | 青森県（弘前市・津軽地域以外） | 143 | 13.8 |
| 4 | 岩手県 | 16 | 1.5 |
| 5 | 秋田県 | 17 | 1.6 |
| 6 | 宮城県 | 14 | 1.4 |
| 7 | 山形県 | 1 | 0.1 |
| 8 | 福島県 | 3 | 0.3 |
| 9 | 関東甲信 | 26 | 2.5 |
| 10 | 東海・北陸 | 9 | 0.9 |
| 11 | 近畿 | 8 | 0.8 |
| 12 | 中国・四国 | 1 | 0.1 |
| 13 | 九州・沖縄 | 4 | 0.4 |
| 14 | 外国 | 5 | 0.5 |
| | 全体 | 1036 | 100.0 |

| | | | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------|----------|-------------------|------------------|
| Q23 | 父親，母親の学歴について教えてください。 | 全体 | 1 中学校卒 | 2 高校卒 | 3 短大・専門 学校卒 | 4 大学・大学 院卒 |
| Q23S1 | 父親 | 845 | 33 | 448 | 89 | 275 |
| | | 100.0 | 3.9 | 53.0 | 10.5 | 32.5 |
| Q23S2 | 母親 | 1036 | 22 | 522 | 243 | 249 |
| | | 100.0 | 2.1 | 50.4 | 23.5 | 24.0 |

| | | | | |
|-----|-----------------------|-----|-------|---|
| Q24 | 父親の職業を教えてください。 | | N | % |
| 1 | 公務員（自治体職員など） | 123 | 14.6 | |
| 2 | 公務員（教育職） | 59 | 7.0 | |
| 3 | 会社員 | 352 | 41.7 | |
| 4 | 専門職（医者，弁護士，税理士，看護師など） | 61 | 7.2 | |
| 5 | 自営業 | 115 | 13.6 | |
| 6 | 農林水産業 | 61 | 7.2 | |
| 7 | パート，アルバイト | 3 | 0.4 | |
| 8 | 契約，派遣，嘱託社員 | 8 | 0.9 | |
| 9 | なし | 13 | 1.5 | |
| 10 | その他 | 50 | 5.9 | |
| | 全体 | 845 | 100.0 | |

| | | | | |
|-----|-----------------------|------|-------|---|
| Q25 | 母親の職業を教えてください。 | | N | % |
| 1 | 公務員（自治体職員など） | 65 | 6.3 | |
| 2 | 公務員（教育職） | 61 | 5.9 | |
| 3 | 会社員 | 230 | 22.2 | |
| 4 | 専門職（医者，弁護士，税理士，看護師など） | 183 | 17.7 | |
| 5 | 自営業 | 72 | 6.9 | |
| 6 | 農林水産業 | 49 | 4.7 | |
| 7 | パート，アルバイト | 217 | 20.9 | |
| 8 | 契約，派遣，嘱託社員 | 22 | 2.1 | |
| 9 | なし | 80 | 7.7 | |
| 10 | その他 | 57 | 5.5 | |
| | 全体 | 1036 | 100.0 | |

| Q26 | 現在のご家族の暮らしの状況を経済的にみてどう感じていますか。 | N | % |
|-----|--------------------------------|------|-------|
| 1 | 大変苦しい | 42 | 3.8 |
| 2 | やや苦しい | 205 | 18.7 |
| 3 | ふつう | 596 | 54.3 |
| 4 | ややゆとりがある | 165 | 15.0 |
| 5 | 大変ゆとりがある | 90 | 8.2 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q27 | あなたが就職先を選ぶときに、重要だと思うものは何ですか。上位3つをお選びください。 | N | % |
|-----|---|------|-------|
| 1 | 希望の勤務地で働ける | 258 | 23.5 |
| 2 | 仕事内容が魅力的 | 458 | 41.7 |
| 3 | 労働環境がいい | 678 | 61.7 |
| 4 | 休日・休暇が多い | 471 | 42.9 |
| 5 | 福利厚生※が整っている | 295 | 26.9 |
| 6 | 将来性がある | 243 | 22.1 |
| 7 | 社会への貢献度が高い | 108 | 9.8 |
| 8 | 給料が高い | 713 | 64.9 |
| 9 | 大企業や有名な会社 | 45 | 4.1 |
| 10 | 親や先生の勧め | 10 | 0.9 |
| 11 | その他（具体的に | 15 | 1.4 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

| Q28 | あなたの保護者があなたの就職先を選ぶときに重要だと思っている条件は何ですか。上位3つをお選びください。 | N | % |
|-----|---|------|-------|
| 1 | 希望の勤務地で働ける | 338 | 30.8 |
| 2 | 仕事内容が魅力的 | 285 | 26.0 |
| 3 | 労働環境がいい | 702 | 63.9 |
| 4 | 休日・休暇が多い | 358 | 32.6 |
| 5 | 福利厚生が整っている | 342 | 31.1 |
| 6 | 将来性がある | 393 | 35.8 |
| 7 | 社会への貢献度が高い | 84 | 7.7 |
| 8 | 給料が高い | 669 | 60.9 |
| 9 | 大企業や有名な会社 | 67 | 6.1 |
| 10 | 親や先生の勧め | 32 | 2.9 |
| 11 | その他（具体的に | 24 | 2.2 |
| | 全体 | 1098 | 100.0 |

執筆担当者

| 氏名 | 所属 | 担当章 |
|------|-------------|-----|
| 李永俊 | 弘前大学 | 第1章 |
| | 人文社会科学部 教授 | 第2章 |
| | | 第3章 |
| 花田真一 | 弘前大学 | 第4章 |
| | 人文社会科学部 准教授 | 第5章 |
| | | 第6章 |
| | | 集計表 |

本報告書は、令和2年度～令和4年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「地域志向教育が地域愛着と就職地選択行動に及ぼす影響」（課題番号 20K02107・研究代表者・李永俊）の研究成果である。